

生活文化

生活文化同人会報 1998(平成10)年02月号 No.29

次回定例会案内	1
⑥ 韓国文化研修ツアーレポート	2
定例会報告	13
アラブを旅して／藤谷智史	16
⑤ 連載 シャガン その22	19
連載「夢屋ものがたり」⑦	20
97年度生活文化総会報告・世話人会報告	22
④ 同人活動・事務局より・編集後記	24

■ 定例会 98/2/27(金) 6:30~8:30PM

於: 中野区商工会館1階第2会議室

テーマ:「山と人との関わりについて」

講師:林野庁 飛山龍一



98年度の定例会は「木のいのち」を年間テーマに、これに関わる様々な分野の方のお話を伺う予定です。

1回目の今回は飛山さんにお願いしました。国内林業の現状や展望などについて、つっこみでお話を聞いていただく予定です。ご期待ください。

(世話人 松本昌義)

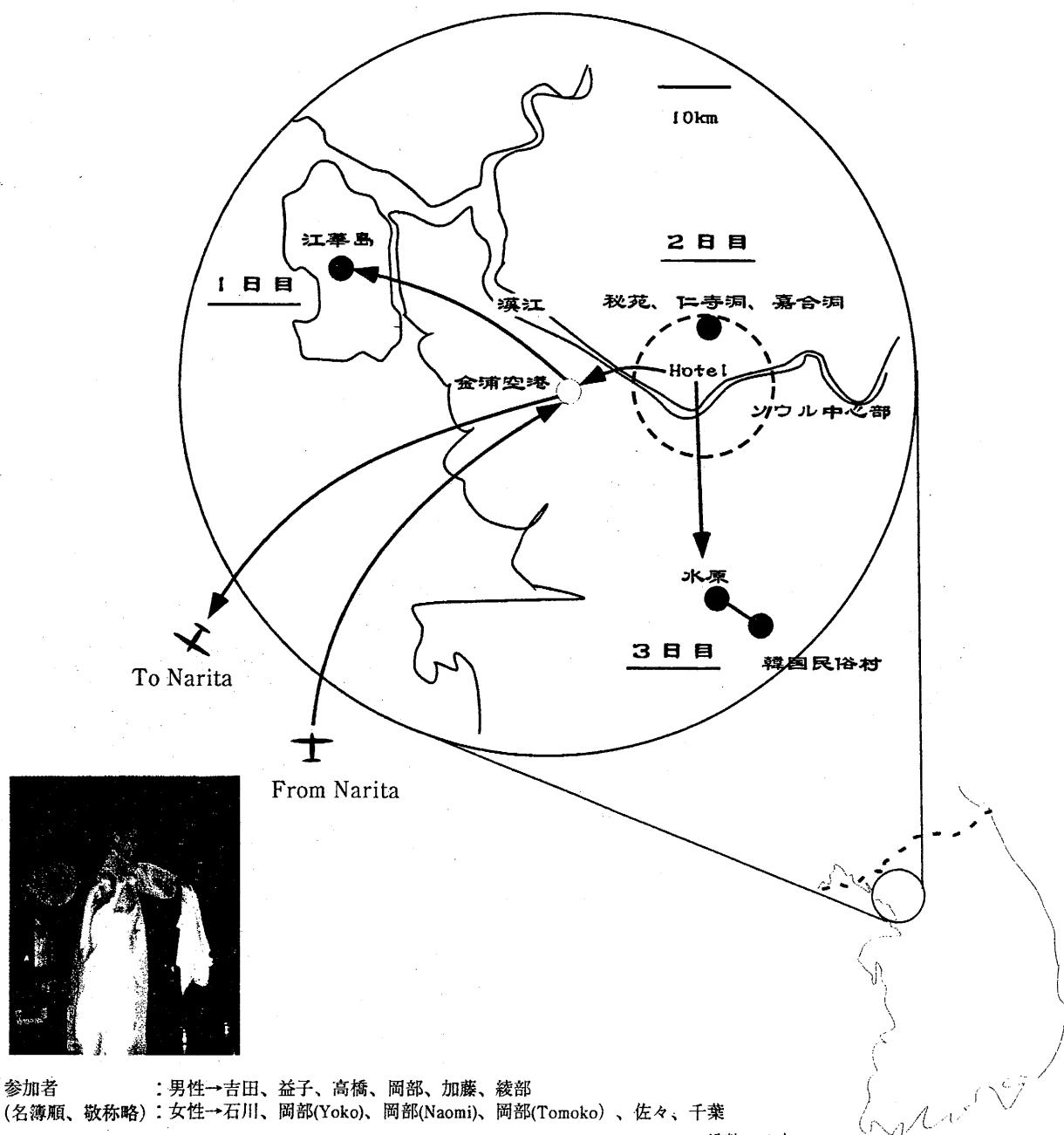
韓国建築文化研修ツアーレポート

綾部孝司

昨年の11月21日～24日まで、3泊4日の行程で韓国の建築等視察に行ってまいりました。同人では2回目という事もあり韓国通の方が多く、知識も豊富で、順調に予定通りの行程を消化することが出来ました。

特に今回は、1都市STAY型の行程だったために、ゆったりとしたペースで吉田先生をはじめ現地のガイドの方諸々氏の説明をお聞きすることが出来たことは、幸運であったと思います。

以下はその報告です。



参加者 : 男性→吉田、益子、高橋、岡部、加藤、綾部

(名簿順、敬称略) : 女性→石川、岡部(Yoko)、岡部(Naomi)、岡部(Tomoko)、佐々、千葉

総勢 12 名

I日目 (11/21) - 江華島 (カンファド) - 、雨

成田からソウルへ、江華島、伝燈寺、浄水寺観光後、ソウルにて山菜料理

ソウル金浦空港から専用バスで一路江華島 (カンファド) へ。

雨である。降り立った金浦空港とその周辺の風景は、日本のそれに似ているような気がする。やはり近い国なのだ、、、。

空港のバスターミナルで一同待っていると、間もなく専用バスが迎えに来た。時間は大体正午頃。バスはまもなく、田園地帯の道路を、漢江 (ソウルを流れる川) 沿いに西に走る。しばらく走ったところで、巻き寿司と缶ウーロンチャ (喫茶店には無いらしい) が振る舞われた。これまたどことなく日本に似ている。

専用バスから降り、小雨の降りしきる中、初めて見る初冬の島は、雨で霧がかり幻想的ですらある。

ただし、寒い。

その寒さの中一行は坂を上ること数分。やっと伝燈寺の宗海楼 (門) にたどり着く。朱と原色の緑色を使った木部の彩色は韓国の寺に共通するもので、毒々しいほど鮮やかである。120φ程の丸太垂木が放射状に組み上げられている様は、反りも相まって圧倒的な存在感がある。門をくぐり、ぬかるんだ土に足をとられながらもう数分歩くと、玉石を使った土壙に行き着いた。なんて美しいんだろう。第一印象である。このあといつも出会うであろう壙への期待が高まった。

二番目の目的地は、浄水寺である。こちらは、山の中腹に建つ。落葉の済んだ木々の中の石段を上りきったところに本殿はあった。山を背に海に開けた配置である。正面からも、背面からも美しい。自然と一体となった風景がそこにはあった。

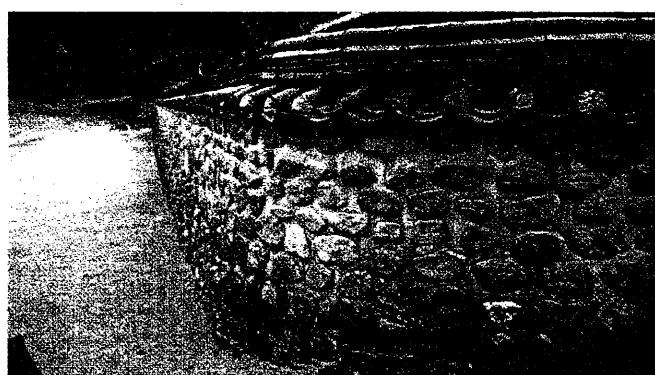
早速、吉田先生をはじめシティの高橋氏がペンを取る。皆それぞれの場所で一時を過ごし、バスに戻った。

さあ、後はソウルで夕食を取ってゆっくり休もう。、、、と思ったのもつかの間。ソウル名物大渋滞である。腕の良い運転手もテクニックを駆使できないほどの渋滞である。

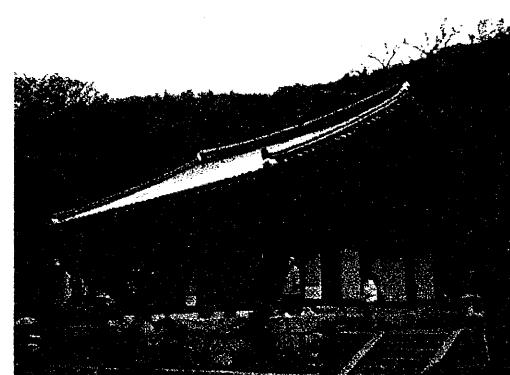
予定時間を大幅に遅れ、バスはソウル市内の山菜料理店山村 (サンチョン) に到着した。

山村は、元僧侶が経営する店で、200年ほど前に建てられた両班 (ヤンバン：武官、官僚) の家を改造したものである。柱はあるが開放されたその空間はダイナミックであり、大断面の松梁と太い丸太垂木が力づよさを感じさせる。

料理も抵抗無く食べれ、お酒はもちろん美味しく飲め、伝統舞踊も鑑賞でき、楽しい一時となつた。



伝燈寺の土壙 (トタム)



浄水寺大堂

2日目（11/22）—秘苑（ピウォン）他—、晴

秘苑、仁寺洞（昼食）、嘉会洞、国立中央博物館、ソウルにて焼肉

2日目になり、韓国の街に慣れたところで（もう慣れてしまっている。すばらしき順応性）、悲願の秘苑に向け出発する。（前回は時間が無く行けなかったとのこと。）

秘苑は、ソウル市街地の北側に位置し、地下鉄でホテル近くの駅から4駅ほどのところにある昌徳宮（チャンドックン：王宮）の後苑にあたる。中世から何度も拡張が行われ、現在は27000m²程の規模である。（昌徳宮の総面積は40000m²程）

一行は日本語のガイドツアーに参加し、中に入る。まずは、昌徳宮の説明が始まったが、秀吉の時代に焼かれてしまったなど日本との経緯についてもれなく説明がされる。

建物は、1日目の寺院などと共通する色使いであった。建築中（おそらく復元中）の建物があり、松の丸太柱、丸面取りされた梁などがダイナミックに組み上げられていた。ただし、王宮のわりに節だらけの木も使われているなど韓国らしいつくりである。塀などはさまざまなものがあり、土塀の他に煉瓦

や石と石灰モルタルを用いて幾何学模様を描いているものなど、昌徳宮だけでも1冊写真集ができるばかりそうである。ディテールを見ると直線が通っていないかったり、材料が無くなったりとさまざまであるが、全体としては大変美しい魅力あふれる塀であった。

そして、しばらく坂道を上り下りしているといつの間にか自然に秘苑

の中を歩いていることに気づいた。（そう、韓国の苑は自然のままで山あり谷あり、まるでハイキングをしている様）

この頃になると、周りには同人のメンバーしかいなくなっていた。ガイドツアーの方々は既に遙か前方に行ってしまっていたのだ。

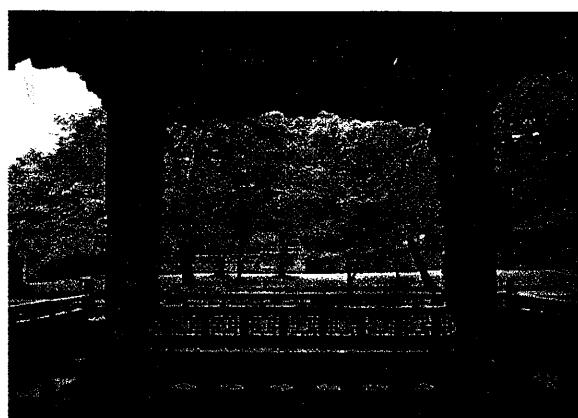
しばし、自由行動。（本当はダメ）その頃左手に不老門と愛蓮亭が見えてきた。その一角の美しさスケール感は体験してみないとわからない。

ひとこと

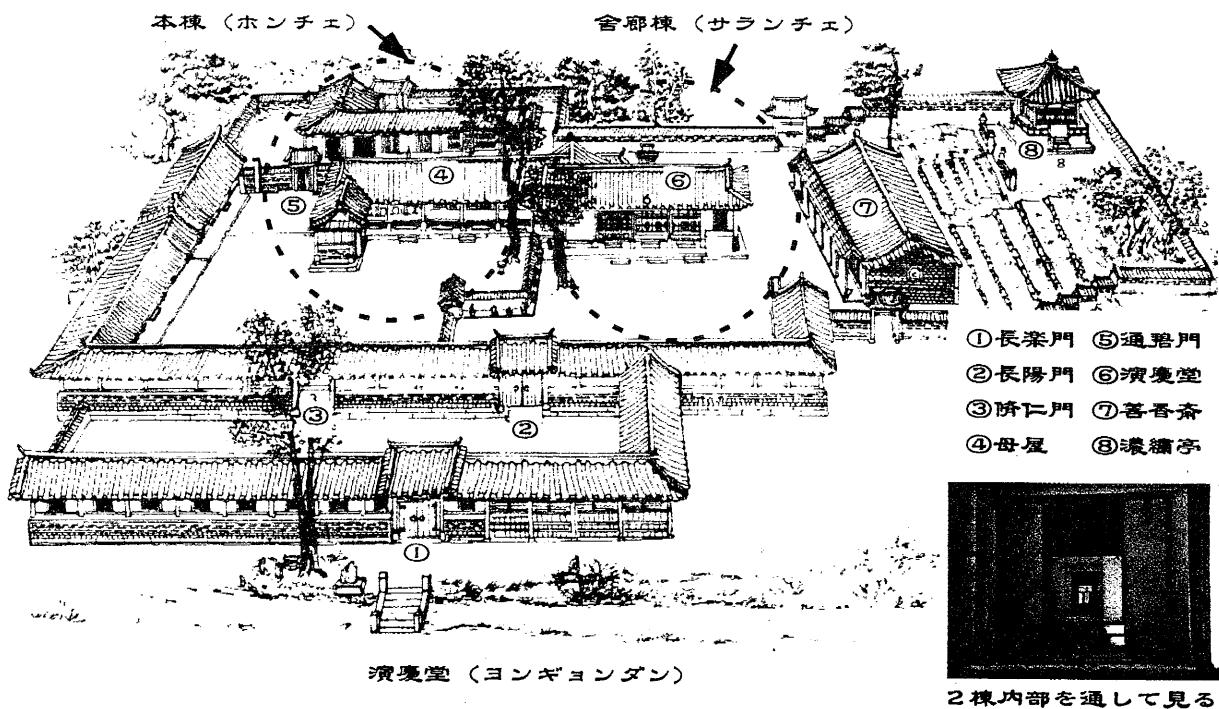
韓国の自然の楽しみ方は日本のそれとはちょっと違い、日本の場合には敷地の中（庭）に自然を造り上げるが、韓国での庭には、植栽などほとんどなく、自然を楽しむ場合には美しい場所に亭をつくってそこに出向き楽しむのである。愛蓮亭などは自然を我が手中に収めたかのような気にさせられる。



昌徳宮内の塀



愛蓮亭からの眺め



2棟内部を通じて見る

空間構成と視覚的処理が韓国でもっとも美しいとされる演慶堂（ヨンギョンダン）に到着したのはまもなくである。（演慶堂は、1828年李朝の純祖によって建てられた上流の住宅である。）

見るやいなや妙な愛着感が沸いてしまった。日本の建物によく似ているのである。軸組工法の真壁造りで、黒々と色の変化した柱、梁に漆喰壁と漢紙（和紙）張りの障子、そして屋根には黒灰色の瓦が乗っている。

開放的な開口部、板張りのチョイマルなどもまた日本を連想させる。
違いも勿論あり、約9尺角の構造グリットの組み合わせによる建物の構成、そして両班の家に共通の舎廊棟（主人用）と本棟（夫人用）との別などがあり、外部に開放された舎廊棟に比べ、本棟は閉鎖的であり、外部に対し閉じている。実際に長樂門の前に立つと長陽門を通じて舎廊棟がみてとれる配置となっている。

その他、さまざまな軸線上での一致や遮断、そして連続など、大変美しい構成となっている。
そうこうしているうちに、演慶堂には長居してしまった。おかげで次のガイドツアー（英語）に追いつかれてしまい、一緒に行動するように強要されたが、さらに演慶堂にとどまっていると、係員にお世話になる（追い出される）結果となってしまった。



本棟（ホンチエ）



舎廊棟（サランチエ）

さて、別場面。

その後、一行は骨董品通りの仁寺洞（インサドン）で食事を済ませると、嘉会洞に向かった。都市型の韓国住宅を見に行ったのである。30分くらい歩いただろうか、やっと嘉会洞に着いた。
(小高い丘の上にあるために見晴らしは大変良い。)

皆、辺りをうろうろしながら写真などを撮っていると、どこからともなく怒鳴り声が聞こえてきた。言葉はよくわからないので、自分たちに対して言っているのかもしれないなどと思いながらその場を立ち去る。

中が見れなかったのが悔やまるが、また行けばよいことである。

都市型住宅の特徴は、塀が建物の壁として壁石塀（ピヨクトルタム）になっていること、そして、中庭を持つコートハウスになっていることであろう。道路側の外壁（塀）には煉瓦が使われているため、一見すると組積造に見えるが、あくまで木造軸組構造である。

この後、国立中央博物館を見、夜は焼き肉を食べて2日目は幕を閉じる。国立中央博物館には日本の統治時代の模型が展示されていた。日本人は冷静に過去を受けとめる必要がありそうだ。

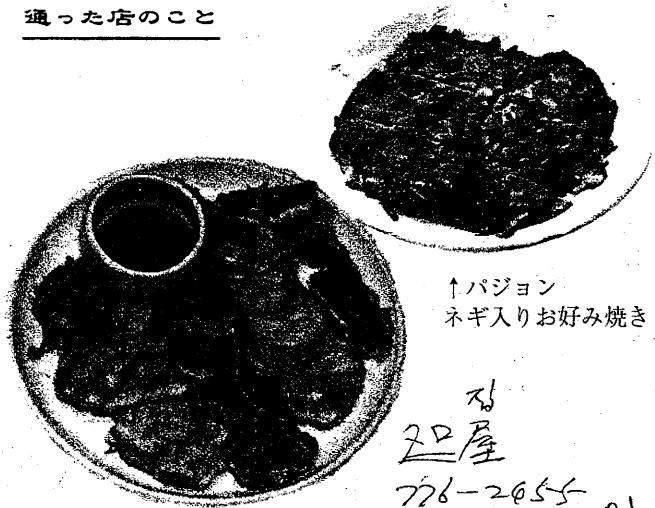


嘉会洞



嘉会洞の街路

通った店のこと



煎油花（チョニュファ）↑
魚、肉、野菜に小麦粉と卵を
つけて焼き、酢醤油で食べる。

↑パジョン
ネギ入りお好み焼き

↑
タロ屋
776-2055
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0

←タロ屋さんの店の方の直筆
これらを食べました。

タロ屋さんにはよく通いました。タロ屋とは、1日日夜に益子氏と私の2人でふらっと立ち寄った大衆食堂風の店のことです。

泊まったSAVOY HOTELの近くにあって、左の写真のような料理が食べれます。

夕飯の後だったので、飲むつもりで立ち寄った店でしたが、チョンユーファとやらを食べてみるとこれがとても美味しい、追加オーダーする始末。

結局毎晩通い、3日目には8人で食べ（飲み）に行きました。

タロ屋さんのご主人は日本語ができ、途中からは一人で日本のこと語っていました。日本語の本も読まれるそうです。

ソウル訪問の時に立ち寄ってみられてはいかがでしょう。

3日目（11/23）－水原（スウォン）他－、晴

水原、韓国民俗村、ソウルにて宮中寄せ鍋

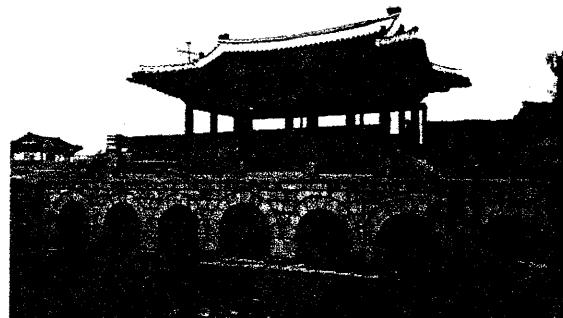
ソウルから南へ40kmといったところに水原の街はある。門の前が城壁で覆われた華西門、水上の門である華虹門などを見た後、さらに南下し韓国民俗村にたどり着く。民俗村では30万坪ほどの敷地の中に移築された建物の他、風習、生活が生き生きと再現されている。伝統文化を忘れかけているソウルの街と比べ、古き時代の韓国文化を体験することができる。生きた街とはいがたいが、藁葺き屋根のふき替えなども目前で行われており、充実している。

ここでは、昼食後自由行動となった。両班の家の他には農家の家も見ることができ、それぞれの特徴を比較するのには都合がよい。

農家の家は済州島（チエジュド）などの建物が移築されている。温穴（オンドル）はここでも見られた。これらの建物は、藁の葺き方を除けば、一見日本の農家と変わらないようである。

結局、夕刻まで民族村を楽しみ、一行はソウルに向かう。

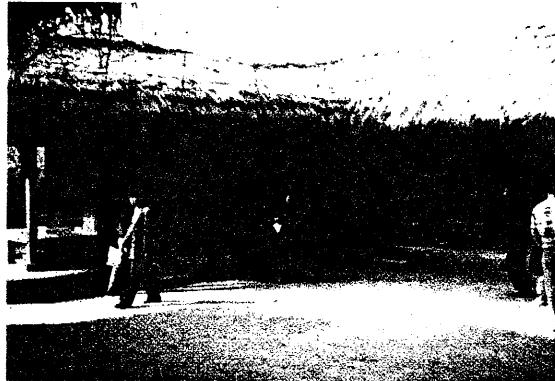
最後の晩と言うこともあり、宮中寄せ鍋で舌づつみを打ち宴は続いた。その後2次会、3次会、.....



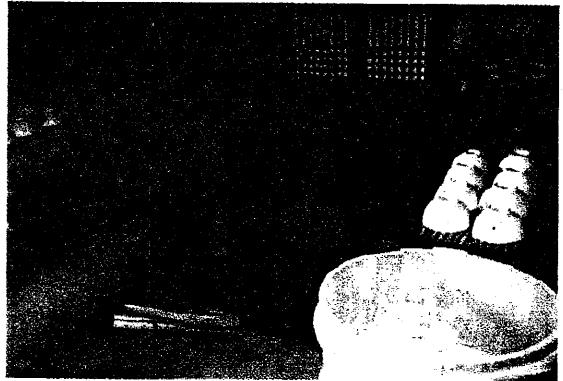
水原城華西門（川にかかる門）



結婚式の様子（民俗村）



チエジュドの民家（民俗村）



民家の釜屋（民俗村）

4日目（11/24）－自由行動－、晴

自由行動（ショッピング、タウンウォッチングなど）の後、帰路へ

朝から自由行動である。私が起き朝食をとりに行くと、早い方々は既に出かけていた。景福宮（キョンボックン）、市場、ショッピングなどにそれぞれが出かけていった。

その後、正午過ぎにもう一度ホテルに集合して、金浦空港行きの専用バスに乗り込み帰路に着く。

あとがき

今回のツアーでは、吉田先生をはじめ、住建の石川さん他同行の方々には色々とお世話になり有り難うございました。韓国は初めてだったのですが、色々な面で韓国を感じることが出来ました。私は主に大工をしていますので、木の組み方、板の納め方など、日本と同じように見えて実は異なる部分などを目で確認できたことは大変有益でした。いづれまた訪問することになると思いますがその時が楽しみです。

서울への旅行

韓国への旅行も度重なる。最初の頃と今では、國が違うのではないか、と思ふほど、この國は変貌した。月城や河回などの保存村の保存修景は見違えるように行きとづいてきたが、観光地の様相を深めている。今建てられてゐる住宅は、良いと

おもて

はとても言えない代物でしかない。

この國の伝統的生活はどうなつてしま

うか、また、伝統

技術はどう生きる

のか。民族のアイデンティは守られていふのが、いくつの設問

か。脳裏をかぎめる。

しかしこの設問は、自分の自分達に返ってくることにモ
気付かねばならぬ。



■建築文化研修ツアーに参加して…

筑波大学芸術研究科デザイン専攻MC1年次

千葉 由歌子

私が「生活文化同人」の活動に参加したのは、「第三回・大平建築宿」に続き、この「韓国・建築文化研修ツアー」が二回目となる。今回は少々高額なツアーであったので、学生の身分で行く旅行ではないなと初めは躊躇（→帰国後、財布の紐がきつかった。）したが、日中は韓国の建築文化を見学で満喫し、夜は食すること！？で韓国の文化に接することができ、よい経験になった。そして、なによりも私の目指すところの『保存・再生問題』に真っ向から立ち向かっていらっしゃる諸先輩方と同行できたことが一番の収穫だったと思っている。

見学を通じて私は無意識に韓国の建築・都市の実情を日本のそれと照らし合わせ、比較していた。間仕切りや暖のとりかた、施工の完成度などなど…違いはあっても、日本の文化のルーツはこちらに連鎖しているのだなと思い当たる節が多くあった。大学での講義で韓国の民家と日本の民家をスライド等で比較するなど多少は聞きかじりの知識はあったのだが、実際、体感するのとはわけが違う。そして、韓国の古建築・民家を見て得た感慨は、「このなつかしさはいったい何なのだろう。」という思いである。現代の日本人はとかくアジア諸国についてよりは西洋に関心を向けがちであって、わたしもあながちその傾向があつたのだろう。目から鱗がおちた感があった。日本の文化の形成が中国・朝鮮など、隣国の国々と無縁であるはずがないのであって、共通項があるのは当然といえばそうなのだが…。まだ学生ながら、私なりに現代の無秩序な暮らしに疑問を感じ、歴史的な景観に感動を覚え、それらを再生させながら現代の暮らしに結び付けていくにはどうしたらよいのだろうと考えるようになって以来、それらがどうして形成されて行つたのか歴史をもっと知らなければという想いに駆られてはいたが、今回なんと自分が無知であったのかまた自覚させられた次第である。

それでもうひとつ強く感じたのは、韓国を襲う西洋化の波である。ソウル中心部はもとより空港から江華島の間は民家は老朽化し、新しいフラットルーフの近代住宅が目下増設中であった。それらの何と醜いことか。木は切り倒され、鉄筋コンクリートのビル群が建設されていく。コルビジェの計画都市のようにビル・集合住宅群が立ち並ぶ都心。移動のバスの中から外を眺めながら、ふとそんな事情にも日本との共通点を感じせずにはいられなかった。懐古主義的に昔がよかったなどとは思わない。しかしあまりにも自分たちの生活・文化を蔑ろにしてはいないだろうか。この近代化の波をだれもがよいと思ってはいないはずである。この日本・韓国これらの問題は、私たち若い世代にとって、ますます大きな課題となってなっていくだろう。

二度目の韓国旅行

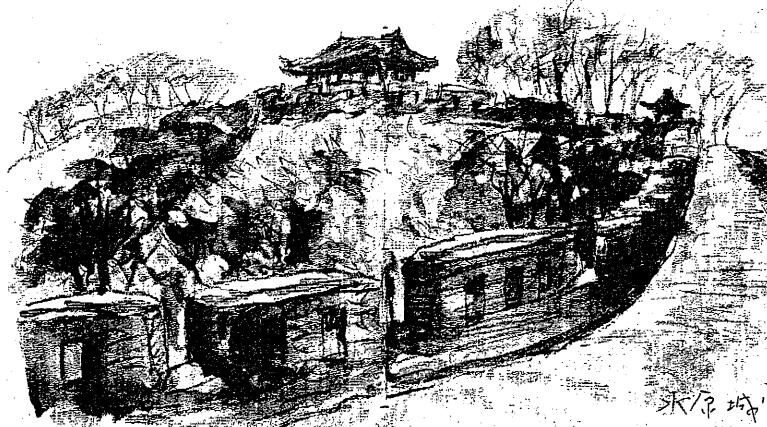
岡部知子

今回の韓国の旅は、大移動をしたもの、食事からバスまですべて用意されていた昨年とはちょっと違った。二回目であるということ、便利なところにあるひとつのホテルを基地にカメラと財布にガイドブックだけを持っての見学が出来たということもあり、日本とは勝手の違う地下鉄にも挑戦できたこと、予約なしでもお店に飛び込んで、食事やお酒を注文することができたなど、私にしてみれば大きな進歩でした。

今回見た所は、王宮や古い寺院など、歴史と権勢を感じさせられる建物を中心でしたが、私たちの基地となった明洞（ミョンドン）では、ケンタッキーフライドチキンやドトールコーヒー、若い人相手の洋服屋などが沢山並び、まるで渋谷にでもいるような、にぎやかで現在の都会の韓国を感じることができました。

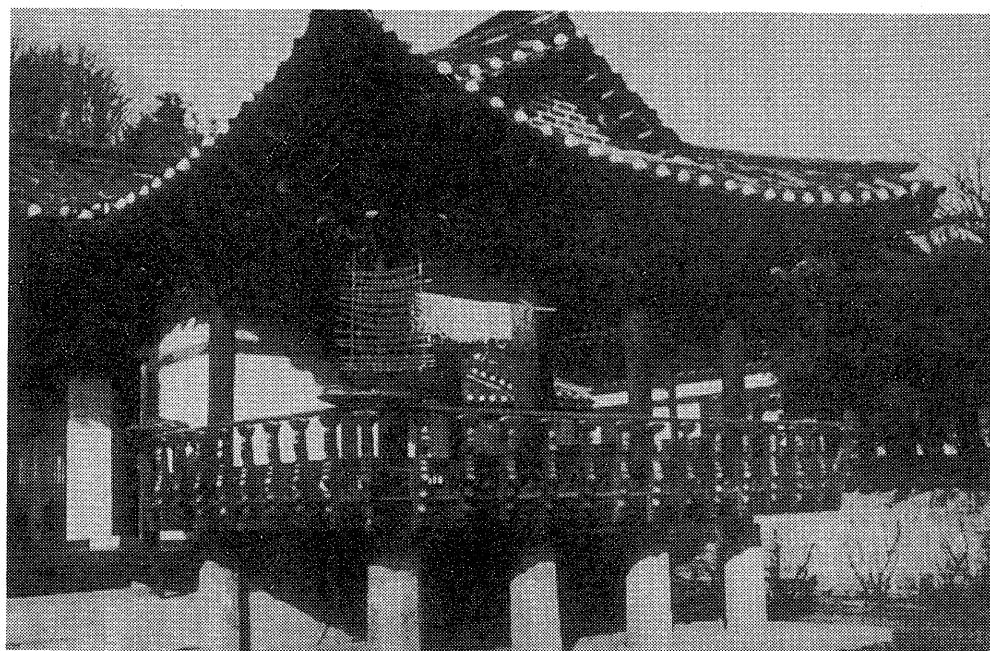
渋山見て廻った宮殿と寺院は、極彩色に塗られているものが多く、色のすごさに圧倒されそうでした。しかし、昌徳宮（チャンドックン）の樂善斎は、落ち着いた自然のままの色、安らいだ気持ちになって、たたずむと近くの雜木林の高木のカケスの巣が目に入ってくる、そんな場所でした。他の建物と違いインパクトのなさが、なぜか心に残った所でもありました。數十分前にガイドツアード一緒にに入ったものの、なぜかバラバラになった同人メンバー全員、申し合わせたように樂善斎で一緒になった。政略結婚させられた、日本人である梨本宮方子さんが、十年近く前まで住んでいたということに、何かを感じたのか、質素な建物でもそこに何かを感じたのかは、わからないが……。していくつ見てもいいのが、手間暇惜しまずに、作られたと思われる土壙。石と瓦、土に漆喰の組み合わせ、二つと同じ物がなく、それに美しい、本当に美しい。

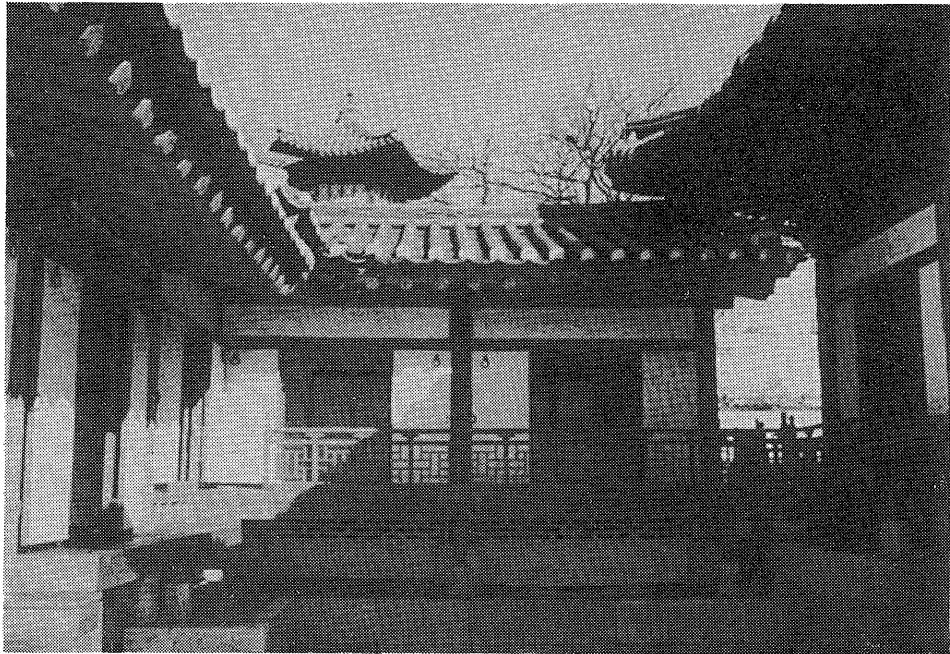
子供二人同行の旅で、参加された皆様には、本当にお世話になりました。「海外旅行に行く、友達の家はハワイとかアメリカに行くのになぜウチハ韓国ナノ？」という娘たちでしたが、来年行くならまた行きたいと言う。おじいちゃん（私の父）の生れた韓国を見せられて良かったと思う反面、今から旅費ためなくちゃ……。



「韓国建築ツアーハ」に参加するにあたって、私は朝鮮語に関する数冊の本を読んだ。それらの本に共通して書かれていたのは、朝鮮語と日本語とがいかに似ているかということだった。主語や動詞をよく省く、動詞が文末にくる、単複の区別があいまい、関係代名詞がないなどは日本語の特色であるが、朝鮮語もまったく同じなのだという。そして、こうした類似点が一体何に由来するものなののか、その理由として、日本も朝鮮半島も共に長い間、中国文明の強い影響下にあったことを挙げている。朝鮮半島経由で仏教、儒教を受け継ぎ、さらには言語表記の手段としての漢字まで貰った日本は、朝鮮半島の諸国と精神文化や道徳的思考といった文化要素まで共有する結果となつたのである。ならば建築はどうなのだろうか。建築もまた中国文明の強い影響を受けているなら、日本と韓国の建築はよく似ている筈である。そんな漠然とした期待を胸に、韓国に向かったのである。

実際には全く期待以上に日本と同じようなものがたくさんあって、驚きの連続だった。特に、ソウルの秘苑の一画にある演慶堂を見た時の感動は、言葉ではなかなか言い表せない。黒い柱と白壁のコントラスト、和紙（韓紙？）貼りの壁、繊細で華奢な建具、重そうに頭をもたげた本瓦、素朴で暖かみのある土塀。それらは部分において強烈な韓国らしさを主張しつつも、私の命の奥の方にある何物かと共に鳴するのを、感じないわけにはいかなかった。とはいっても、たった3泊4日の滞在で、日本と韓国は同じだという結論を急ぐのは軽薄というものである。何が同じで何が違うのか、これから時間をかけて探っていきたい。





従来の日本文化論、建築論は、ひたすら欧米と比較対照するというやり方が多かったように思う。よくありがちなのは、ヨーロッパの「石の文化」「鉄の文化」に対して、日本を「木の文化」と位置づけ、そこから大胆にも「日本民族は、その繊細さと感受性の強さにおいて、他の民族とは比較にならない」という日本人論にまで発展させるやり方である。これらの論の弱点は、アジアをすっとばして全く条件の異なる地球の裏側の地域と比較を試みていることである。類似性の少ないものどうしを比較すれば、多くの相違点が見出されるのは当然のなりゆきである。同じ「木の文化」を持つ韓国と比べてみないことには、つっこみが浅いといわれても仕方がない。韓国の建築との比較を繰り返す作業の中でこそ、日本の建築、日本文化というものを正確に把握することができるのでないかと思うのである。

繁華街の焼肉屋での夕食の折、吉田桂二氏から、「韓国にも町並みの保存にとりくんでいる人々がいる。彼らと交流する場を設け、意見交換してはどうか。」との提案があったが、私はその提案に心から賛同する。韓国人にしかみえない日本の問題点もあるだろうし、その逆もありえるだろう。いずれにしても、隣国同士もっと仲良くすべきなのだ。こういった文化的な絆こそが、眞の平和友好につながると私は確信している。

連合設計社市谷建築事務所 佐々 伸子

12月定例会報告

J・ラスキン 「建築の七燈」 を読む

講師：高橋照男氏（連合設計社市ヶ谷事務所）

ジョン・ラスキンは、ウィリアム・モリスに多大な影響を与えた19世紀の思想家であり、1849年から53年の間に続けて世に出した著作「ヴェニスの石」、「建築の七燈」が建築だけでなく、様々な分野に影響を与えたという。今回の定例会では、積算のスペシャリスト高橋照男氏にジョン・ラスキンの「建築の七燈」を読む、と題してお話しをいただいた。

内容は以下の3つの骨格で構成されていた。

- ① ジョン・ラスキンの思想が様々な分野に与えた影響について
- ② 「建築の七燈」の概要、七燈の意味、建築を導く7つの思想
- ③ 「建築の七燈」の聖書的背景について

以下講演の概要を報告する。

① ジョン・ラスキンの思想が様々な分野に与えた影響について

この章は、聞こえてきたラスキンの評判と題して、経済学、政治学、美術、建築、宗教、社会思想に渡って影響を与えたラスキンの著述、並びにラスキンに関する著述の紹介と解説であった。特に、「コルビジェのラスキンへの傾倒は非常に強い」（モダニズムの波紋とその行方—長谷川堯と平良敬一対談・住宅建築1997年3月号）というお話しさは、コルビジェヒラスキンが思想の上でリンクしていたとは全く知らなかったので、大変興味深かった。更に、ラスキンの偉大さを表している文章の中に、印象に残る文章が二つあった。(1)「ヴェニスの石」賀川豊彦訳（昭和7年）の賀川豊彦の訳者序文、(2)中央公論美術出版福田晴虔訳1994年に対する長谷川堯の推薦文である。

- (1)「（建築が）単なる物質の変動の一つの表れではなく、神と永遠への思慕の表れであることを理解してくれるならば、それほど私に幸福なことはない。」
- (2)「ヴェニスの石」が19世紀後半から20世紀初頭にかけての世界中の建築家たちに与えた影響は、実に計り知れないものであった。英国のアーツ・アンド・クラフト、アメリカ近代建築のパイオニヤ、サリヴァンや、その偉大な弟子、ライトなどが、青年時代にこの本を愛読して、彼らの創造力の重要な源泉の一つとした。」

この章最後に、作年、神奈川県近代美術館で開催された「自然の美・生活の美—ジョン・ラスキンと近代日本展」における、日本の絵画と建築に与えた影響について、カタログを交えたお話しがあり、特に、ラスキンの影響が強いと言われる

松沢教会（昭和六年、設計：西村伊作）は美しく、ぜひ見てみたい建築であった。

② 「建築の七燈」の概要、七燈の意味、建築を導く7の思想

今回の主題である「建築の七燈」において、高橋氏は、ラスキンは何を「七つの燈」と言うのか、その本質と思われるキーワードを、生活文化同人会報（1997年10月No.27）P20, 21に、すでに発表されている。その冒頭と末尾の文章は、高橋氏のラスキンへの篤き思いが、とても良く表れている。そして、今回の講演の根幹を成していると考えるので、ここでもう一度読みなおしてみたい。

冒頭の文章

ジョン・ラスキン（英国の美術・建築評論家1819-1900）著『The Seven Lamps of Architecture』（建築の七燈）の第6章2節に次の言葉がある。『人間の忘却に対する強き征服者はただ二つあるだけである。それは「詩」と「建築」である。しかも後者は幾分前者をも含み、その実在性において一層有力なものである。』人間の作り出す文化のうち忘れ難きものはそれは詩と建築、しかも建築は詩以上のものであるとラスキンは言う。建築は詩以上のものであるとは我々を鼓舞する言葉である。

「建築の七燈」を通してラスキンは建築は単に物質の塊ではなく精神の結晶であることを言っている。そしてそれは神の栄光を表現する人間の営みであり、神への賛歌なのであると言う。「建築の七燈」（岩波文庫で復刊）はラスキン34歳の時の建築論である。建築の本質を導くものとして七つの灯をあげ、この七つの灯を内にもつ建築をラスキンは理想とする。普通この本は建築史や芸術論の方面から取り上げられて論じられる場合が多いが、私は本書は「建築労働者の幸福論」であると読む。つまり神と建築と経済が調和するところに労働者の幸福がある。

末尾の文章

建築は、それにたずさわる者が幸福であるときに良い建築になる、というラスキンの言葉は至言である。

ラスキンの根本思想をただ一言で表現すれば「生命以外に富はない」ということになる。モ里斯がラスキンの影響を受けたのもこの辺にあろうかと思う。モ里斯だけでなく芸術家も建築家も経済学者もその他多くの人がラスキンに影響を受けるのはこの点であると解す。

「永遠」「愛」「生命」「美」「自然」「労働」などの言葉はラスキンにかかると急に輝いてくる。それはラスキンがその言葉の中に生きていたからであると思うのである。

③ 「建築の七燈」の聖書的背景

高橋氏は、「建築の七燈」の解説の鍵は、ラスキンが示す七つの思想（犠牲、真

実、力、美、生命、記憶、従順）はそれが神の性質から流れ出るものである事を知ることである、と述べておられる。この章は「建築の七燈」からの引用文と、それらの思想の源流である聖書的根拠の比較論であった。

例えば、序にある次のラスキンの言葉、

『わたしは芸術の中の第一のものとして、あえて「建築」を挙げ、建築に関する特有の諸法則を以下に叙述する。もし私の述べることについて、読者が真実であると理解することになれば、ここに述べられている法則は、他のあらゆる法則の誤謬性を弁護するに終わらず、人間のあらゆる種類の成功の源となる法則になるだろう。私はこれらの法則を「建築の燈」と呼ぶことにする。』という文章に対し、聖書の句として、

あなたの御言葉は、わたしの道の光

わたしの歩みを照らす灯。 詩篇 119：105

をあげ、ラスキンは「建築の七燈」の根本思想を旧約聖書のこの句においている、とし、以下第一章「犠牲の燈」から第七章「従順の燈」まで、聖書的背景の詳細な解説をして下さった。

今回の定例会は、「建築の七燈」の再訳（鹿島出版会、杉山真紀子訳）が出版された時期に重なり、とてもタイムリーな企画であったと思う。

そして、近代建築を切り開いた建築家達が、独自の建築思想、建築作法を創りだした事実の背景には、多大な影響を受けた思想が存在するということを、ラスキンの思想の偉大さを通して再認識し、高橋氏の「建築の七燈」は嗜めば嗜むほど味のある本であるという言葉に接して、これから何回も読みなおしてみたいと思った。

今回高橋氏には、限られた時間内でジョン・ラスキンを語っていただいたこと、また中味の濃いレジメを用意して下さった事に感謝申し上げたい。

定例会報告 吉塚幸雄

アラブを旅して

藤谷智史

最初に海外旅行に出たのは大学3年の夏、25日間のヨーロッパ一人旅でした。

ここ数年は、毎月2万円ずつ貯めて1年で24万円、これを資金にして毎年10～20日程度の旅をしています。ちなみに24万円の内訳は、

エアチケット、ビザ代	15万円
現地での移動、ホテル、食事代等	5万円
国内での移動等	4万円
合計	24万円

といった、おそらく貧乏旅行の旅です。

昨年の9／16～30は、レバノンから入り、シリア、ヨルダンと旅をしてきました。これはいわゆる「アラブの国々」、なかなか興味深い体験をしてきました。この旅を通しての教訓を少し紹介します。

◆ アラブの国は、まずアラビア語の数字を覚える

アラブの国では、あのミミズが這ったようなアラビア語が氾濫しています。英語が見あたらないことも多く、最初は不安になります。教訓は、まずアラビア語の数字だけでも覚えててしまうことです。

我々の使っている数字 これは、アラビア数字 少しまぎらわしい	○ 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
アラビア語の数字	・ ۱ ۲ ۳ ۴ ۵ ۶ ۷ ۸ ۹ ۱۰

注意するのは、7は6で7ではないこと。

・と○の区別でしょうか。

とりあえずこれだけ覚えると、買い物もなんとかなります。バスに乗る時でもバス番号を読むことができます。アラビア語しか話せない人とも、数字の筆談だけで結構コミュニケーション出来るものです。

◆シリア、ヨルダンは親日的だった

どうやらこの国の人たち、日本のことをかなり尊敬しているようです。それは、なにに対してか？ まず日本の戦後復興。屋台でコーラを飲んでいたとき、地元の青年が「第二次大戦で完璧にやられたはずのあの日本が今や世界を揺るがす経済大国、我が国は見習わないといけないんだ。」と、語ってくれました。この内容は、どうやら中学校の教育あたりでも語られているようです。

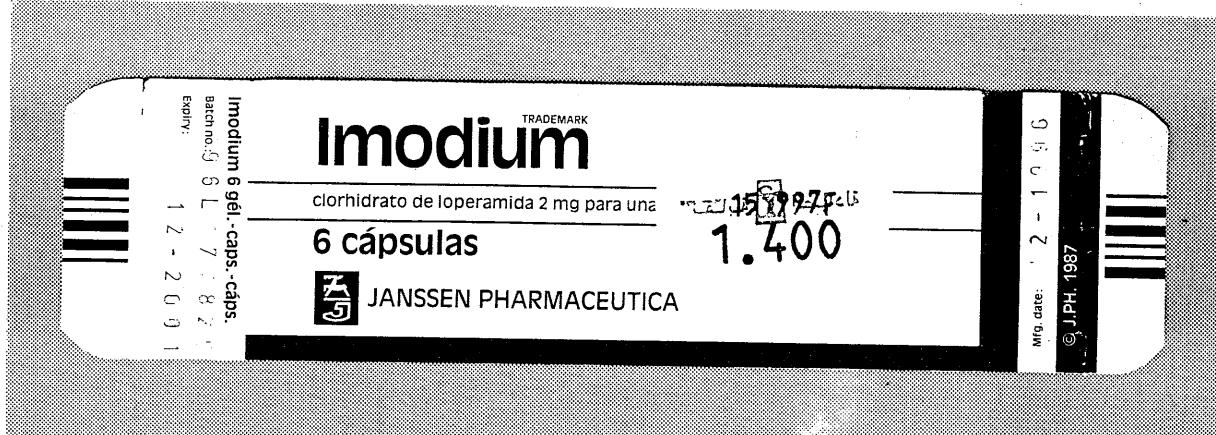
2つ目に日本企業の影響の大きさ。「ニコン、セイコー、トヨタ・・・見て見ろ、日本のもの（Made in Japan）ばかりだろう。日本はすごいよ。」これもよく聞いたこと。どうも、サクセスストーリーのサンプルにあげられてしまします。そんなこんなで、非常に親日的になっているということでしょうか。



シリア パルミラ遺跡にて

◆その国の病気は、その国の薬でなおす

外国では何故か正露丸が効きません。昔、インドで腹をこわしたときも、今回ヨルダンで腹をこわしたときも、日本ではあんなに効く正露丸が全く効きませんでした。幸いにも街のあちこちに薬局があります。これは、緑の十字マークですぐにわかります。ヨルダンの田舎町で薬を買って飲んだらピタリとなおりました。（その後お腹は絶好調でした。）値段も300円ぐらいで、日本で買って持つて行くより安いです。



買った薬のパッケージ

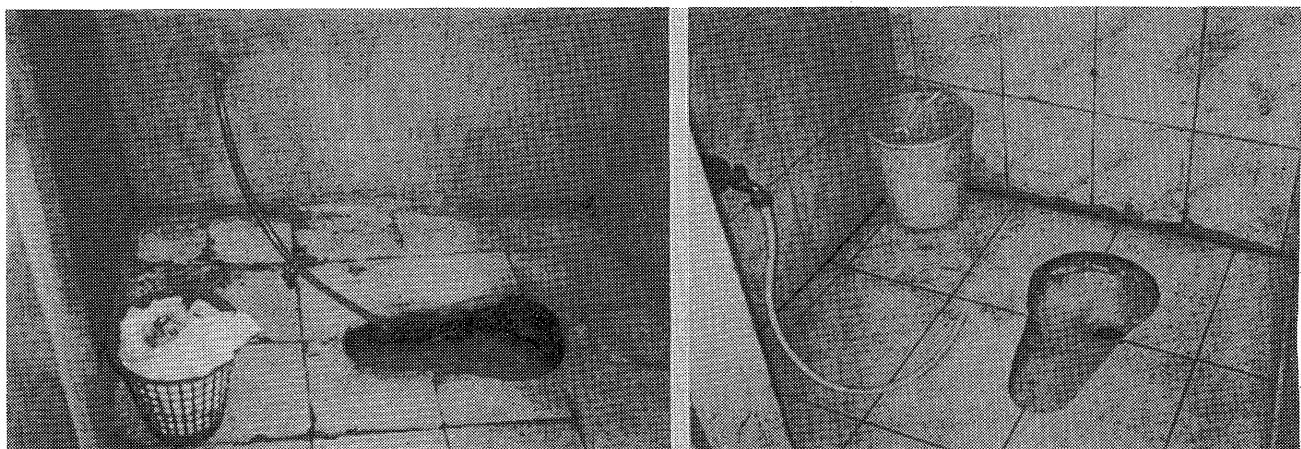
◆アラブはアメリカが嫌い

旅をしていて10日ぐらいいたった頃、ふと「そういうえば、アメリカ人旅行者がいない」と気づきました。よく考えてみると、「ああ、そうか」とわかったことですが、アメリカはあの湾岸戦争でアラブの国と戦ったのです。そして、イスラエルのこともあります。これらは、非常に深い問題のようで、“アメリカはアラブの敵だ”と、学校の歴史の授業でも習うようです。日本が1945年に敗戦したことによく知っています。(だからこそ、日本の戦後復興が、偉大なことに映るのでしょうか。)

いずれにしろ、アメリカに右向け右している(ように見える)日本とはずいぶんと、基本的な価値観が違うようです。

◆トイレに紙が流せない

アラブのトイレは日本の和式トイレと似ています。「トルコ式トイレ」と同じものです。紙は使わず、水と左手でオシリを洗います。ウォシュレットということです。だから、「ぢ」の人が少ないと聞きます。しかし、日本やヨーロッパの旅行者は、なかなかこれに馴染めずに紙を使います。ただ、紙は一緒に流せないです(たぶん汚水管が細く、詰まってしまうのだと思います.)。必ず近くにゴミ箱が据えてあり、紙はここに捨てないといけません。



アラブのトイレ

と、ここまで今回の旅で得た私の“教訓”的なものを書き並べてみましたが、私はどうやら、旅をすることで日常の設計活動に向けての「気持ちの充電」をしているようです。そして、これからも少しづつ、この「充電」をしていこうと思っています。

シャガンその22

江原久紀

みなさん、新年あけましておめでとうございます。

今年も、宜しくお願ひいたします。

昨年書けなかったのですが、うちの高木親方が10月17日に、日本建築士会の伝統的技術者賞を頂きに九州宮崎に行ってまいりました。受賞者は全国で35名、各県一人ずつに行き渡らないそうで、業種も伝統技法を守り建築に携わる職人、大工、左官、宮大工、堂営大工、彫刻大工、鍛治師、建具工、家具工、石工、板金工に送られたそうです。ちなみに、ここ数十年群馬でシャガン屋が受賞したことは記憶にないそうで・・・60歳以上の人だそうで。ちなみに親方は、最年少だったそうです。

本当に弟子ながらすげえ親方だとおもっています。で、どんな技法で賞をもらったかと言うと、今で言うプレキャストコンクリートのこと、正確に言うとプレコンとは全然ちがうんですがね。まあ、昔ながらの石膏型抜きについてなんですよ。

自分がシャガン屋になってからも型抜きは何回もやりましたよ。親方については20を超える現場をやりこなして来て、石膏型抜きは従来どおり油土で原型を作り寒天でメス型を抜きそのメス型で石膏を抜く工法、これは主に小物を抜くときにする方法でして、内装装饰品などですかね。で、モルタル型抜きはと言うと石膏同様、原型は油土で作りその上から石膏を流し、石膏が固まったら原型の油土をていねいにほじくると石膏のメス型ができあがると言うわけで、次にモルタルを流すわけですが、このまま流し込むとモルタルと石膏が一体になってしまうので剥離材として石膏に石けんなどを塗ってモルタルを打ち込んでね。

と、言うわけで次回はもう少し突っ込んで書いてみましょうか？

くは、学校へ駆け出した。追いかけるように柱時計が、ボーンと鳴り出した。

雪は静かにやつてきで、山深いこの村に、純白の冬の衣装と緊張をもたらす。おばあたちは、背をしゃんと伸ばして雪踏みを始める。おとなたちは、溜め息をつきながら車を出す。そして子どもたちは、歓声を取り戻す。

テレビの天気予報の天気図に、上空五千メートルのマイナス三十六度の寒気団が、日本に下りてくると大雪だ。等圧線は縦に「みあつて」、北日本を覆う。寒気団が、じっと居座ると、毎日々々雪が続く。一時間に六センチ積もる雪が、一晩降り続けば、夜が明ける頃村全体は、五十センチの雪の下になっているのだ。明け方、バーサーバーと木立ちの枝から、屋根の上から、雪が落ちてくる音で目が覚める。その音は、ひつそりと降りてきて積もつていく雪の言葉のように思える。

雪の季節の朝は早い。朝四時、五時から起き出で、仕事へでかける道を確保するため、除雪をする。この村に限らず、雪国で生きて

行くためには、あたりまえのことだ。大きな道は、ブルドーザーがすぐつてくれているから、自分の家から大きな道へ出るまでの通路を作り、落ちてくる屋根雪の除雪は、隣家に迷惑をかけないように気をつけなければならない。除雪した雪は、道の脇の川へほうじない。川や水の流れのないところは、雪の山になる。近づく川の雪捨て場へ運ぶ。最近は、

自分で融雪装置を簡単に作れる穴のあいた特別なホースが売られていて、汲み上げた井戸水をうまく流して、融雪している家もある。ぼくは、朝できるだけ早く起きて身支度をして、学校のかばんをしゃうど、「こゝで来ます。」

「もう行くの？ 朝御飯は？」

「ふらーん。おばあのとこ。」

すでに足は、といとと雪を踏みしめて、おばあが雪

踏みを終わらないうちに手伝わねば、といひ思いが、ぼくを急がせる。

「おばあ、ぼくをやらせ。」「どうしたあ。こんなに早ようから」「おばあは、少し驚いた顔をして、すぐこ、ほほをゆるめると優しい目になった。

「朝御飯はすんだんかあ？」
「まだ、くってねえ」「うん。ぼく、道つけてくる」「うん。ぼく、道つけてくる」

家の中からボーンボーンと柱時計がなった。ちょうど七時。ぼくは、赤いプラスチックのスノッパーを押し出した。

夢のものがたり

大庭

(7)

十一月の初め、初雪が舞つた。けれど、まだ地面が温かかったのだろう。すぐには、消えてしまった。

十一月の終わり、寒波が来て雪が降ってきた。僕が、学校から帰った時、珍しく土間の入り口におばあが立っている。

おひだしく、天から地面へまっすぐ降りてくるばたん雪を見て、おばあは、「こりゃあ、つもる。根雪になるな」と、つぶやいた。

翌朝、起きてすぐ、ぼくは窓へ駆け寄った。見渡す限り、真っ白。けれど、たいしたことはない。雪の深さは、十五センチほどだ。寒波のせいか、外の気温は低い。まだ六時をまわったばかりなのに、父さんと母さんは、アノラックを着て一仕事終えていた。

「今日は、雪開けはすんだのよ。母さんたちは、道のようすが、分からぬから、早めにこれから仕事にでかけるけど、御飯がすんだら、遅刻しないように行くのよ。」

そう言うと、あわただしく出で行った。

雪だ。雪だ。こんな日に遅刻なんてしていら

れない。ぼくは、みそ汁と御飯をかきこんで、大根漬けを五つほど口に押し込むと、茶碗を流しに運んだ。湯沸かしから湯を出して、さあっと茶碗と箸を洗いかごにふせた。ファンヒーターのスイッチを消し、黒のアノラックを着込む。それからかばんをしようつて、スキーの青い手袋をはめ、長靴をはいて表へ出た。五十センチくらいの幅で、きれいに雪を

すくった道が、家の前にできていた。父さんと母さんで、ぼくが起きる前にやつたんだな。

ぼくは、そう思いながら、今年初めての雪の道を、おばあの家に向かつて走った。やわらかい雪は、長靴の底できしきし声を上げた。

おばあの家の前は、もうきれいにカンジキで雪踏みがしてあった。ぼくは、雪圃いの中に入り、入り口にちょっと頭をつりこんで、土間の奥に向かつてどなった。

「おばあ、雪だ。いってきます」

台所の方から、おばあの声が聞こえると、ぼ

1. 97年事務局報告

・97年活動報告

定例会 2/21 私家版3人組の仕事 小林、松井、宮越の各氏
 5/1 曙の話 荒井将佳氏
 6/27 映画の中の住まい 熊谷勲氏
 10/25、26 出張講座 大乗院庭園文化館と寺内町を訪ねる
 12/12 ジョン・ラスキン『建築の七灯』を読む 高橋照男氏
 お茶会 2/21 古河鷹見邸茶室にて
 第4回大平建築宿 8/15~17
 韓国文化研修ツアー 11/21~24
 機関誌「生活文化vol.3」発行
 会報No.24~28発行

2. 97年度会計報告 (12/22まで)

96年度繰越金	342,715円
97年度収入	276,546円
97年度支出	510,854円
(同人会報、定例会講師料、機関誌、その他/通信費等)	
	108,407円

3. 98年度世話人の選出 (順不同 敬称略)

吉田桂二(代表)・松本昌義(事務局)・斎藤彰(会計)・新井聰、
 勝見紀子(会報)・益子昇、日影良孝(機関誌)・江原幸壱・岡部知子
 金田正夫・小林一元・鈴木久子・内藤敬介・長谷川順持・宮越喜彦
 吉塚幸雄・戎居連太・岸未希亞

※総会に出席できなかた方で世話人に参加してくださる方は、事務局までご連絡ください。

4. 98年度活動方針

- ・定例会の年間テーマ 『木のいのち』
 98年度第1回目 林野庁／飛山氏(予定)

- ・『第5回大平建築宿』について

日程：8月14日(金)～16日(日)

実行委員長：小林一元氏

第5回のテーマ、基調講演、スタッフ等の調整は今後進めて行く。

・機関誌

今後、機関誌を安い金額で同人以外の方たちにも読んで戴きたいという理由から、発行にスポンサーをつけてゆくことになりました。一口3万円程度で考えています。皆さんご協力お願い致します。

年会員の方には次回定例会にて『生活文化vol.3』をお渡し致します。

・98年度会費について

会計報告でおわかりのように 2年連続赤字会計となってしまいました。このままだでは会の活動に支障を来しますので、下記のように改めさせていただくことが決まりました。ご了解願います。また、すでに振り込まれた方には、お手数ですが差額分を再度お振り込みいただけますようお願い致します。

年会員	8000円/年
会報購読会員	3000円/年

以上

■世話人会報告

(01/23 於：池袋／養老乃瀧 出席者14名)

1. 第1回定例会企画内容

今号表紙にて案内

*表紙の写真は「四季のブナ」姉崎一馬著(思索社)

「銘木資料集成」全国銘木青年連合会(学芸出版社)
から転載させて戴きました。

2. 定例会年間予定

千葉大学の赤坂氏、芸大の大西氏に依頼予定。その他岡部さん紹介の染色職人の方、神田川の屋形船による「水の上から見る東京」などを企画中です。

3. 9月に行われる町並みゼミについて

生活文化同人が町並みゼミの分科会の一つを担当する予定。

4. 機関誌vol.4について

今年も益子さん、日影さんにまとめていただきます。皆さんご協力お願いします。

5. 会員証について

今年から会員の方に生活文化同人会員証を発行致します。古河市の佐々木さんデザインによるもので、会費を振り込んでいただいた方に順次発送いたします。

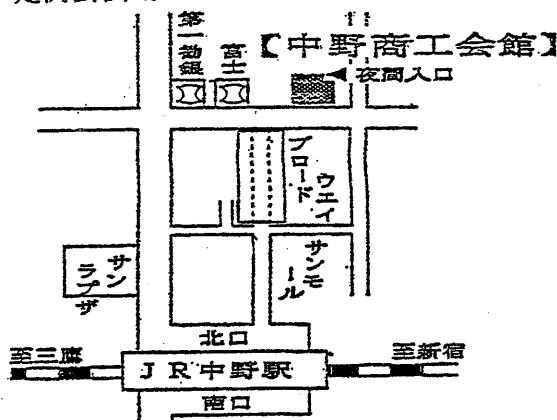
■同人活動

- ・長谷川順持・・・新津の家（住まいづくり百科70）
石巻の家（新しい住まい設計11月号）
沼田の家（新しい住まい設計02月号）
いわきの家（男の隠れ家01月号）
- ・松井郁夫 ・・・ フィールドノート 日本列島伝統構法の旅（建築知識12、1）
- ・宮腰喜彦 ・・・ 建築専用3次元CADの冒険（最終回）（建築知識12）

■事務局より

- ・生活文化の小型テープレコーダーが行方不明です。預かっている方は事務局まで連絡ください。
- ・滞りない会の運営ために98年度会費納入はできるだけ早くお願ひ致します。
- ・会報原稿募集しています。私の近作、旅の報告、町並みスケッチなど何でもOK！
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・毎号原稿締切：奇数月20日

定例会会場



編集後記

- ・昨年末、子供が生まれ喜んでいたものの、今では子供中心の生活で毎日があつという間に過ぎて行きます。ところで今年は雪が多いですね、今でも雪が降ると嬉しくなると、妻に言うと「犬と同じね」とあつさり言われた。（@）
- ・今年も建築だけにとらわれず、生活文化らしいで会報をづくりを目指していきます。どうぞよろしく。（@&K）

会報編集局：〒102-0071 東京都千代田区富士見2-13-7
連合設計社市谷建築事務所 新井／勝見

98年事務局：〒273-0031 千葉県船橋市西船5-7-2-201 TEL/FAX0473-32-4413
生活文化同人事務局 松本昌義

キリトリ

- ・98年度第1回定例会『山と人との関わりについて』に参加ご希望の方は事務局まで必ずFAXにて申し込んでください。

※02/23くらいまでにお願い致します。

98年度第1回定例会に参加希望します。

氏名：

TEL：

職場／自宅

生活文化

生活文化同人会報

1998(平成10)年04月号 No.30

- | | | |
|-----------------------|-----|----|
| 次回定例会案内 | ... | 1 |
| (も) 定例会報告 | ... | 2 |
| 同人紹介／中村美和子 | ... | 7 |
| 南仏コート・ダジュールを訪れて／栗原紫子 | ... | 10 |
| (く) 私の近作／日影良孝 | ... | 14 |
| 掲示板 | ... | 19 |
| 連載「夢屋ものがたり」⑧ | ... | 20 |
| (じ) 世話人会報告・同人活動・事務局より | ... | 22 |

■定例会 98年5月7日(木曜日)午後6時30分から8時30分まで

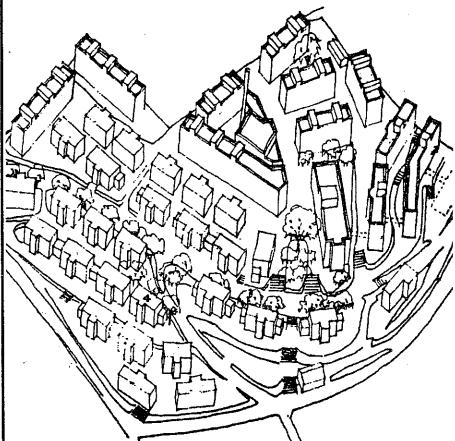
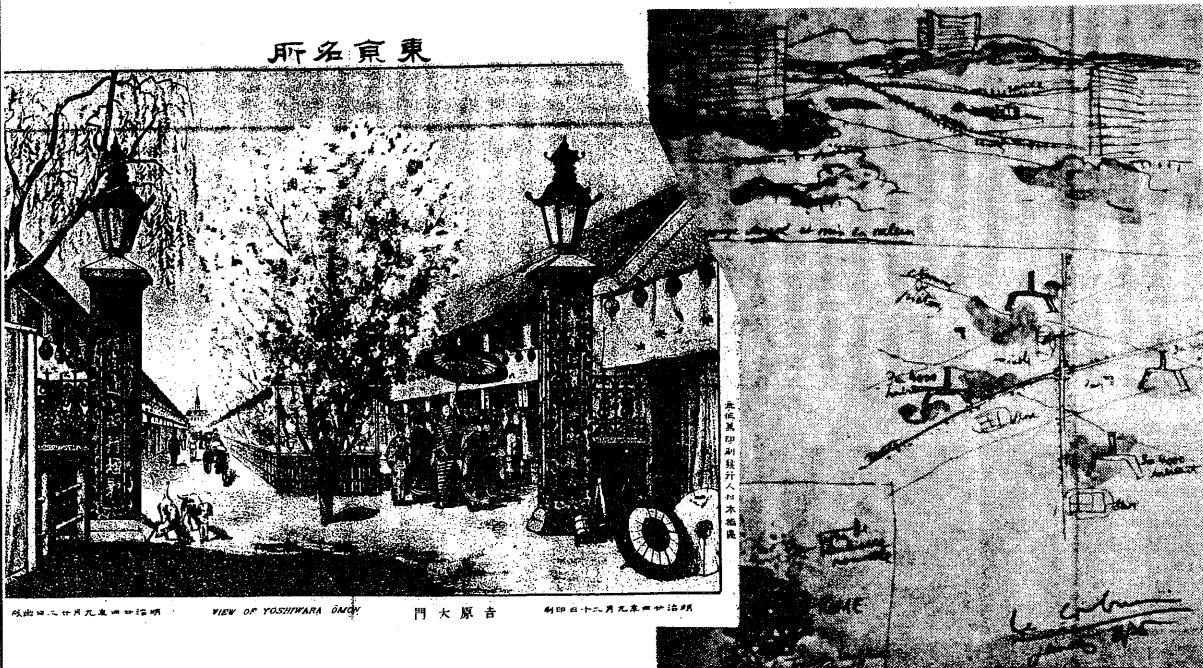
場所：飯田橋区民集会室

(セントラルプラザ住宅棟310)

テーマ：町並みと緑

※参加希望の方は事務局まで必ず申し込んでください。

講師：赤坂 信 千葉大学園芸学部助教授



「山と人との関わりについて」

講師飛山龍一（林野庁）

地球規模での環境問題が表面化している今日、森林の保全は極めて重要な課題のひとつであるが、その重責を担う林業、特に国内林業の現状は、まさに危機的な状況にあると言える。ある林業関係者から、日本の林業の存続はここ 30 年が勝負だろうという話を聞いた。木造建築の設計に携わる者として、今自分の立場から何をすべきか、具体的に何ができるのか、そんな思いで林野庁の飛山さんのお話を伺った。

1. 人と森林との関わり

昭和初期までは農山村を取り巻く森林の景観は人の営みと密着した人間臭いものだった。集落周辺の採草地ではまぐさや屋根を葺くための萱を採取し、里山林では薪や炭などの燃料、農業や建築に必要な資材、栗や栎などの食料を確保していた。落ち葉も採取して肥料にしていたために、放置されている今の雑木林とは違って、里山林は風通しが良くて明るいものだった。これを飛山氏は、人と山との関わりが「生活を媒体としていた時代」と呼ぶ。

次にここ数十年足らずのこととして、人と山との関わりは「産業化の時代」に入り、大きく様変わりした。採草地は耕地にされたり、治山治水の観点から植林された。里山林や奥山天然林はパルプ材や建築材として大量に伐採され、その跡地には成長が早くて金になる杉や桧が植林された。特に昭和 30 年代から 40 年代にかけての戦後復興期には、建築材やパルプ材の需要の逼迫に伴い木材価格が高騰したために民間の植林熱に拍車がかかった。この 10 年間には東京都の面積の倍に当たる 40 万 ha の植林が毎年行われていたそうだ。結果として日本の森林の 4 割が杉や桧の人工林になったため、山は生態的にも景観的にも単純なものに変貌した。

そして現代は、人と山との関係が細くなり、さらに切れかかった「断絶の時代」。農山村の人口は減少し、過去に 700 を超える集落が消滅、さらに 500 を超える集落がその危機に

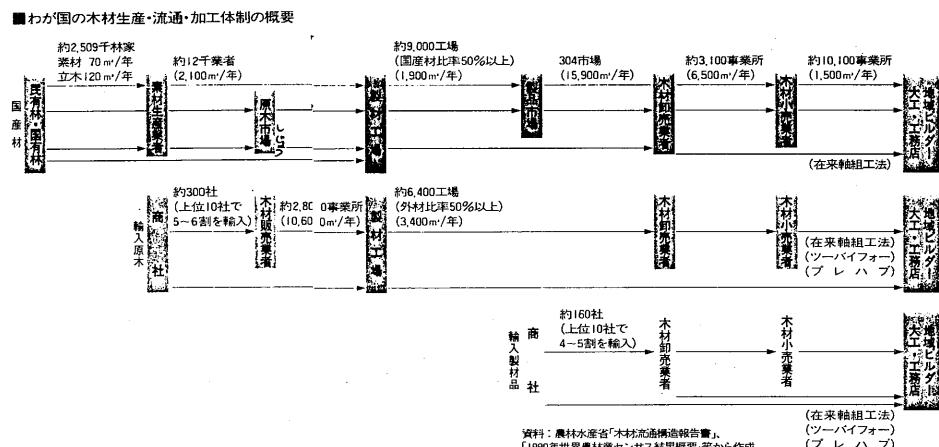
瀕している。離村して都会に住んでいる人が故郷の山を相続するケースが増えており、農山村の住民もサラリーマン化が進んでいるために、山の管理に無関心な人が増えている。近年の木材価格の低迷により、木材の販売や森林の管理が進まず、山で働く人の就業機会が失われており、林業従事者の高齢化は深刻な問題になっている。平成7年度の植林面積は5万haにまで落ち込んだ。

しかし近年の動向には人と森林との新たな関係、「環境を媒体とする時代」の到来を予感させるものがある。植林に関しては、建築材の確保と防災という従来の観点から一步踏み込んで、レクリエーションや生態系の保護、水資源の涵養という視点からも行われるようになり、広葉樹の造成や複層林施業（大きな木を抜き取って伐採し、空いた所に針葉樹や広葉樹の苗を植えて、山肌を露出させず、水源の涵養機能が高まるような方法）といった取り組みも行われている。

2. 人と木材との関わり

時代の流れと共に、建築における木材に対する意識は「あるものを使う」から、流通と材の規格化を通じて「ほしいものを揃える」へ、さらに経済の発達に伴い「価格に合わせて材料を揃える」へと変化している。

今の国産材の各流通段階（右図）における状況は以下の通り。



（森林所有者）日本の森林の7割は民有林、3割が国有林である。民有林の所有者は大半が農家であり、20ha以下の所有者は戸数で98%、面積で62%と零細なため、自らが林業を営んでいる例はまれである。都市部に転出してしまって林業に無関心な所有者も多い。

国有林は立ち木のまま、あるいは丸太にして販売されるが、いずれも入札による。

(素材生産業者) 木は森林組合か

素材生産業者（樵の集団）により伐採される。森林組合の主な仕事は、組合に加盟している森林所有者の山の植林や木の保育および間伐であり、主伐は主に素材生産業者が行っている。



クサビで伐倒方向を確定する



(原木市場) 素材生産業者や森林所有者から販

売手数料をもらって製材工場に丸太を委託販売する。製材工場の専門分化に伴い、丸太を仕分けして高価なものは1本、管柱用などの小径木のものは数十立方单位のひと山（これを棟といふ）単位で月に数回開かれる市日にセリ売りまたは入札売りする。



原木市場（市の様子）

(製材工場) 従業員10人未満、年間製材量2000立方未満の工場が多くまた専門分化が進んでいる。比較的大手の製材工場では、コストダウンや製品精度を上げるために、事業の分業化や木材の工業製品化に取り組んできた。近年では、構造用集成材工場が急成長している。

(製品市場) 製材工場から手数料をもらって小売業者に委託販売したり、自ら製材品を買い取って販売したりしている。多品目、多等級の製品のまとまった取り引きを本領とし、卸売りが原則であったが、大工や工務店に直接販売するケースが主流になりつつある。

(木材小売業者) 製品市場から製材品を仕入れて大工や工務店に販売・配送すると共に、かつては木の情報を町場に伝達する役割も担っていた。今では住宅建築費に占める木材の割合の低下に伴い、建材や住宅機器も取り扱う小売業が増えている。家族経営的零細企業が大半を占めている。

(プレカット工場) プレカット工場の出現とそれに伴う木材の工業製品化は木材製品の流通を大きく変えた。プレカットにおいては材の狂いは禁物なので、人工乾燥や修正挽きが不可欠になる。このため、プレカット工場は信頼のおける製材工場と直接取り引きをするようになった。現在では、製品市場や小売業を頭越しにするプレカット工場経由の流通が製品流通の4割を占めるまでに至っており、これらの業者は苦戦を強いられている。

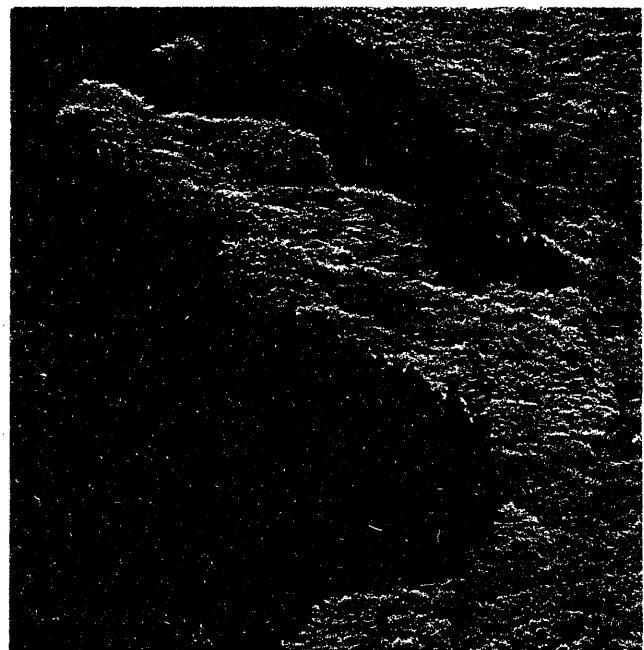
3. 木材流通の今後

プレカットや構造用集成材の出現により、従来の流通はいとも簡単に崩壊した。木材の工業製品化と商品化により、木を見て上手に使う知恵は必要なくなってきたおり、取引先同士の繋がりも単なる「価格」の繋がりにすぎなくなってきたので当然の帰結といえる。今後もこうした傾向は続くと思われるが、一方では産直住宅方式などに見られるように、素材生産業者、製材業、建築業が人ととの「信頼関係」に基づいたネットワークを構築し、お互いに情報交換をする取り組みもみられるようになってきている。

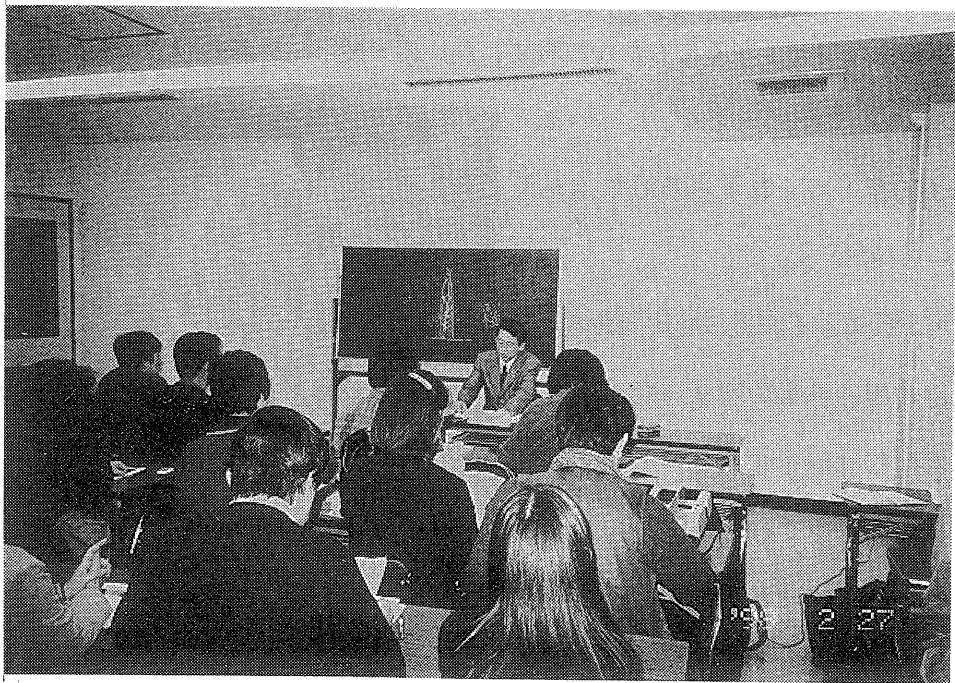
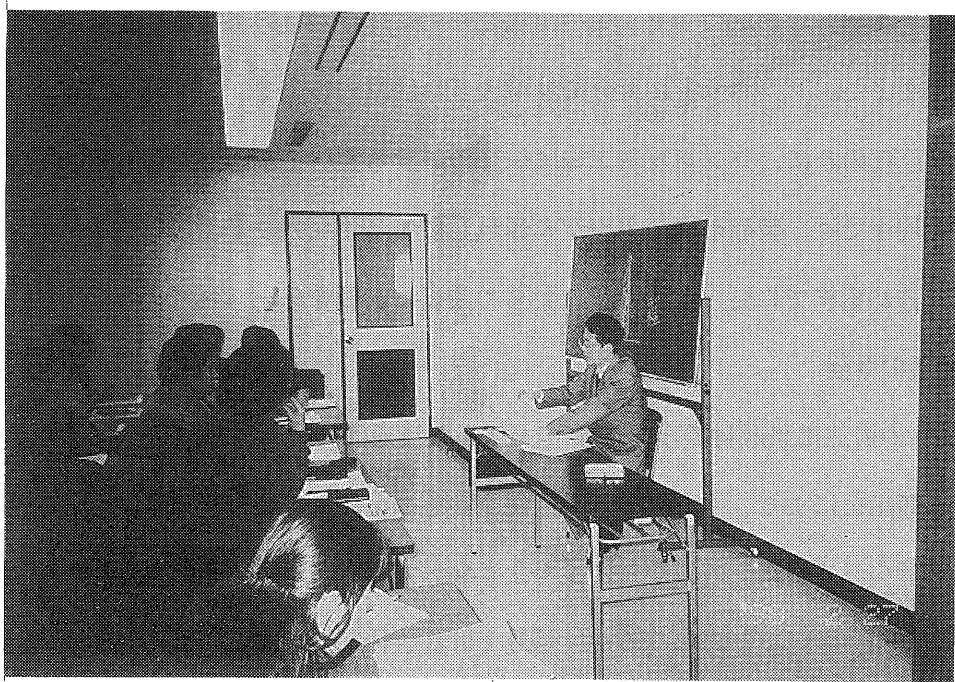
日本には 1000 万 ha にも及ぶ人工林があり、年間成長量は 7000 万立方と、日本の建築用木材使用量を上回るにもかかわらず、高い円を使って外材を世界中から輸入しており、木材自給率は 2 割にまで低下している。

先人が植えて育てくれた木そして山を大切にしたいものだ。

以上が飛山氏による講義の要旨である。
林業の役割と国内林業の現状を認識するなら、今われわれは何をすべきかということは自明であろう。産直住宅などの目的はコストダウンという範疇を超えるものでなければならない。現代は「環境」という言葉をキーワードに、価値意識の大きな転換期



にさしかかっている時代なのだ。 (世話人 松本昌義)



1972年生まれです。3月で慶應義塾大学政策・メディア研究科を修了します。学部時代（総合政策学部）もこの藤沢キャンパスで学んだので、計6年間、八王子と藤沢を往復しました。八王子生まれです。

高校1年の時、私より少し年上のイタリア人が私の高校にやって来て、1年間我が家にホームステイすることになりました。空手の黒帯を持つ、女の子です。私にとって、それが初めての「イタリア」という国との出会いでした。イタリア語の勉強はしませんでしたが、話を聞いたり、本を読んだり、写真を見たりと、イタリアに対する関心は日に日に高まっていきました。1年後彼女が帰国。喧嘩もよくしましたが、男兄弟に挟まれて育った私にとって彼女は只一人の姉であり、また無二の親友でもありました。「イタリアに行きたい」「イタリアに行きたい」と呟いていると、ある日隣の席の子が、2年間奨学金で留学する方法があり、願書を取り寄せたけど自分は受験しないからくれる、と言います。ユナイテッド・ワールド・カレッジという学校で、イギリス・カナダ・アメリカ・シンガポールという英語圏に加えて、なぜかイタリア校というのがありました。

高2の夏、私は高校を中退し、イタリアへ出発しました。この留学は、日本人は高2の夏から2年間ということになっているので、一生で一度のチャンスに出会えたのだなあ、と今になって思います。

今日は、私が高校時代の2年間を過ごした、イタリア北東部、トリエステという町の郊外にある、ドゥイノ(Duino)という村をご紹介します。私はここでの生活で、身近な「地域」というものに目を向けるようになりました。

ドゥイノという村

地図を開いても多分のっていません。トリエステとモンファルコーネの間にある、アドリア海に面した小さな村です。元々は漁村だったそうですが、今では漁師の数も減り、港には数隻の漁船とレジャー用ボートが静かに並んでつながっています。

この村のランドマークとなっているのは、何と言っても崖の上にそびえ立つドゥイノ城です。15世紀に建てられた塔や城壁は原形のまま。現在の城主は、イギリスのチャールズ皇太子の従兄弟にあたる人だそうです。この城はNew Castleと呼ばれていて、実はその横にもう一つ、ローマ時代のものだと言われるOld Castleの跡が残っています。この新旧2つの城の間に、非常に美しい入り江があるのですが、城内に入るか海から眺めない限り見ることはできません。

ドゥイノ城の東には、海岸線に沿って崖の上を松などの木立に囲まれた散歩道が隣町の

システィアナまで続いています。ドイツの詩人リルケがここを愛したということから「リルケの小道」という名前が付けられています。晴れた日には、遙か彼方のイストリア半島まで見えることもあります。

さて、ドゥイノの中心となっているのは城門前的小さなピアツツァ（広場）であり、その周辺に、小さなスーパー、肉屋、八百屋、花屋、文具店、郵便局、診療所、バー（喫茶店）などが集まっています。トリエステやモンタルコーネ行きのバス停もここにあります。ここから港までの坂道は並木道になっていて、住宅や小さなホテルが並んでいます。

広場から城の脇に入った所には、村の古い部分（通常Centro Storicoと呼ぶ）が残っています。ここには村の教会があり、この一画のたたずまいは戦前からの瓦屋根に石壁。井戸があつたりアーチがあつたりして、中世にタイムスリップしたようです。一方、広場を挟んだ反対側は、近代的な家が並び、電信柱も堂々と立っています。この両者が違和感なく共存しているのは、きっと建物のスケールが一致しているからでしょう。

ところで、私の通ったユナイテッド・ワールド・カレッジ・イタリア校の設立は、村にとって非常に画期的なことだったと思います。世界60カ国から集まった200人の学生が、村中に点在した学校、図書館、食堂、寮などを行き来しているので、国際色豊かで活気もあります。学校と図書館は新築ですが、小さな建物です。寮の殆どは、村の空家などを譲ってもらったものだそうで、違和感なく村に溶け込んでいます。

ドゥイノには、カレッジで学ぶ外国人だけでなく、イタリア各地から移り住んで来る人も多く、また、カラビニエリと呼ばれる憲兵（特殊警察）の宿舎では兵役で各地から招集された20歳前後の若者も生活しています。

人々の社会自体も単純ではありません。ドゥイノは、イタリア、オーストリア、旧ユーゴスラビアとの国境に近いということもあり、2回にわたる大戦の影響を少なからず受けました。実際、住民はイタリア語だけでなくスロベニア語を話す人も多く、商店では2言語が使われ、小学校でも授業をどちらの言語で受けるか選択できるようになっています。



リルケの小道から
システィアナを望む

リルケの小道から
ドライノ城
(New Castle)
を望む

Centro Storico



『ドゥイノ村でのカレッジ生活』

朝：ルームメイトは、パナマ人とスロベニア人。3人ともよく眠る。目が覚めると5分で準備してデイルーム（居間+食堂）へ降りていき、近所のパン屋から届いた焼き立てパンを頬張る。寮から学校までは走って2分。しかし、小学校の敷地を突っ切れれば1分。正に、職（学）住近接。ロック扉を乗り越えて、小学校を横切る。学校の手前で仲良しのおばあちゃんが、家の前の道を掃いている。86歳、独り暮らし。

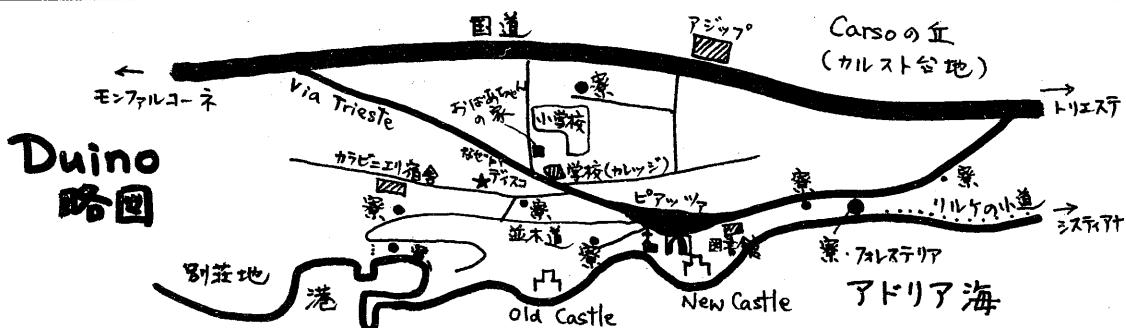
「チャオ！」と挨拶すると、「走れ走れ！」とオーバーな仕種でおどけてみせる。午前8時、授業開始。履修科目は6教科。日本語（母国語）を教えるのは、なんとセルビア人女性。私は、この先生から、日本にいた時よりも日本文学を学んだ。

数学の先生はエジプト人。縦にも横にも大きい。ダイエットコークを飲んでいるが、飲む量が多いので学生は皆言う。「Mamma mia!（あんなに飲んだら意味ないよ。）」20分の小休憩。学生たちが外に出る。私とパレスチナ人のダナは、授業がないのでリルケの小道を散歩する。途中の岩肌に腰を掛けアドリア海を前に永遠としゃべる。しゃべり疲れたころに、ちょうど昼食だ。昼と夜は、フォレスティアの1階にある食堂で食べる。アッピーホテルで調理されたものが毎日届けられる。配膳のお兄さんにウインクするとパスタが大盛りになった。イタリア人の学生は、アッピの食事はマズイマズイと言っていた。家庭料理を御馳走になると、その気持ちがよくわかる。

午後：授業はない。課外活動も地域活動もない日は、全くの自由。課外はバスケットボール、コーラス、イタリア語劇とイスラエルダンス。地域活動は独り暮らしのおばあちゃん訪問と下校後の子供たちのお相手。おばあちゃんとは活動としてではなく仲良しだ。しおりに上がり込んではお茶を御馳走になったり散歩に出掛けたり、楽しかった。励まされ、慰められ、教えられた。お世話になったのは私だった。モンファルコネのカギっ子たち。夕方ふらふらしている子供たちがドラックと出会ってしまう危険がある、という切実な社会問題が絡んでいる。私は、宿題をみてあげるのは無理なので、子供たちにイタリア語を教えてもらった。皆、熱心で可愛い先生になる。

夕方：友達とのんびり港まで降りて行く。村の中に夕食の匂いが漂う。

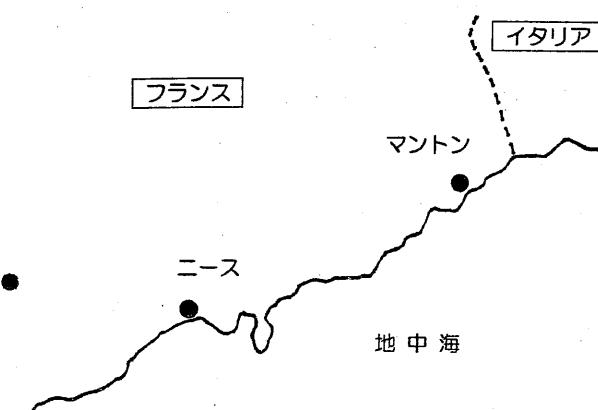
夜：宿題が山ほどある。読まなければいけないページも山ほどある。なんとか解説。お腹もすく。デイルームに降りていく。仲間とパスタを作る。パスタとトマトソースと大蒜と鷹の爪。必ず誰かが持っている。夜食を食べ、一日が終わった。



ちょうど去年の今頃、5年ぶりにイタリアにいました。旅の目的は、ロシアの映画監督タルコフスキイの作品『ノスタルジア』の撮影に使われたトスカーナ地方の村巡り。何とか時間を作ってドゥイノにも半日だけでしたが、行ってきました。村は少し変わっていましたが、学生たちの様子は私たちの頃と差ほど変わってはいません。おばあちゃんは、以前私がイタリアを発った1週間後に亡くなり、主をなくした小さな家は鎧戸を閉じた状態で変わらずそこにありました。もう一人の仲良しおばあさんも、3カ月前に亡くなつたことを近所の人から聞きました。住民でなくなった私にとってのドゥイノは、好きだけど当分は帰りたくない故郷になりました。

南仏 コート・ダジュールを訪れて

栗原 紫子



イタリアのミラノ中央駅7:10発、インターライナーに乗って南フランスへ。目的地ニースへは約4時間半。寒いミラノから、昼頃には暖かいコート・ダジュールに着くことができる。

列車はイタリアの港湾都市ジェノバから、地中海沿いにひたすら

西へ走る。左は海、右は切り立った山肌。いくつかのトンネルを過ぎるうちに、窓の外は『世界の車窓…』に出てくるような景色。海の色は紺碧。陽射しは暖か。11月だというのに、Tシャツ姿の人、海で泳ぐ人すら見える。ミラノではコートが手放せなかつたのに…。

イタリア最後の駅ヴェンティミーリアで、乗務員がすべて入れ替わる。フランスの乗務員は、ネクタイをしっかりと締めているせいか、心なしかイタリアの人たちよりもまじめそうに見える。私の席は、ちょうど乗務員が集まる席のすぐ近くだったので、4時間半の間、彼らの様子を見ることができた。イタリアの乗務員たちは国境前で降りるまで、とにかく喋り捲っていた。もちろん会話の内容はほとんど分からなかったけれど、大きな声で笑ったりする雰囲気からして、会話の8割は仕事以外のおしゃべりに違いないと思う。それに比べてフランスの人たちは静か。時刻表と時計と大きな帳面を見ながら、黙々と仕事をしていた。仕事の仕方にもお国柄が出るのかも…。

NICE

ホームに降りると、そこは本当に暖かで、セーターすら要らないほど。天気のいい昼間は、気温20℃にもなる。

海沿いの道は所謂コート・ダジュールの高級リゾート地、という感じで、立派なホテルとレストランが延々と立ち並んでいる。レストランの前にはテーブルが並び、皆、

海を見ながら優雅に食事を楽しんでいる。といっても、海沿いには広い遊歩道が設けてあって、たくさんの椅子が無造作に置いてあるので、レストランに入らなくても海辺でゆっくり過ごすことができる。

イタリアもフランスも、太陽が出ている間、ほとんどの人たちは、季節に関係なく広場で過ごすように思える。密集した建物の中には陽があたらないせいだろうか？海沿いの遊歩道や広場には子供連れの家族やカップルはもちろん、犬を連れたお年寄りや、ジョギングをする人、レポートらしきものを書く学生もいる。そしてはじめは二人連れだったところが、隣に座る人に声をかけて、人の輪が膨らんでいくことも珍しくない。日本ではこういう場所はあまりないように思う。

華やかな海沿いから丘に向かって迷路のような路地を入っていくと、17世紀頃の

建造物が多く残っている、静かな旧市街がある。凝った外壁の装飾はどれも興味深い。街には何故か骨董屋がとても多く、店先を見てまわるだけでも面白い時間を過ごすことができる。

また、近くには現代彫刻のような近代・現代美術館があり、古い街並とのバランスが面白い。

▲ニース近代・現代美術館

VENCE

翌日、ニースから長距離バスに乗り、ヴァンスへ。ヴァンスはこの地方に数多い、高い山の上に築かれた城壁に囲まれた街並『鷺の巣村』のひとつで、マチスやシャガールゆかりの地でもある。

11月はオフシーズンらしく、レストランなどは“12月×日まで休業”的札が目に付く。城壁に囲まれた街は白い石造りで、陽があまり射さないところでも明るく感じる。店の看板やバリエコニーの柵、ドアノブなどは凝った繊細な鉄製で、一軒一軒見



ても飽きないほど。特にドアノブは、そこだけ見ると立派なオブジェのよう。また、街にはギャラリーや作家のアトリエが多く、路地に入ると制作途中の作品が見られることも。

この街で私が気に入った場所は城壁を出たすぐにある広場。そこは、四方をテッキに囲まれているだけの固い土の広場で、遊具も何もない。朝はテッキに花や野菜の朝市が並び、昼間は初者の男性たちがボールゲームに興じて、夕方には子供たちがサッカーを楽しむ。この町の中心の場なのだろう。

広場のベンチに長い時間いると、住人たちの生活リズムを感じることができるような気がする。

ヴァンス周辺には、小さい魅力的な『鶯の巣村』が多いらしい。車があれば、一日でいくつかの街を見られると聞いた。また、個性的な美術館も点在している。

MENTON

ヴァンスで2日ほど過ごし、再びミラノに向かう前に、国境の街であるマントンへ。

マントンはコクトーの愛した場所として有名な街で、平面以外の彼の作品を、多く見ることができる。市庁舎内にある『結婚の間』は、壁いっぱいに彼の絵がやさしい色調で描かれていて、ワインカラーのインテリアと重なって不思議な空間を感じさせる。そして、さらに不思議な空間は、かつての要塞であった海岸沿いに建つコクトー美術館。小窓からは海が見え、窓の下には作品、その床にはコクトーのデザインした海の小石によるモザイク。恐いくらいに波の音が響く独特の空間は、コクトー自身のプロデュースによるものと聞くと、置いてある作品をこの場所以外で見ても、意味がないもののような気がしてしまう。

街は、いくつかの国と文化が混ざり合ったような、不思議な雰囲気がある。新市街は、レリーフがあしらわれたお菓子のような建物や色タイルの帯状装飾の建物、白い

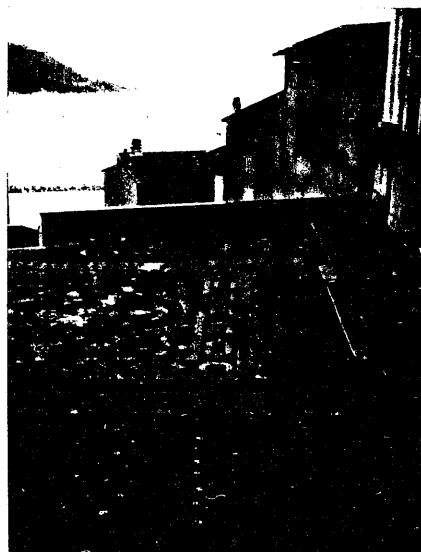
石造りの建物などが隣接して建っていて、数歩行くごとに、どんどん風景が変わる。海沿いの遊歩道は、海面から高い位置につくられたニースのものと違い、2mくらいの高さにあるため、ずっと海が近く見える。遊歩道から続く広場には芝生が敷かれていて、華やかなニースと比べ、ずっと落ち着いた感じがする。

海沿いの道から急な階段を上がって行くと、石造りの落ち着いた旧市街に入る。その高台に建つサン・ミッシエル教会に続く長い階段には、海辺の黑白2色の小石でモザイク模様がつくられ、上から見るとまるでやわらかい絨毯のように見える。教会だけでなく、そこに続く道をも美しく装飾した人たちは、この教会と街が本当に好きで、誇りに思っていたのだろう。

フランスの高級リゾート地、というイメージだけが強かったコート・ダジュールだが、訪れた街はそれぞれにとても個性的で、目的もなくただ街中を歩くだけでも十分に楽しめた。マチス、ルノアール、コクトー…多くの画家や作家が、この地で晩年を過ごした理由は、温暖な気候とすばらしい自然という以外に、それが選んだ、それぞれの街のもつ雰囲気が影響していた気がする。



▲サン・ミッシエル教会



▲教会前的小石の絨毯

逗子邸 一期工事の報告

日影良孝

土地つき中古住宅。まったくの身分不相応。金が無いのによせばいいものを、昨年不動産を購入してしまった。

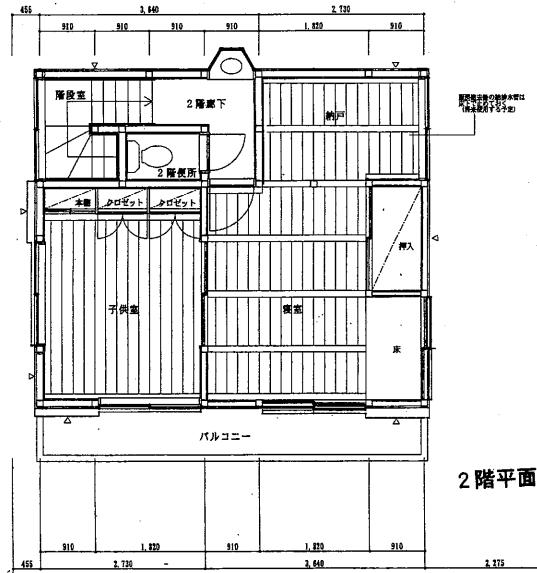
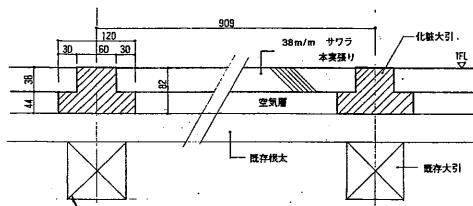
以前の借家は神奈川県逗子市久木7丁目、久木中学の裏。2階建ての文化住宅（テラスハウス）。正面には山桜が植えられ、中学の体育館が目の前にあった。太陽の光と女子中学生のバレーボールの掛け声が家の中にさんさんと降り注ぐノドカな（家内と娘の）生活であった。

「けして安くない家賃を支払い続けるのは、将来的にあまり意味がないことでしょう」と北鎌倉の義理の父に言われ、僕の家内は納得。頭金は全額貸してくれそうだから実現できるかもしれない（貸してくれるのであって頂戴するのではない…この重要な事項を時々忘れる）。僕は半信半疑のまま、週末なんとか時間を作り家内と3歳の娘に連れられ逗子・鎌倉に物件を探しに行く。現在は5歳

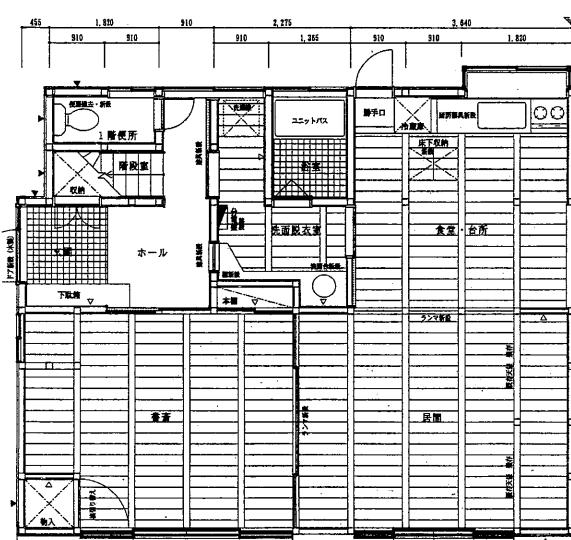
資金的に更地購入で新築の家を建てるのは無理。かといって最近の建売住宅は内部の生活環境も外観も体に馴染まない。僕の漠然としたイメージは「古い和館」。その他の条件は駅から徒歩圏内で駐車スペースが確保できること。自然が家を取り囲み心地よい磁場が発していること。海は見えても見えなくてもいい。それに隣にへんな家が建っていないこと。

これらの理想を低資金で探しだすことは不可能に近いだろうと思っていたが、駐車場がないことさえ我慢すれば、ぱっちりな和館があつたのでした。「おーこれはイメージに近い。うまく手をいれれば住み継ぐ見本にもなりえる」僕はちょっと興奮ぎみに家内に話すと、

1階の朝鮮張り



2階平面図



1階平面図

改修後の平面

床にしつこく目地を書いているのが朝鮮張りの模様です。3尺の長さの床板は持ち運びは便利でも張る手間は長尺とかわりません。安くなると思ったら大間違いでした。

家内はなぜか難色を示す。和館はいやだ。和館は怖いと言うのだ。しかも駐車場を別の場所に借りられるほど家計に余裕はない。家内の意見を尊重して、この家は断念。

どうも家内の話を聞いていると、高度成長期に建築家が介在したようなモダンリビング的な家が好きそうだ。

ほかの地域の詳細は知らないが、逗子・鎌倉は、お屋敷が建つ大きな土地が切り売りされ、どんどん醜い建て売り住宅に変わっている。持ち主が維持できないことが最大の原因なのだろうがとても残念なことだ。

これでは家を探すにも夢を失ってしまう。しかも逗子・鎌倉は物件が固定化して表に出てこない。思うような家を探すのに困難を極めた。

時間をかければ良い物件も出てくるだろう。家宝は寝て待てである。

それに理想を追うのもやめた。夢が大きすぎると裏切られた時の衝撃が大きすぎるだろう。

2カ月ぐらい過ぎただろうか。まあ一まあ一の物件が見つかった。駅から若干遠いが歩けなくもない。価格の割に土地も広い（約50坪）。山を背にし、斜面を造成した宅盤の上に家が建っている。宅盤は道路面より3m程上がっており、車庫がそのレベル差を利用して設けられている。よって50坪の土地はすべて居住用として利用できる。

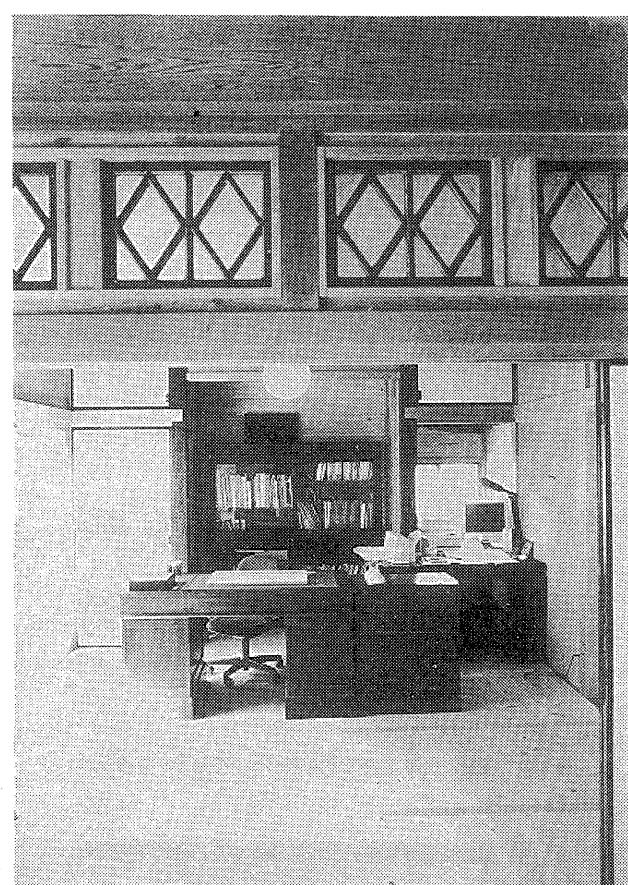
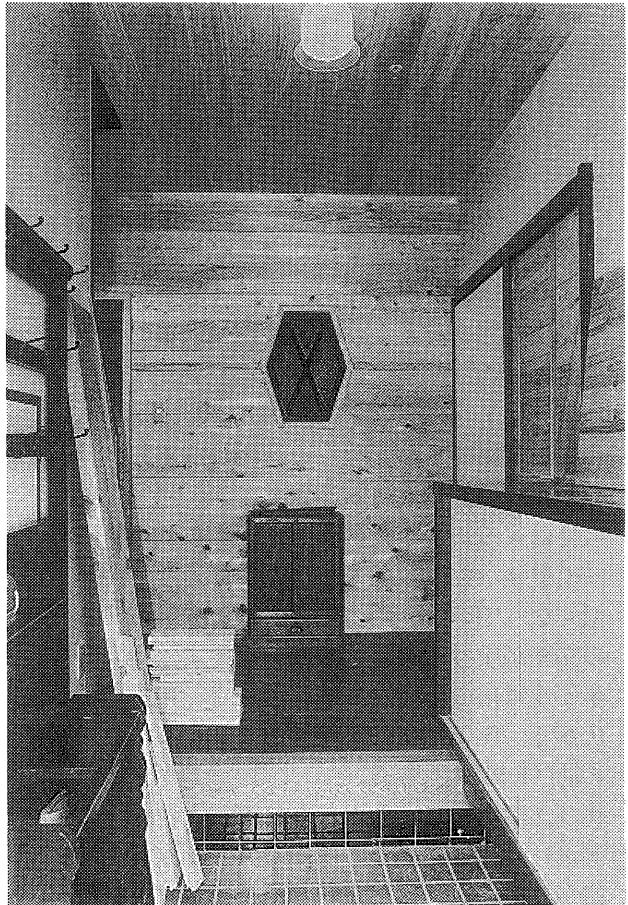
家の築年数は14年。外観の魅力など微塵もないごくありふれた家。2世帯住宅として注文でつくられたものだ。まさに2級建築士の製図の模範回答にできそうな家だった。でももし僕が製図の採点者だったら、まっさきにこの家に落第点を与えるだろう。なぜなら1階と2階の軸組がほとんどズレているのだ。

写真上段

玄関扉を開くと同潤会代官山アパートの建具が迎えてくれる。

写真下段

居間から書斎を見る。置いてある家具はほとんどもらい物のアンティーク家具。机は三井財閥の番頭・増田孝の孫の家の解体時にもらったもの。



もうひとつこの家には弱点があった。湿気である。裏側に山を背負っているため、山水が家に向かって流れ落ちてくる。構造体が腐朽しカビが発生しているかもしれない。

構造的な問題は将来資金に余裕ができたら補強すればいい。山水に関しては外構を工夫し防ぐ手立てを考えよう。最終的にスポンサーの義理の父に見てもらい、この家に決定する。

すこし退屈ですが間取りを説明します。

敷地は東西にやや長い長方形である。西側に前面道路が位置し前述したように道路は一段低くなっている。西側に親世帯と子世帯共有の玄関が設けられ、2帖程の玄関ホールの右手に親世帯の居室（8帖二間続きの和室）が広がる。奥の和室に隣接するように2帖畳敷の納戸を設け、さらにその北側に台所がある。再び玄関ホールにもどり左に進むと便所、玄関ホール突きあたりの壁向こうに脱衣場と浴室が設置され、玄関から台所までは廊下状に動線が確保されている。2階に通ずる階段もやはり玄関ホールから上がっており、上がりきった場所に出窓型の洗面があり、その右横に子世帯用の窓のない便所が設けられている。子世帯の居室は和室6帖の寝室と寝室に隣接する3帖の台所、そして寝室を通らなければ行けない子供室が6帖確保されている。ちなみに和室を除く仕上げは、ビニル床シートか合板フローリングの床に壁と天井は例外なくクロスであった。

無事契約も済む。

現状のままでも住めなくもなかったが、家内から若干の改裝の希望がでた。

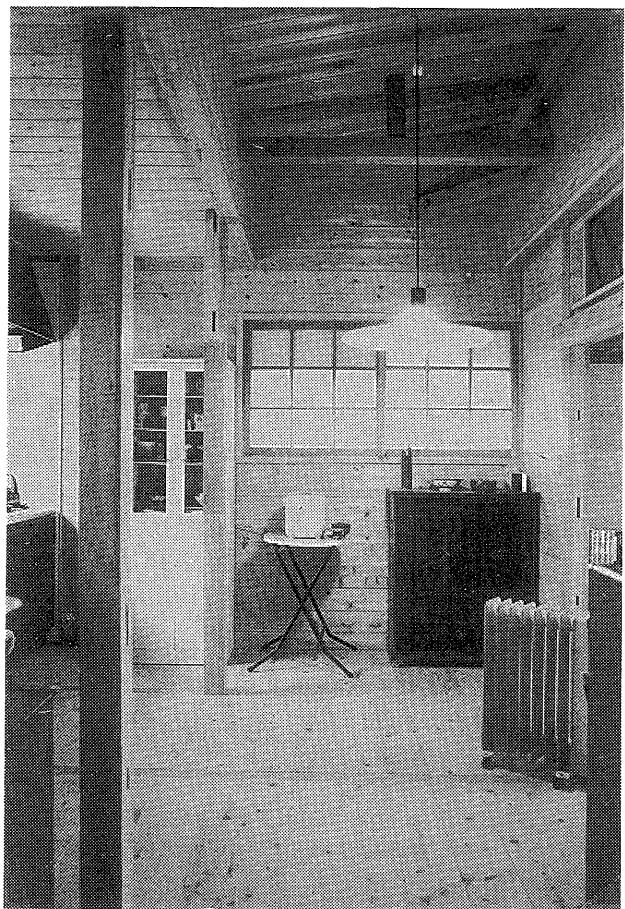
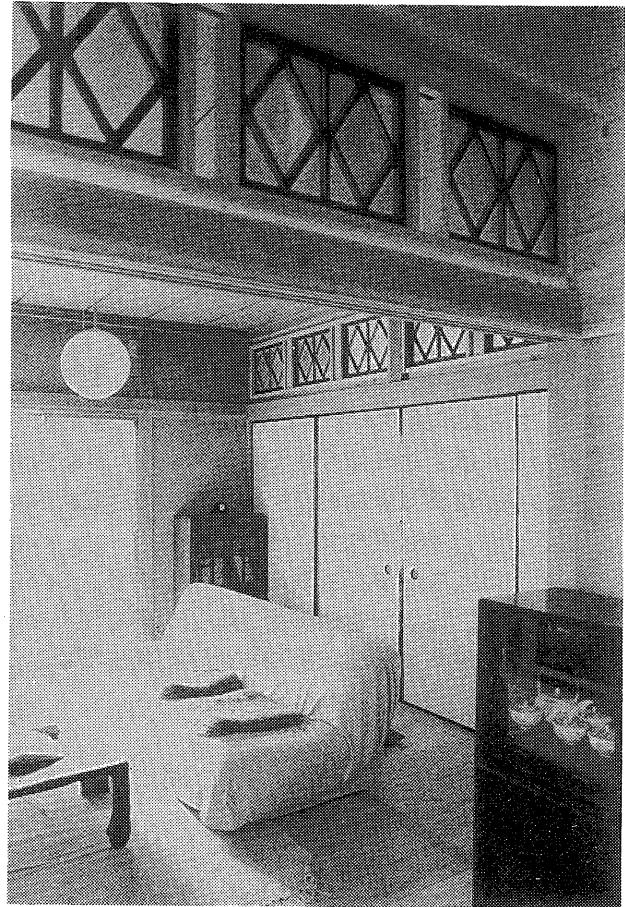
改裝費用は100万円しかない。この金額を超えると生活ができなくなってしまう。

写真上段

居間の風景。欄間に同潤会代官山アパートの建具がはめられている。

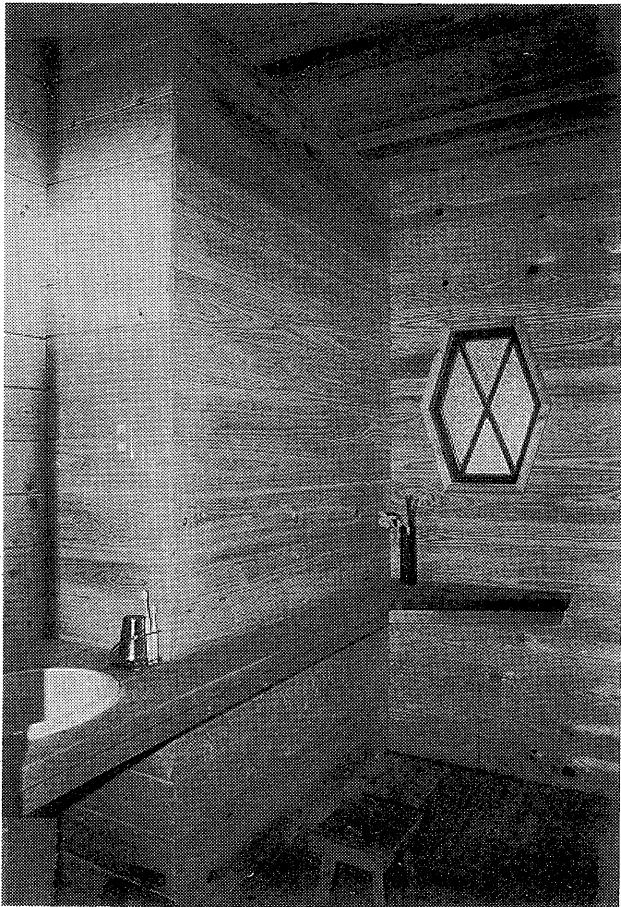
写真下段

食堂の風景。撮影のためにテーブルは退かした。柱に下地貫の跡が見える。



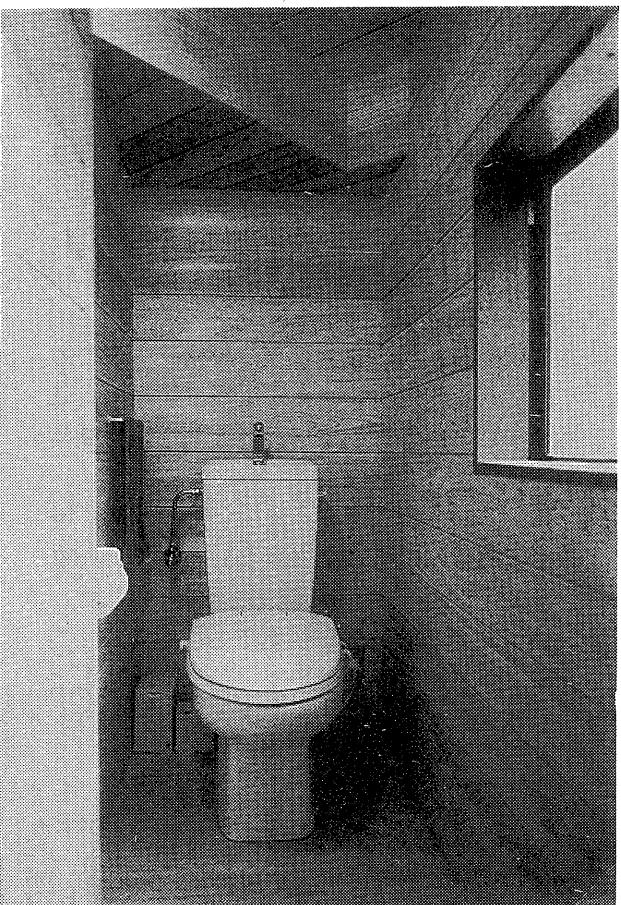
家内の100万円の改装要望をありのままに書きます。

- 1、水周りを中心にクロスにカビが発生している。ひどい箇所は剥がれている。
- 2、山側に接する畳がカビており、部分的に腐っている。
- 3、台所の厨房機器が汚れており、料理をする気になれない。
- 4、ビニル床シートが汚れがひどく剥がれてもいる。
- 5、1階の納戸は必要ない。できればブチ抜いて台所と食堂を広く使いたい。
- 6、2階の台所は必要ない。
- 7、浴室は不衛生なイメージがあるから新しくしたい。
- 8、畳はすべて板にしたい。
- 9、玄関ドアがアルミ（醜いアルヌーボー）であるから木製ドアにしたい。
- 10、湿気が心配だから床下に換気扇を設置したい。
- 11、ふすま紙を張り替えたい。



家内の希望を受けて僕が考えた再生コンセプトを書きます。

- 1、段階的な工事可能なリフォーム。つまり2期工事が容易にできるようなりフォームのためのリフォーム（要は剥がしやすく、剥がした材料を再利用できること。将来の部分的な改修が全面に及ばない工夫たとえば床の朝鮮張り）。
- 2、住み継ぎのメンバーの理科大助手の加藤さんから譲り受けた代官山同潤会アパートの建具の再利用
- 3、プラスチックボードとクロスはすべて撤去し、木か左官とする。（予算がないため左官は断念、左官は将来の楽しみに残しておく）



写真上段

洗面脱衣室の風景。玄関で見た同潤会代官山アパートの建具が洗面に裏側から見える。

写真下段

便所の風景。総サワラ板張りの贅沢な便所。

計画書をつくり工務店に見積りをお願いしたら1000万円とでてきました。

内部をほとんど改装するのだから当然といえば当然の金額。しかし予算のないことも事実。100万円は無理だとしても250万円ぐらいに落ちないものか。浴室は現状維持としよう。クロス張りも一部残そう（将来自分で漆喰を塗ればいいじゃないか）。それでも落ちる金額は目に見えている。

残る手法はただ一つ。セルフビルトしかない。まず弟を呼ぶ（弟は大工）。木工事はすべて弟にまかせよう。残りの設備などの下職の手配は僕自身でやろう。既存解体は素人でもできる（後で廃材処理に困りはて、ごみ問題を体で実感する。プラスターボードの紙を両面剥がし、中間のプラスターを水で溶かし壁に塗ろうと真剣に考えたほど）。

着工しました。解体まではうまく行きましたが、弟の木工事が遅々として進みませんでした。板張りが手間のかかる仕事だと自分の家でまたまた実感しました。床の朝鮮張りも手間のかかる要因。

引っ越しの予定に間に合わないことが途中でわかり、床と天井は弟にまかせ、板壁はすべて僕自身が担当しました。それでも間に合わないので、ついに岩手の父に来てもらいやつとのこと完成させました。

弟に手間を払い、建具工事、設備工事を含めて約350万円でおさえました。僕とすればものすごい出費なのですが、とりあえず無事引っ越しをしたのでした。

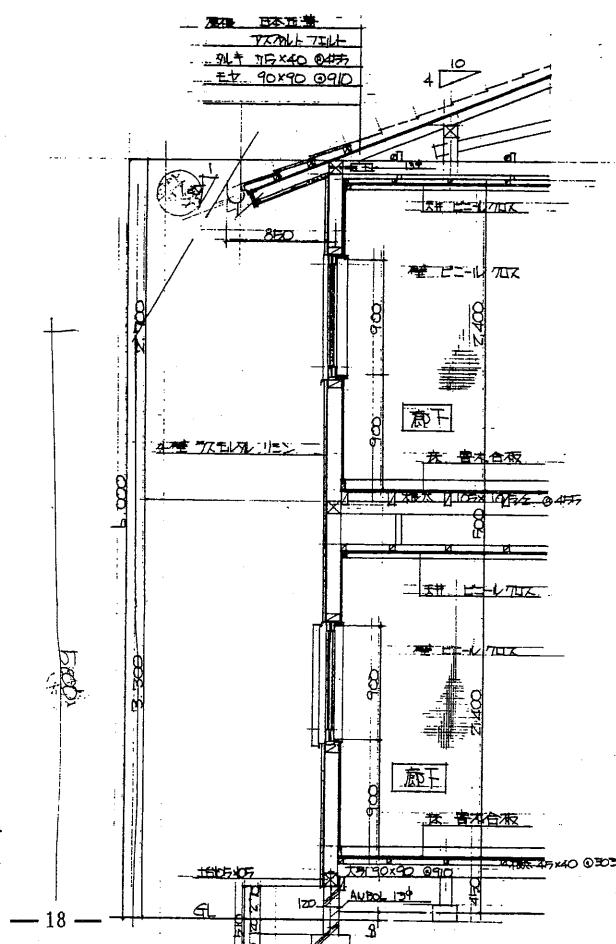
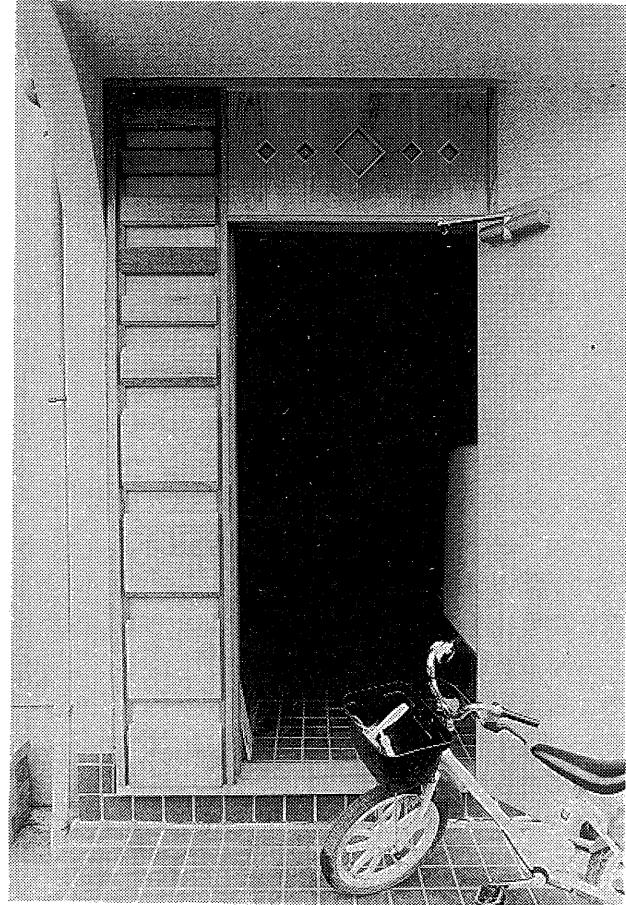
板は岡部さんから買いました。張る前に一枚一枚質感を見ながら張る箇所を選定しました。岡部さんの材料は他の現場でもよく使わせてもらいますが今までの中でも一番よい材料だと思いました。岡部さんありがとうございました。

写真上段

玄関ドア。枠は父がケヤキで造った。袖は現場で余ったケヤキをセコク再利用している。

写真下段

当時の確認申請図の矩計図



★掲示板

決定！！

劇団風の街 1998年公開スケジュール

民家芝居

『風のレジェンド』 -宮沢賢治スケッチ-

作：熊谷 勲 演出：北岡 清治

出演：江良 潤・佐藤 二郎

* 5/9(土)～10(日)

岩手県陸前高田市・伝承館 後援／陸前高田市

* 10/30(金)～11/1(日)

世田谷区・次太夫堀公園民家園 後援／世田谷区教育委員会

* 「劇場を飛び出し、芝居がお客様のところへ」をキャッチフレーズに昨年より活動を開始した「出前芝居」の本格的始動。2000年度には「風のレジェンド」ヨーロッパ公演も予定いたしており、どこでもどんなところへでも伺って上演して参ります。ご期待下さい。

劇団 風の街

〒151-0072 東京都渋谷区幡ヶ谷 2-2-7-202

TEL/FAX 03-3377-9711

特別企画 春の川下り

「東京がもっと知りたくて。」の気持ちから川下りを考えてみました。
水の上からだと違う東京が見えてくると思います。

日時 4月26日(日) 12:45 集合 13:00 出発しちゃいます。

集合場所 JR 総武線 浅草橋駅より1分
橋のたもと、田中家(船宿)前

コース 浅草橋 → 神田川を上る → 日本橋川
→ 墓田川 → 浅草橋

定員 30名 (先着順) 会費 3000円 (高校生以下半額)

参加希望者は、なるべく小さな用紙に4月26日参加希望と
名前、連絡先を記入の上、FAXで申し込んでください。

FAX 0429-77-2491 岡部まで 当日 030-080-4710

世話人 石川正子 岡部知子

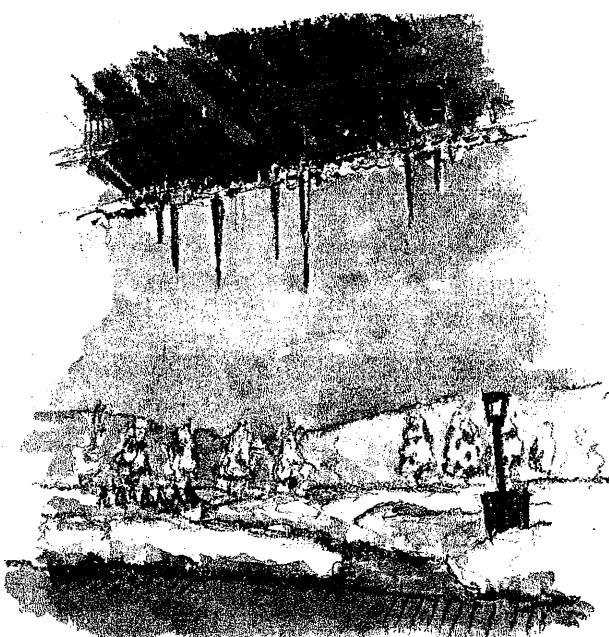
ひけると、ぼくらは、群れて遊ぶようになる。

それこそ日が暮れかかるまで、夢中になつて遊ぶ。学校の校庭の、除雪で出来た雪山で滑つたり、雪合戦をしたり、雪だるまをこしらえたり、それは楽しい。

雪は造形の楽しみも与えてくれる。誰もが道を作り階段をこしらえ、土木設計者になつたような気分をあじわえる。彫刻家にもなる。毎日、大きくなつていくりららを折り取つて、勇者の剣にする。ただこの剣は、ガラスよりもいので、見せびらかしに持つだけだ。折れたつららは、大にやると、カリカリうまそとに食べるのもじりい。

「ひじ」雪のもたらすものを、ぼくは楽しむ。いつもそうだけれど、楽しい時は瞬くまにすげて行く。

「一月の終わり」いよいよ春が、来る。中国大陸に生まれた高気圧が移動して来る



Motoo S.

三月の初めての休みの朝のこと。

おばあは、その朝、目を覚まさなかつた。雪解け水が、「ほほ」ぼれる川べりで、朝早く摘んだおばあのが好物のふきのとうを、みそ汁に間に合うように、父さんと届けに行つた朝のことだ。いつもなら、圍炉裏に薪が燃え、自在鉤に掛けられた黒い鍋から、みそ汁の湯気が立つている時分だ。ところが、どうしたわけか围炉裏に火の氣は無く、家中は冷えきつていた。

川の水音が高くなる。

萬 もの がたり

鳳

大庭

桂

(8)

ネコ・バカ・坊主を思い出して言う。

「ええんだ。ええんだ。」

踏み固められた出入り口に、まず、雪段を刻む。きつちり作るには、シャベルを使う。表の通りでは、スノッパーで道の雪を除いていく。雪はできるだけ川に落とす。三十分もやれば、完了する。

「おばあ、終わったよ」

雪かきをすると、体がホカホカぬくもり暑い。土間でアーラックを脱ぐ。白い雪の中で、一仕事した後のすがすがしいこと。けれど、もし雪が黒かったら、こんな気持ちにならなかんじじゃないかな、と思った。

「じくろうさん。さあ、じはんをお上がり

だあ」

満足そうな表情で、おばあが解説する。

「すんじくうまい。」

「そうかあ。学校の帰りにたんと持たせてや

『よこせ』に座布団が置いてある。

「だっこ、おばあ。そ」は父さんの『よこせ』

だる」

おばあが、おかしそうに笑いながら言うので、ぼくは、ええんかな、と一呼吸していそいそと座る。

「うわあ、うまそう」

ぼくの目を奪ったのは、鉢いっぱいに盛ってある白い大根の漬物だ。さっそく一つ口に入れる。歯触りがほどよい固さで、みずみずしくさっぱりとした甘さがなんとも言えない。

「うまい」

「そうかあ。」の大根はなあ。雪から掘り出して、皮むいて、塩と砂糖と酢で漬けたん

近隣の人と顔を合わせれば、

「坊、えらいねえ」

と、ほめられ、母さんやおばあからも、汁をつまながら声をかける。

「ありがとう。助かるよ」

と言われる。ぼくは、一人前に役に立っているんだ。ようし、あいとやるぞ、と思いつつから、かあさんに持つてけえ」

おばあは、ニコニコ顔でそう言った。

「うん」

早起きしてよかつた。大根漬けを味わいながら、思った。

■世話人会報告

(03/27 於：飯田橋／もてなし 出席者11名)

1. 第2回定期会企画内容

今号表紙にて案内

2. 第5回大平建築宿について

第5回大平建築宿、今年もお盆に開催

日程：8月14日(金)・15日(土)・16日(日)

実行委員長：小林一元

テーマ：『今・環境は』

基調講演：宇井純さん（沖縄大学教授）予定

その他の企画として畠さんのピンホールカメラをつくるやアイヌ音楽を聞くなどを企画中です。

*プログラム及び参加申込要綱については、次号にて案内致します。

3. 98全国町並みゼミ東京大会(第21回)

分科会（ワークショップ型式）

テーマ：『民家・町並みの保全と生活環境の保全』

（主催：吉田桂二+生活文化同人）

住まいも町も、それを巡る環境全体がより大きな環境問題が深まる中で、大きな変化を見せていています。民家に再生や町並み保存がそうした中で、何を視点としてとらえなければならないのかについて、話し合うことにしましょう。関心ある方のご参集を期待いたします。

準備委員（松本、日影、金田、鈴木、豊崎、岡部）

4. 機関誌vol.4について

原稿締切5月末とする。

5. 会員証について

今年から会員の方に生活文化同人会員証を発行致します。デザインと色も決定しましたので会費を振り込んでいただいた方に順次発送いたします。

■同人活動

・伊郷、金田、十川・・・たてもの調査隊がゆく（東京人4月号）

・松井郁夫・・・フィールドノート 日本列島伝統構法の旅（建築知識4）

■事務局より

・次回世話人会 5/14(木) 参加される方は1週間前までに事務局に連絡をお願い致します。

・滞りない会の運営ために98年度会費納入はできるだけ早くお願い致します。

・会報原稿募集してます。私の近作、旅の報告、町並みスケッチなど何でもOK！

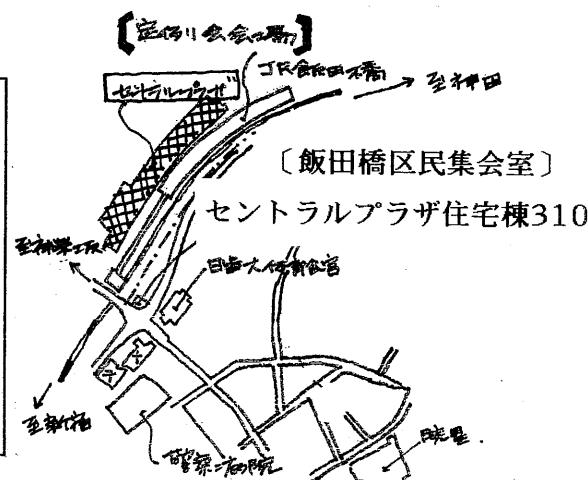
・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

・毎号原稿締切：奇数月20日

編集後記

- ・鈴木光司のホラー小説、『リング』と『らせん』。ベストセラーと聞いて読んでみたら後半のストーリーの強引さにがっかりでした。（O）
- ・埼玉県の100人の女性の母乳中から、環境ホルモンの一種ダイオキシンが耐用摂取量の平均7倍近くの濃度で検出されました。目下、3ヶ月児を育てている私としてはこのまま母乳を続けてもいいのかどうか考え込んでしまいました。（K）

会報編集局：〒102-0071 東京都千代田区富士見2-13-7
連合設計社市谷建築事務所 新井聰



98年事務局：〒273-0031 千葉県船橋市西船5-7-2-201 TEL/FAX0473-32-4413
生活文化同人事務局 松本昌義

生活文化

生活文化同人会報

1998(平成10)年06月号 No.31

(も)	次回定例会案内	...	1
(も)	定例会報告	...	2
(も)	春の川下り感想	...	7
(く)	幸福の建築家になる条件/高橋照男	...	11
(く)	京都旅行スケッチ/佐々伸子	...	13
(く)	掲示板	...	15
(じ)	連載「夢屋ものがたり」⑨	...	16
(じ)	大平建築宿案内	...	18
(じ)	世話人会報告・同人活動・事務局より	...	20

■ 定例会 98/7/3(金) 6:30 ~ 9:00 PM

於: 池袋 建築実務専門学校

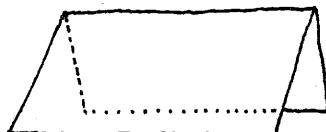
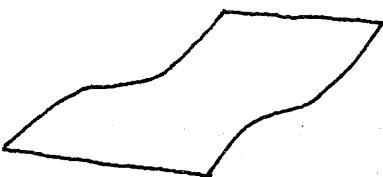
(最終ページ参照)

面白架構

数字からではなく形から

講師 有限会社 T&S 総合建築設計

監理設計士 高橋 伸一氏



構造というと、計算、難しそう、というのが普通の印象。しかし、仕事とはいえ物事楽しく身に付けていきたいものです。薄い一枚の紙も、二つに折ることによって強度が変わってきます。そんな視点から構造の世界のお話しを展開していただけると思います。乞う、ご期待。

世話人 松本昌義
岡部知子

(申し込みは6月20日までにFAXにて事務局へ)

「町並みと緑」赤坂信（千葉大学園芸学部助教授）

二つの既視感（デジャブとネオデジャ）

ある場所に立った時、その場所が初めての場所であるにもかかわらず、以前にも来たことのあるような錯覚に陥ってしまうことを既視感（デジャブ）と言う。その錯覚は夢が現実化したものなのか、夢野久作の言う遺伝的記憶の表出なのかわからないが不思議な自己体験として感じられるものである。そしてその既視感現象は匂いや音などの五感が誘発させるものであることも見逃せない。しかし現代の忙しい生活からはこのようなロマンチックな空想的な既視感は失せてしまいつつあるように感じる。

そして別の意味での既視感が大量に世の中に溢れ増殖している（ネオデジャ）。情報という記号は無意識に身体に蓄積される。大量な情報は人を見たことのある、触ったことがある、行ったことがある、作ったことがある、逢ったことがあるというような錯覚と思い込みの世界に人々を誘い込む。電算の世界でいうバーチャル的な計算を脳が自動的におこなう。この計算機は人間の時間的体力をはるかに超えた速度で時空をかけめぐらることができる有能なものであるが、ナマの対象物を紙に印刷された均質なもののように思わせてしまう危険性も合せ持つ。

僕の建築手帳より抜粋

近代の都市緑地の発達史もしくは造園史の研究者である赤坂信先生の講演を聞きながら以前に横須賀線の車中で書いたデジャブとネオデジャについてのメモを思い出した。

赤坂氏は「現代生活と森林」「都市緑地とスカイライン」「身近な緑の再発見」の3つのテーマにわけてお話ししてくださった。

僕がこの講演を聞きながら、なぜ前述したような既視感という言葉を連想してしまったのだろうか、この生活文化同人定例会の報告（赤坂氏が話した言葉）を書きながら自分なりに考えてみようと思う。

○風景の知覚

フランス語でペイサージュの意味は「景色」を意味すると同時に「風景画」という意味も同時に持つという。つまりフランスは現実の姿と絵の風景を同一の視点で認識する。一方我々日本人は絵を鑑賞して現実の風景をイメージするよりも先に作家の個性や作家がとらえた風景の印象を先に感じとる。日本人とフランス人の違いの言及は避けたいが（日本人でもフランス的な人もいるかもしれないから）、赤坂氏は風景の知覚のしかたは二つあるという。一つは目の前の物理的な存在としての理解、もう一つは現実よりもずっと単純化され類型化された個々が持っている既存の概念としての理解である。

前者は体験的なものであるが、後者は教育やテレビや新聞などのメディアを通じてのものでありその人が属する社会集団の「慣習やおきて」に左右されやすい。例えば屋敷林が見える。日本人はその奥に隠された民家をイメージするがフランスのノルマンディーのボカージュ（境界林に囲まれた畠地・牧草地）で頂部を剪定した柳の木立をみるとその奥には沼の存在をイメージするという。



カイニョと呼ばれるスギの屋敷林（富山県砺波平野の敷居村）

このような風景の概念的理義は室町時代に「道行文」として異常に発達した。道行文は有名な場所を巡る架空の旅行記であるが、その読者は、まだ見ぬ土地を道行文（メディア）を読むことによって行ったことない場所にあたかも行ったかのように思い楽しむのである。

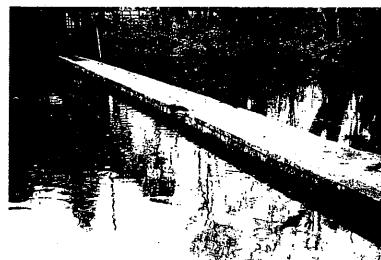
また江戸期では見たこともない文字や絵によって伝來した中国の名勝を見立ての手法で作庭した。人はその図式化シンボル化された庭（観念の世界を現実の世界におろした図形）を見ながら本物を想像するのである。これらのつくられた「美の図式」を理解するには受けてにも高い教養が必要とされた。

このような行為を以下のような簡潔なフローに書き直してみると現代の情報社会の問題として浮かび上がってくる。メディア（媒介物）を通じての理解 → 本物なしで語り描き想像する → 本物よりもメディアを重視 → 固有の実体に興味が薄れる

ナマよりも加工されたもののほうが親しみを感じるということなのだろうか。ナマの自然には毒をもつ蛇も熊もいるが、観念としての自然ではどう猛な熊も愛らしい者と変わるのである。



後楽園庭園の小鹿山
中国の名勝「盧山」にちなんで名づけられている。（東京都文京区小石川）



後楽園庭園の西湖堤
中国の名勝「西湖」とその堤の風景をかたどったもの。

○自然志向のなかの矛盾と木材の連関

地球環境の問題が大きくなるにつれ、室内化学物質汚染の問題が深刻になるにつれ、人々はナチュラルなものを好むようになってきた。しかし人間の生命は他の生命への依存なしには成立しないし、生命の連鎖は環境に欠かすことはできないものである。ここに解決が困難な自己矛盾が起こる。すなわち人々は愛らしい動物の愛護を叫び、人々は森林の伐採に反対する。同時に自然を愛好するがゆえに人々は木の家を好む。木材消費の肯定と伐採の否定の矛盾が共存している。ここにもまたメディアという大きな壁が存在する。

メディアは、伐採される丸太と東急ハンズで手軽に買える板が同じ生産の連環の上にあることを忘れさせるのである。森林を育成するには膨大な手間が必要となるが、生産と消費の連関の図式が消費者からほど遠いものとなることによって漠然とした森林伐採の否定につながり、森林の生産行為の軽視あるいは無視に結びつくのである。

いうまでもなく森林は樹木という生物で構成される。自ら成長しゆっくりと変化していく。この緩慢な木の生育を人間の目は樹木をあたかも固定された非生物のようにうつし、木は永久不变で静止した絵のようであると錯覚させる。しかし森林は単なる壮大な環境調節の無機的存在ではない。日常的にこれからも木を使用していくならば木材の生産と消費の連環について双方の立場からナマの声で知恵を交換していかなければならないのである。

○森林は近代国家のドル箱だった

現代は森林に対して無関心である。それは現代において森林が経済と政治の面で中心に位置していないからといつていい。森林で儲かればもう一度人々は森林に目をむけるのである。時代を近代までさかのぼる。明治は森林に目を向けた時代であった。1897年（明治30年）に森林法が制定された背景には殖産興業策の一環としての官林経営があった。

その森林経営の見本となったのはヨーロッパの国家主義である。臣民たる国民は国家のためにあるというものが、明治政府は森林を国家の富の源泉としようとして躍起になった。森林をという永久に富を生み出す装置を早く入手し回転させるため入会地などの旧来の利用形態を強引な方法で排除し官民有区分をおこない民衆の利用を制限していったのである。明治時代は山から人を追いだした時代だったのである。

それでは明治政府が学んだドイツは当時の森林風景の美しさをどのようにとらえていたのであろうか。19世紀後半に「森林美学」を提唱し、同名の著作（1885）を出版したザリッシュという人物は、育成と生産が管理された森の美しさを論じた。「つくる人の美学」つまり用と美の統合である。

○現代の生活と森林の存在

森林法が制定されて100年経過した森林が現在の状況である。林業と山村の暮らしは近代以降さまざまに変化し、民有林の拡大造林で造林事業の担い手が変わっていった。1960年前後にはエネルギー革命によって薪炭の需要が急激に減少し、林業の衰退と共に山村社会が崩壊していった。

過疎をくいとめるためにさまざまな山村振興策が講じられていく。住宅地が造成され都市型生活者の新しい集落ができる。旧住民はあいかわらず生産として森林を位置づけ、新住民にとっての森林は絵の風景として位置づけられる。絵としての風景（図式的理解）には田舎らしい要素は欠かせないものであり、高圧線や近代的なビルはあってはならない。

農村の中で都市型生活が可能なのは情報通信と交通網の発達があってのことであるが、ここにまた自己矛盾が生じ、「つくる側」と「眺める側」のミゾができてしまう。新住民にとって山村風景は緑のやすらぎとして保護していかなければならないが、新住民は森林を実在して触れることはない。実在としての森林はつくる側が広い空間と長い時間をかけた成果としてできたものであり、その結果として環境の安定と風景の維持が可能となる。両者のミゾ（メディア）を埋めなければ実在の風景が維持することはない。眺める側が風景の傍観者から当事者への転換をはかっていかなければならないのである。

○環境のリハビリテーション

ところで都市に求められる自然として、しばしば水と緑があげられるが、都市近郊に住む一般の庶民は雑木林に対してどのようなイメージをもっているのだろうか。雑木林で「チカンに注意」という看板をよく見かける。ゴミが不法投棄され河川はドブ川である。雑木林は「くらい」「きたない」「こわい」場所なのである（まるで再生前の民家のイメージのようだ）。

身近な森林は現実に僕の傍にあっても、自己の理想とする「みどり」としてポジティブに認識されないのである。私たちは自己のイメージと僅かでも違うものは切り捨てるか逃避する発想しかないのである。現在の環境を身近なものから改善していくためには、メディアに支配された絵的な森林観念を捨て、環境のリハビリテーション（手当てをする、なおす、つくろう、育てる）をしていかなければならないのである。



大都市縁辺部の森林に見られるゴミの不法投機（松戸市）

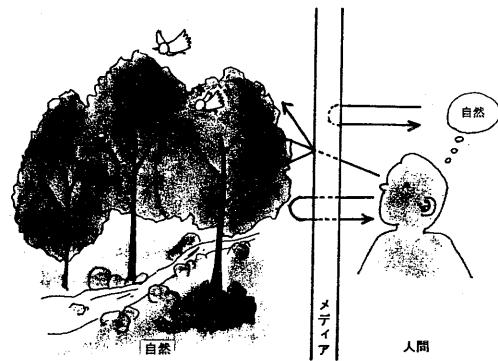
○マスメディアの功罪

私たちは「みどり」や「森林」に関する様々な知識を教育やマスメディアによって正しく理解したつもりになっている。肉化しない知識はあくまでも自己の身体の外側にある。知識の伝達手段が高度に発達し、実体験と知識の距離が縮まってきているように感じられるがそれは漠然と感じているだけである。

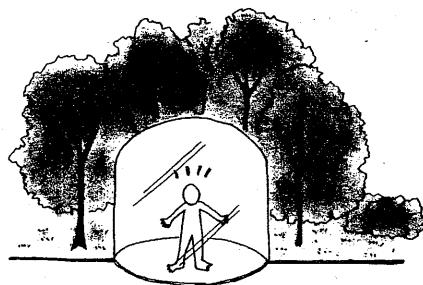
メディアとは媒介するもの、伝達するものを意味するが、同時にメディアは伝達するものとされるものとの隔てる存在もあるのだ。自然と対話しているつもりが、実は自然ではなくメディアと対話し満足しているのである。東京ディズニーランドの近くにある葛西の水族館には巨大な水槽がありサイボーグのようなマグロが回遊という目的に向かって泳ぎ続けている。マグロは厚いガラスを通して観賞される。厚いガラスは一種のメディアであり、厚いガラスはマグロの回遊を映画のように私たちを楽しませてくれる。

ではこの厚いガラスの向こうに実在の森林があったとしたらどうであろうか。その森林に猿でも走っていたら…………もうそこは動物園か植物園でなのである。

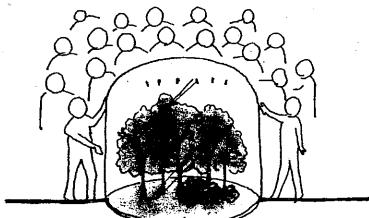
そろそろガラスを薄くしていかないと私たちの感性のほうが実在よりも先に消耗してしまうのではないかと思うのである。



自然-メディア-人間のコミュニケーション
「自然」に投書しても返答はないが、マス・メディアならそれは可能である。



マグロ-ガラス-人間のシーマ
目の高さでマグロを見ることはできるが、決して両者は触れ合う事ができない。



手つかず(?)の森林を守るカプセル
カプセルに入るのは人間それとも森林?

※第1章の記録は赤坂氏の講演内容を「遠い林・近い森--森林観の変遷と文明 赤坂信共著」を参考に僕の私的な意見も若干加え報告書としたものである。

2、都市緑地とスカイライン

僕の友達で東京タワーが死ぬほど好きな人間がいて、彼は仕事そっちのけで夜な夜な東京の街を歩いている。何のために歩いているのかというと東京タワーを探しているのである。僕が東京タワーなんてどこからでも見えるじゃないか、品川駅の横須賀線ホームからだってバッタリ美しく夜景がみえるぜ。と言うと、彼はそうじゃないんだと言う。東京タワーが見える隙間を探し回っているんだそうだ。路地の隙間から東京タワーのカケラでも見ると嬉しいそうだ。

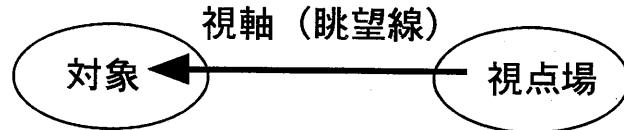
赤坂氏は眺望行為の3要素として「視点場」「対象」「視軸」をあげる。このどれかが欠けても眺望がさえぎら、特に視軸が大切な要素であるという。

たとえば海拔10m後楽園庭園から海拔約30mの北の丸・田安門まで1200mの距離しかないが、この眺望をさえぎるものは、トヨタ本社ビル、住宅金融公庫、首都高5号線、日中友好会館がある。赤坂氏は公的なオープンスペースからの視軸は公的な保証で守るべきだと説く。いずれ視軸をさえぎる建造物が壊される時が来たら、せめて視軸をさえぎらないような建造物にしなければならないという眺望の保証。

地上からの眺望の再生。台地からの眺望の再生。100歩譲って歩道橋からの眺望の再生。僕の友達はゴジラではない。彼は東京タワーを自分のアパートから見えるように視軸をさえぎるビルを壊すことはできない。僕の友人は「対象」一番よく見える自分だけの視軸を探しているのだった。



眺望行為の3要素



3、身近な緑の再発見……クネの形態

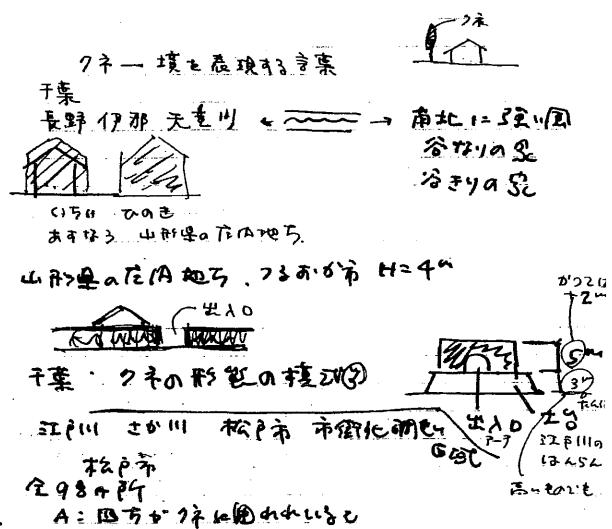
クネとは境を表現し、背の高い生け垣を意味する。防風のために家の周囲に植栽され1階の棟の高さまであるものも珍しくない。

旧天守閣(江戸城)から20kmも満たない場所に、このクネが今でも現役で使われている。場所は千葉県松戸市の江戸川に沿った市街化調整区域。赤坂氏は全98家屋にクネを確認し調査した。クネの標準的な形態は、下部に3mほどの土台があり洪水から守っている。その上にクネの高い生け垣が5mぐらいの高さ植えられ、一部アーチの出入り口がくり抜かれている。クネを構成する樹種はモチの木が一番多く。ツバキがその次に多いという。クネは家の格を表現し、家が引っ越しときはクネも一緒に引っ越し例もあるらしい。新しくクネを植えて造っている家もある。樹木が住まいと現在でも共存している事例として貴重なものである。あらもひねえやう!!



クネの風景

刈り込まれた高垣-築地松(島根県出雲平野)



『春の川下り』

神田川（浅草橋一小石川橋前）→日本橋川（小石川橋前一豊海橋）を
船で移動して 感じたこと

建築設計に携わる者としては、周辺建物がどのように川と関わりを持っているか、を眺めるつもりでしたが・・・予想通り、川には「無関心」な設計が目立ち残念でした。

（日本橋川は完全に高速道路の下となり、あいにくの曇天と重なり、どうにも陰鬱な気分になってしまいました。私たちは「モノズキ」にしか見えなかつたでしょうねえ。）

そんな中、私にとって一番印象に残ったのは、水上から眺める「橋」でした。浅草橋から出発して、神田川で11本（？）、日本橋川に入って20本あまりの大小の橋を「くぐり」ましたが、石造りの古いもの（もっと大事にされても良さそうな常磐橋など）や、なんでもないようでいて裏から見ると設計者のこだわりのディテールや施工者の丁寧な仕事があったりするスティールの橋（きじ（雉？）橋だったかな）、周りをタイルで化粧しただけでチョット偉そうにしているの味のない橋（湊橋といいます）等々・・・普段「渡って」いて見えない部分を手の届くほどの近さで眺め、「橋」そのものに、小さな発見と驚きの連続がありました。

この日は、おまけ（？）ルートとして、日本橋川から隅田川に出てから、お台場、更には大田市場の方まで行きました。「狭い川」から出てくると、「広い川」はもう「海」のようです。豊海橋を越えて隅田川に出た途端の「開放感」は言葉では言い表せません。トンネルを抜けたら海が！という感じです。

番外1：この日に船で下をくぐった勝鬨橋（築地一月島）を、以前に、地元のおじさんが「（橋といえば）やっぱり勝鬨橋だよなあ！」と言っていました。私は、何が「やっぱり」なのかなあ、とずっと気になっていました。

後日、この橋を渡る機会があり、開閉式だったという話を聞いたり（その痕跡である信号や操作室を見たり）、この夥しい数のリベットを見たりすると・・・コレハ コドモガ チョウゴウキンロボットニ メヲカガヤカセタノト ニテイルノデハ・・・当時の（夢を運ぶ！）技術の象徴としての存在感（の記憶）が、他の橋とは区別されて「やっぱり」と語られる程の橋にさせている！という（勝手な）結論が出てきました。・・・とすると、今後 技術だけでは夢を見られなくなった時代に、どんな橋が人々の心を掴むのでしょうか？？？

番外2：東京も昔は「水の都」と言っていたと聞きます。「水の都」といえばベネチア、私も2度、足を運びましたが、そこでは、運河周辺の建物が昔の姿を残しているので、運河脇の小さな広場から水上交通を眺めながらボーッとしていると、様々な空想が浮かんできます・・・凱旋してきた華麗な船隊に、一つ一つの窓から人々が顔を出して、思いっきり手を振って・・・運河の周り中お祭り！

振り返って 東京は・・・「さびしい」というのが「感想」でした。

赤桐 雅子

東京のワンダー・リバーアイ

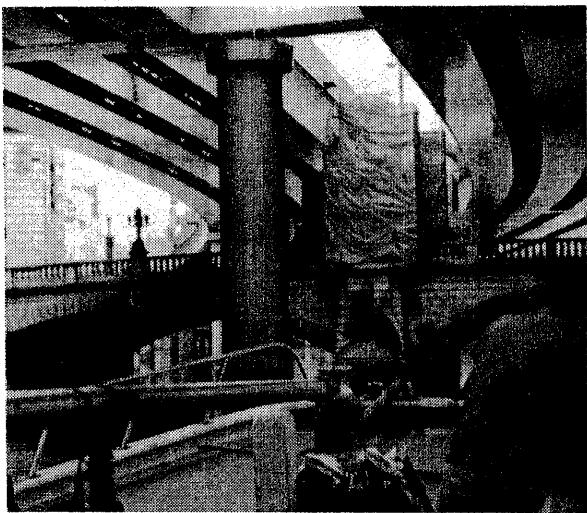
平山 友子

浅草橋を出発した船は、神田川をさかのぼる。目に見える光景はコンクリートの護岸スレスレまで建てられたビルの裏側……。江戸情緒はどこ？ ときよろきよろしていると、今の東京の川はけっこう面白い顔を見せはじめた。例えば、雑居マンションの外廊下。各階の住人が競うように手すりに植木鉢を並べていて、裏庭や下町の路地に通じる生活感がそこにだけ漂っている。だれかに見せようと意図したわけではないのだろうが、ほっとする温もりがあった。

やがて、御茶ノ水へ。この辺りは、神田川に合流する暗渠が何本も真っ暗な口を開けている。きっと、あの中には真っ白なワニや、巨大化したピラニアが住んでいるのだろうと、勝手な想像をして楽しむ。普段、私たちが省みない東京の川には、何が潜んでいてもおかしくないという気がする。ちなみに、川面は思ったよりもきれいで、ゴミも少なければ、においもさほど気にならない。変なものといえば、聖橋辺りにプカリと浮かんでいたリュックサック。一体だれがどんな経緯で落っことして、中には何が入っているのだろう。

それよりも、御茶ノ水駅のホームや聖橋の上にいる人たちにすれば、缶ビール片手に流れてきた私たちこそ、得体が知れないものだったに違いない。でも、橋の上と船の上で見詰め合い(?)、手を振れば振り返してくれると気持ちが良いものだ。今度は白塗りの仮装や、三味線に合わせて唄いながら川下りをして、町行く人の反応を楽しむというはどうだろう。

閑話休題、後楽園から日本橋川に出ると、頭上を覆う首都高速道路によって風景は一



難然としてS.F映画っぽい日本橋川周辺

変する。たしかに圧迫感はあるのだが、首都高速の底がずっと先まで写った写真を見ると、映画の近未来都市のようなのだ。屋根のない乗り物で、土木建造物の裏側を見るというのも、通常はできない経験である。橋の下側などは、予想以上の美しさであった。

いよいよ船が隅田川に出ると、開放感で知らず知らずのうちに深呼吸していた。ここは海か、と思うぐらい広い。強く吹き付ける風と波をものともせず、ご存知お台場へ。ここで感激したのが、佃煮屋のおじさん。小さな船で屋形船にスルスルと寄って行き、船上で商売をしているのだ。やっぱり、東京もアジアなんだと改めて実感した。水割りから潜水まで、水に関する事をこよなく愛する私は、いつかおじさんに弟子入りしようと心に誓い、反省会に突入したのだった。

3月28日 川から東京を見る

岡部知子

心配された雨はどうにか、降らずにいてくれたが、時間がたつにつれ気温は下がり風が冷たくなった。雨のために用意したビニールのカッパは、ウインドブレーカーとして利用した。東京で舟に乗るのは始めてのこと。時代劇などに見る舟遊びというと、屋形舟で可愛い子をはべらせ、お酒を酌み交わしながら、ご馳走を食べる、男性の遊ぶところというのが普通の認識。今の私たちとは関係のない世界だが、事実可愛い子とまではいかなくても、(十分可愛い子はいたいた。)屋形舟に天ぷらというのを期待して参加した人もいないわけではなかったようだ。私たちに用意された舟は定員30名の釣船。椅子が手すりに向ってぐるりとあるだけのもの。もちろん屋根もなければ、風除けもない。川から陸側を見るのが今回の目的だから、それは当たり前の話。しかし、私たちはこの寒さの中カメラ片手にキヨロキヨロ。橋の上や、道から見た入からは、異様な集団に映っていたのかもしれない。プロカメラマン二人の参加によって、いつもより大勢の人が気を入れてシャッターを切った。その証拠に後日、写真コンテストをしよう、という催しがその場で決定した。

川が進むとY字や丁字に川が合流したり、別れたりと、地下鉄のように、選択をすることが出来る。まさに東京は川の町。川は運河なんだということが、実感できた。しかし、それは昔の話な

のかもしれない。寒い時期でもあったため悪臭こそはしなかったが、水は濁り、ごみが浮き、川沿いの家はほとんど川の存在を意識していない日常生活。もっとも高速道路に蓋をされ護岸整備された川には、人が求めるものが無くなっているのかもしれない。川から見ても様々なビル、看板が目にはいる。陸とどんなに違うのかと、過度の期待をしていたことを少々馬鹿なことだと気が付いた。やはり今ここは大都会。



ただ、月島、佃島は少し前に今回同行した志村さんを案内人に、見学会を企画し散策して廻ったところ。二件長屋の並ぶ町並み、自転車でさえ通るのがやっとの路地裏、川に向かって建っている佃煮屋さん、人情を肌で感じた月島温泉(温泉ではなく銭湯ですが)。まだ頭に鮮明に残っていただけに、川からその町を見たとき、改めて川を意識した土地であったということを感じ、その昔の生活が想像できた。やっぱり東京は昔は川の町だったんだ。

舟下りの数日前に義弟から借りた、「都市廻廊」難しそうなので始めから読むと、目的の廻まで行きつきそうもないでの、拾い読みをした。明治の建築に歴史を残したコンドルを中心とした建物に興味をもち、以前からいくつか見て歩いていたが、その一連の建築家の中には出てこなかった妻木頼黄の事が、そこには書いてあった。当時の建築界とは少し違う流れの中で活動したため、最後には潰された様な形になった人妻木が、どんな思いであの日本橋を設計したのかと思うと、今まででは橋の存在さえ気にしていなかったのに、下からも意識したという橋をやはり見上げて見たいと思ったのだが、橋に近づいてくると、真ん中にブルーシートが目に入った。船頭さんに聞くと「只今修理中」とのこと。私はにわかに知った知識ではあったが、皆さん今回メインの楽しみだったのでは・・・。設計者の参加の多い今回の企画、大先輩の残していく大作を目にすることが出来ず、涙してシートを見ていた人もいたであろうと思うと、企画を手伝った者としては残念な気持ちでいっぱいだった。

幸福の建築家になる条件 連載 I

日本建築積算協会 コストスクールディレクター 高橋照男

建築設計者はコストに強くなければならない

1章 建築設計者のコスト認識の甘さ

1-1. 建築のコストプランニングの甘さ

建築プロジェクトはその金額が非常に大きいのであるが、事業発想から設計に至る段階のコスト検討の手法が他産業に比べて実にお粗末で甘いとわれわれは反省しなければならない。その根本的な理由は建築はあまりにも多くの企業、それも利害が対立する複数の企業から成り立っているところに原因がある。これが原因で次に述べる二つの理由から建築界は企画設計段階のコスト計画にどうしても甘さがあるのである。

第一の理由、それは建築コストは経済という大海の波間に浮かぶクラゲのごときものであるという認識に立っていることである。バブルといえば急上昇しその崩壊といえば急下降しそれはまるでジェットコースターに乗っているようなものである。従って建築チームのコスト説明というのは設計者も含めて「経済の現状におけるコストの妥当性の弁解」に終始している状態である。つまり私の力ではどうしようもない、社会全体がこうだから建築コストもこうざるをえないという弁解である。そして今まで建築チームはこのような説明でなんとか建築主をあきらめさせ（？）納得させて通してきたのであった。これが建築チームのコスト計画を真面目にやらないことの第一の理由である。

第二の理由はコストの成り立ちが複数の企業によることから他社を絞ればなんとかなるという現実である。つまり真面目なコスト計画をするよりも経済の予測、建設会所の受注意欲、最後はネゴによるごり押しに持ち込む技術、このような方法に頼ってきた。そしてそれがなんとなくうまくいってきたのである。これが企画設計段階の科学的なコスト技術の発展を疎外してきたのである。つまり建築は常に複数の企業から成り立っているから、そこに経済原理をうまく働かせれば無理をしてでも受注してくれる者が出現してくれるという思想である。このような思想のもとでは「コストの事は心配せずに大いに自由な良いものを設計しておこう」という思想がまかり通るのである。このような思想が企画段階で存在すれば設計マネジメントという真面目な手法などは「お呼びでない」のである。

以上のような背景があってそれが建築界における企画設計段階のコスト技術の発展を疎外してきた。その結果どのような事が起ったか。次の事実を見てもらいたい。これはJIA（日本建築家協会）が「顧客満足度調査」（1996年）を行った時の結果である。

建築主が不満を抱いている建築家業務のベスト6

第1位 プロジェクトの予算計画

第2位 コストコントロール力

第3位 工事費概算書の作成

第4位 見積内容検討・調整

第5位 完成後のアフターサービス

第6位 維持保全計画

（JIAデータファイル023-1）JIA 業務委員長 橋本喬行による）

なんと不満足項目のうちベスト4がコストのことではないか。これはただ建築家にだけ向けた不満でなく日本の建築界全体が批判されているといって差支えない。パソコンを見よ、家電を見よ、高額でとても手が届かなかつたものが今や誰でも買えるではないか。それに比して建築コストは建築界が総掛かりになってコストダウンを阻んできたのではないか。いま建築界は社会からこのような批判を受けているのである。

そこでようやくというか不承不承というか最近になって設計段階におけるV Eと称してコストダウンの形式ともいえる運動が始まっている。施工段階におけるコストダウンの技術は建設会社が日夜の努力で非常に向上しているが、企画設計段階のコスト計画は先にも述べた通りまったくといってよいぐらい不毛の状態である。

1-2. AIA, RIBAの反省

建築主の建築家への不満は日本ばかりではない。米国と英國の例を見てみよう。

AIA (The American Institute of Architects, アメリカ建築家協会) と RIBA (The Royal Institute of Architects, 英国王立建築家協会) は、自分達がオーナーの満足を得られなくなってきたことに危機感を覚えて反省をした。その記述の一部を次に示す。

クライアントの「建築家への期待」調査 (AIA)

What Clients Need (クライアントは何を必要とするのか)

A Study of Business and Institutional Clients Expectations of Architects 1993.11

(マネジメント能力に関する部分のみ抜粋要約)

- アーキテクトは創造的であるが、エリート主義者であり、予算問題に無関心であると思われている。
- クライアントの多くは、「アーキテクトはあなたのお金を節約する」という言葉があてはまらないと言っている。
- アーキテクトへの期待は第一にクライアントの要求への敏感な反応と複雑な許認可をマネージする能力。第二はスケジュールと予算に執着する態度。第三は経験、デザイン、環境問題への配慮である。設計報酬は関心が低い。
- クライアントが、アーキテクトにあまり価値を認めていない分野は、建設プロジェクトマネジメントやファシリティマネジメントおよび資金獲得への援助と同様に、例えばプログラミングや敷地選定のような設計前サービスである。
- クライアントがアーキテクトを選定する基準は、アーキテクトがよく耳を傾けよく反応するかどうかである。
- アーキテクトは安い報酬を強調するよりも、スケジュールと同様に予算管理の能力を論証すべきである。
- もしアーキテクトがクライアントのよい聞き手でないとしたら、クライアントはアーキテクトを最も基本的なサービスについてのみに（仕事の範囲を狭めて）利用し、（非常に大切な）設計前サービスや設計後サービス（などのマネジメントの仕事）については、他の人々に任せられるようになるに違いない。

21世紀への建築プロフェッショナルの戦略策定 (RIBA) 1992.5～1993.10

(プロジェクトマネジメントの必要性の部分を抜粋)

クライアントの認識

1. アーキテクトは、プロジェクトのマネジメントが貧困で、特に工費と工程の点で貧弱である。
2. アーキテクトの業務遂行能力には、全く信頼がおけない。
3. プロジェクトの予算について、アーキテクトが関わりたくないという事実にはうんざりしている。
4. アーキテクトには、デザインにこだわり工費を無視するものが少なくない。
5. 工費と工程の確実なマネジメントをしてくれさえすれば、十分な報酬を支払う用意はある。

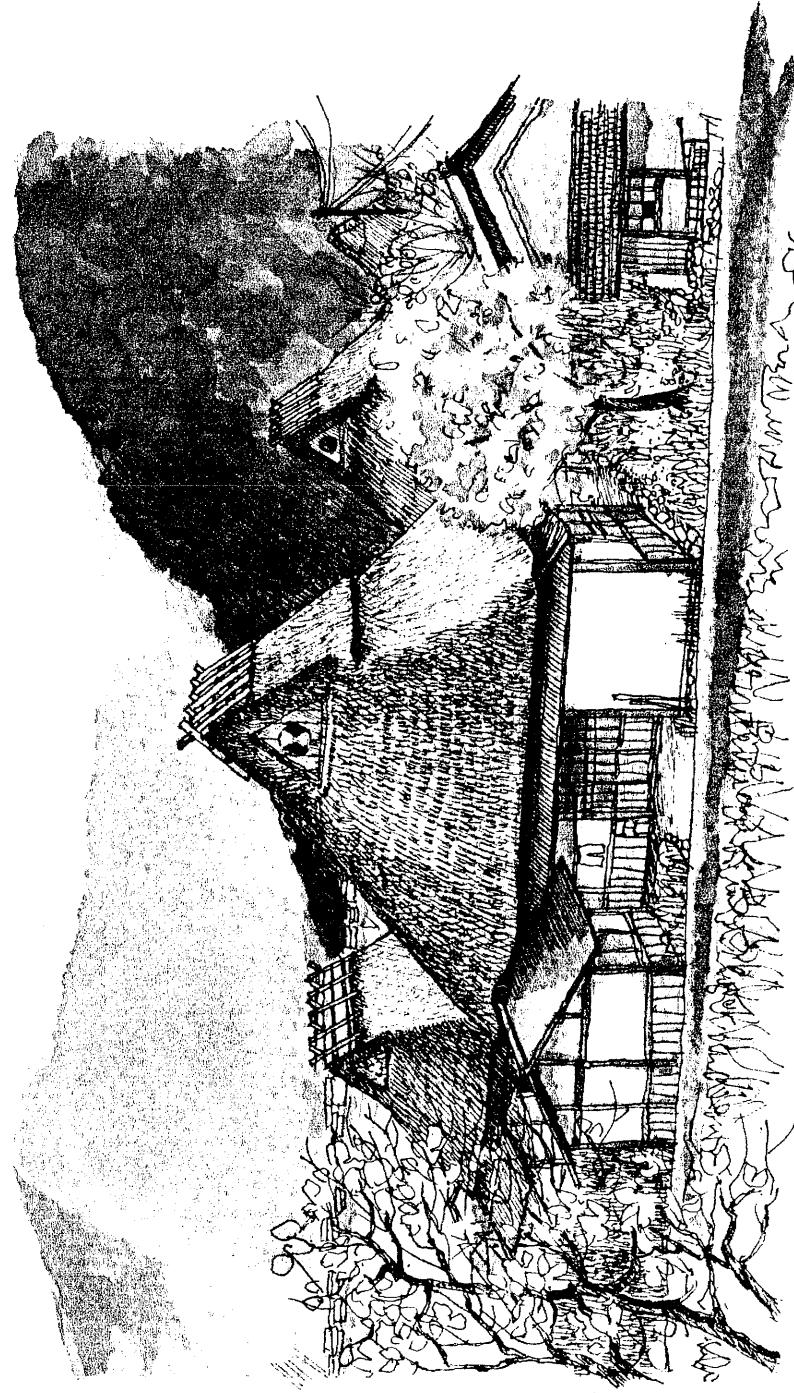
これを一読してすぐわかることは、建築家は本来工費とか工程管理ということに苦手であるばかりでなくそれが本質的に嫌いで、できるならばそれをやらずにすませたいのである。このような姿勢であるから、オーナーから不満の声が上がってきたのは当然である。

京都旅行 スケッチ



すみや
角屋 中戸口

江戸時代 揚屋として栄華を誇った角屋。室内装飾・竟匠のあきらの美は、大胆さに、息をのんだ。



美山町

段々になつた棚地にたつ茅草の家々。絵に描いたような（実際、描いている人がいよいよ）のがかな農村集落。民家園とちがって、この家もみな、生活の器として生きている。

連合設計社市谷建築事務所 佐々 伸子

民家に学ぶ

伝統技法研究会 10回連続講座

民家に学ぶ 内容予定

★掲示板

講師 戸張公之助

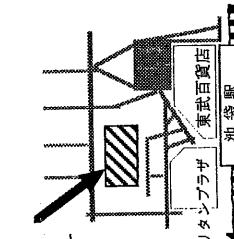
10回連続講座

伝統技法研究会

使い捨ての時代も終わり、リサイクルや自然保護が声高に言われている中、古いものに対する価値の見直しも行かれています。建築界でも民家に対する関心は年毎に高まっているようですが、私達は民家をどの程度理解しているのでしょうか？ 民家について幅広く勉強しようと企画したのがこの講座です。講師は、民家を独自に調査研究し、また実際に解体修理工事にも従事している戸張公之助さんです。

10回の連続講義で、スライドも交え、技術面から生活まで分かりやすくお話を詳しく予定です。ぜひご参加下さい。

■ 第一回	民家から何を学ぶか
■ 日時	1988年5月13日(木)
■ 申込み	18：30～21：00



- 場所： 東京芸術劇場（池袋）中会議室 ☎03-5391-2111
 ■ 会費： 一回につき1,500円 学生800円 当日会場で集めます
 ■ 申込み： 申し込み用紙に記入の上、FAXにてお申し込み下さい
 ■ FAX 03-3367-1175 (伝統技法研究会会議室)
 ■ 問合せ： 03-3317-5332 (伝統技法研究会 見野)
 03-3406-0750 (伝統技法研究会 金田)
 〒 目白

民家について、これまで民俗学の立場からは、主として、その造りに関する地域的な特徴の収集と分類や、生活習俗の研究が、建築史学の立場からは、間取りと構造の発展、および、その歴史の組み立てが研究されてきました。どちらに壁かな成果をあげてきて、民家の研究はひとまづ終了したかにみえます。しかし、ここ数年、いくつかの調査や復元の課題に巡り合わせて、技術と材料についての記録や研究が、以外と次第に進んでいます。そこで、浅学、非力をかりみず、仕事の合間に見聞きしたこと、整理できればと考え、ばらつきがあり、足りないところが多いのは承知の上で、試みることにしました。

ご一緒に勉強できれば幸いです。

申込み用紙

第1回—5月13日(木)

民家から何を学ぶか

- ・今なぜ民家なのか
- ・民家の潮流
- ・言葉に残る古い音の遺伝子
- ・自然の整理を体で学んだ職人

第2回 6月11日(木) 近世民家の成立

- ・掘立てから石礎へ
- ・道具の発達
- ・道具の発達と大工の参加

第3回 7月9日(木) 架構の発達と住まいの変化

- ・上層と下屋、頭つなぎから床へ
- ・輪組と小屋の分離
- ・土蔵から上がり床へ
- ・生活の変化と間取り構式空間から接客空間へ

■ 第4回 9月日() 基本の構造 (1)

■ 第5回 10月日() 基本の構造 (2)

■ 第6回 11月日() 壁の技法

■ 第7回 12月日() 屋根の技法

■ 第8回 2月日() 座敷と天井

■ 第9回 3月日() 納戸・押入・便所・その他

- ・土台と地盤、地業
- ・土台の仕口、縫手
- ・下棟のふんざき土台実生の杉
- ・大引=足固め

- ・柱および柱間寸法
- ・大黒柱と差鶴居
- ・通し檜、貫の仕口、燃手
- ・小屋組、単柿から複数へ
- ・小簷下地、土、竹、蘆

- ・桧巻物に見る中世の壁
- ・草葺、板葺、土葺
- ・瓦葺下地、土、竹、蘆

- ・押し板、床の間
- ・長押・補助構造から意匠材へ
- ・多様な天井
- ・民家の道具

- ・自然環境と生活
- ・生體系の利用と感謝、屋敷神

- ・町屋、蔵、土蔵作り
- ・町屋の造り
- ・土蔵造りの技法と材料

第10回

一般・学生

・勤務先

FAX ()

TEL ()

は、どれを食べようかとお菓子の品定めをする。

「あのね」

「母さんが言つたので、お菓子えらびを中断して、母さんの顔を見た。」

「母さんね。お仕事やめようと思つた」

「ええー、どうして?」

「ぼくは、あまりびっくりしたので声がかずれた。」

「あなたが学校から帰つて来る時、今まではおばあちゃんが、『おかえり』って迎えてくれたでしょ。今までは、おばあちゃんに甘えてたけど、今度は、母さんがあなたを『おかえり』って迎えてあげなきゃ」

「母さん、母さん」

「ぼくは、笑いながら言つた。」

「ぼくはもう、小さかないよ。そんなことしてくれなくたって、平氣、平氣」

母さんは、そう言つてみたものの、じわつとうれしいものがあった。そうしてくれたら

なあ、といつ気持ちが、心の中でぐるりと回

った。ぼくは、テーブルのおやつをもつて一度見直すと、まず、月餅げつべいを食べることにして、手に取るとぼくっと大きく一口食べた。都会の味だと思いながら飲み込むと、言つた。

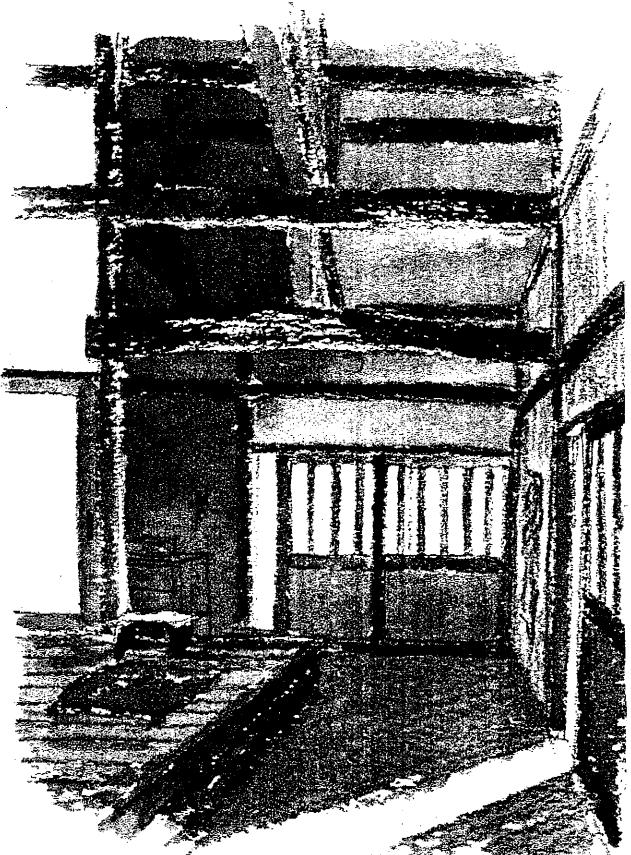
「母さん、おばあが言つてた。母さんの仕事は、人を生かす仕事だって」

母さんのほほに、さうと赤みがさした。

「そんなことを……、おばあちゃんがうん、とぼくはうなずいた。

母さんは、そう言つてみたものの、じわつとうれしいものがあった。そうしてくれたら

なあ、といつ気持ちが、心の中でぐるりと回を生き生き元気にさせる人だつて」



母さんは、大きな白いタオルで顔を覆つて泣いていた。ぼくはなんとなく、自分が少し大人のような話をしている気がした。だから、調子にのつて続けた。だけどほんとうは、母さんが泣きだしたので、あわてていたのだ。

もののがたり

(6)

大庭 桂

「おばあ、ふきのとうだよ」

大きな声でぼくが言う。
返事がない。

「裏に出てるんかなあ」

父さんを見上げる。父さんの顔が「わざつて
いふ。

「おまえ、いいで待つてね」

父さんは、そう言うと奥へ上がって行った。
柱時計がボーンボーンと七時を打ちだした。

その音が、ぼくの体にびりびり響いた。柱時
計が打ち終わった時、奥から父さんが戻って
きて、土間の上がり口の柱に左手を掛けた。

「おばあは、もう目を覚まさない。母さんを
呼んで来てくれ」

薄暗い土間に立つぼくは、入り口から入るわ
ずかな光の中で、父さんの目に涙が動くのを

見た。ぼくは、うなずくと、ふきのとうをぼ
うり出して駆け出していた。そのあとのこと
は、夢の中のできごとか、テレビドラマを見
ていたようにしか思えない。いつも来たこと
のない、よそのおとなたちが、ばたばた出入
りし始め、家の中のものをどこかへ運び出し
てしまった。母さんは、泣いていた。ぼくに
は、それが不思議に思えた。ぼくは、目を開
じたまま眠っているおばあの枕辺に、ただぼ
んやりと座っていた。目の前を、坊さんやら
おとなたちが、行ったり来たり通りすぎて行
く。おばあの棺に、母さんが青い座布団を入
れていた。さわさわと、たくさんのことばが、
耳元を過ぎて行った。ひとりだけ耳にひつか
かったのは、誰が、ささやいたのが分からな
いけれど、

学校へ登校した。学校は、いつも少しも変
わらずにぎやかだった。ほんやうしていたぼ
くの頭も、少しずつ調子を取り戻してきた。

学校の帰り、おばあが村に寄付した家を、で
きるだけ見ないように、走って帰った。帰っ
てみると母さんが、

「おかえり。」

と、迎えてくれた。母さんの黒いセーターを
見て、少し気持ちが沈んだ。けれど、できる
だけいつもの調子で、意識しながら書いた。
「あれ、母さん仕事に行かなかつたの?」

「まだ、お休みしていいのよ。」

「ぶーん。」

ぼくは、母さんの声の調子も、ふだんと同じ
だったので安心した。急いでカバンを部屋に
置いてくると、流しで手を洗った。ダイニン
グテーブルには、いろいろなお菓子があった。
ぼくが、椅子にこしかけると、母さんはぼく
の前に、浅葱色のランチョンマットを置いて、

おばあの野辺送りがすんで三田皿、ぼくは、
（ぐがく）

第5回

大平建築宿

清らかな空気の中に、再生された板葺屋根の民家の立ち並ぶ大平宿で、今年もお盆に大平建築宿を開催します。

せせらぎの音を聞き、いろりの火を囲みながら、新たな出会いと語り合いの場を共有しませんか。

皆様の参加をお待ちしています。

主催 生活文化同人 共催 歴史環境設計会議

後援(予定) 飯田市役所 建築思潮研究所 建築知識 日本ナショナルトラスト

テーマ「今、環境は」

日程 98年8月14日(金)~8月16日(日)

プログラム

- 14日(金) 14:00~ 現地集合 開宿式 オリエンテーション
15:30~ 基調講演「今、環境は」 宇井 純 沖縄大学教授
17:30~ 炊事・夕食
19:00~ コンサート「アイヌ音楽のタベ」 浴衣持参でくつろぎながら聞くのもいいかも
懇親会
- 15日(土) 7:00~ 起床・炊事・朝食・清掃
9:00~ 草刈り・樹木伐採・建物の修理などの作業 (作業責任者一益子昇)
12:00~ 炊事・昼食
14:00~ 分科会
17:30~ 炊事・夕食
19:00~ 懇親会
「スライド等による自主発表」
「子供たちの出し物」
用意してきてくださいね
- 16日(日) 7:00~ 起床・炊事・朝食
9:00~ 総括会議
11:00~ 閉宿式・清掃
12:00 解散

◆分科会の案内

- 第1分科会 「環境と開発」 環境はつくらねばならないのか?
レポーター 吉田 桂二 サポーター 長谷川 順持
- 第2分科会 「母性と建築」 環境問題の焦点は何か?
レポーター 豊崎 洋子 サポーター 松本 昌義
- 第3分科会 「地域文化の自然観」 アイヌ民族に学ぶ
レポーター 黒川 恵 サポーター 江原 幸彦
- 第4分科会 「原初のカメラをつくる」 大平宿を撮ってみよう
インストラクター 畑 亮 サポーター 日影 良孝
- 第5分科会 「大平の川遊び」 今夜のおかげは?
インストラクター 羽場崎 清人 サポーター 寺本 雅夫

●宿泊する民家
からまつや・中村屋・ますや・下紙屋・深見莊・おおくら屋・今おおくら屋の7棟に分宿します。

●寝具
寝具はないので、寝袋を持参してください。有料ですが、レンタルもあります。

●炊事
各棟で自炊します。
材料は実行委員会で用意します。

●懇親会
飲み物代として一人1回1000円徴収します。
差し入れ大歓迎です。

第5回大平建築宿申込書

この申込書に必要事項を記入の上事務局まで郵便またはFAXで送付ください。

参加費用は、申込時に下記郵便口座へ振込みをお願いします。

入金確認をもって参加申込受付とします。

申し込まれた方には8月初旬にパンフレットを郵送いたします。

■振込先 郵便貯金総合口座 10330-57372271 大平建築宿事務局 小林一元

■応募締切り 7月10日

■振込み後のキャンセルは、原則としてできませんのでご了承ください。

参加申込書

◆参加者 名前(フリガナ) _____ 年齢 _____ 性別 男 女

住所 _____

電話 _____ FAX _____

勤務先・学校名 _____

住所 _____

電話 _____ FAX _____

◆家族参加者 名前・年齢・性別 (幼稚園児以下は無料です)

◇ ◇

◇ ◇

◆参加日程 (いずれかに○、B日程の人は参加日程に○)

- ・ A日程 (全日程参加)
- ・ B日程 8月14日～15日 8月15日～16日

◆参加費用 (食事代金を含みます)

○ A日程 (全日程参加)

大人 15000円 小中学生 6000円

○ B日程 8月14日～15日(15日の昼食は含みません)または8月15日～16日

大人 10000円 小中学生 4000円

◆参加希望分科会 (いずれかに○)

- | | | |
|----------------------|--------|---------|
| ・ 第1分科会 「環境と開発」 | 吉田 桂二 | +長谷川 順持 |
| ・ 第2分科会 「母性と建築」 | 豊崎 洋子 | +松本 昌義 |
| ・ 第3分科会 「地域文化の自然観」 | 黒川 恵 | +江原 幸吾 |
| ・ 第4分科会 「原初のカメラをつくる」 | 畠 亮 | +日影 良孝 |
| ・ 第5分科会 「大平の川遊び」 | 羽場崎 清人 | +寺本 雅夫 |

◆寝袋 (いずれかに○)

- ・ レンタルします (1泊 1000円 2泊 2000円) 支払いは現地で
- ・ 持参します

◆交通手段 (いずれかに○)

- *飯田市役所のご厚意によるマイクロバスの手配がありますので必ず記入してください。
- ・自家用車利用：自宅～飯田市～大平宿
 - ・ 席に余裕があり、誰か便乗できます
 - ・ 席の余裕はありません
- ・高速バス利用：～飯田市～大平宿
 - ・ 飯田市役所からマイクロバスを利用します
 - ・ 飯田バスターミナルから自力で行きます
- ・電車利用：～飯田市～大平宿
 - ・ 飯田市役所からマイクロバスを利用します
 - ・ 飯田駅から自力で行きます

※大平宿は長野県飯田市にあり、飯田と木曽を結ぶ大平街道の峠の茶屋宿です。

◆申込書の送付先 大平建築宿事務局 小林一元建築設計室 小林一元
〒369-1203 埼玉県大里郡寄居町寄居 1541-1 電話/FAX 0485-81-2426

■世話人会報告

(05/14 於：飯田橋／もてなし 出席者12名)

1. 定例会予定
第3回定例会企画内容は今号表紙にて案内
10/31(土)千葉県佐倉市にて『漆』についての定例会を予定。
2. 第5回大平建築宿について
日程計画、予算案及び分科会案の検討。詳しい内容については今号にて案内。
大平建築宿事務局(小林一元氏)よりスタッフ及び企画を募集していますので、
今回参加してくださる皆様ご協力お願いします。
3. 機関誌vol.4について
原稿締切5月末とする。
4. 98年全国町並みゼミ東京大会(第21回)
生活文化同人担当分科会 テーマ：『民家・町並みの保全と生活環境の保全』
場所：浅草(浅草寺)

■同人活動

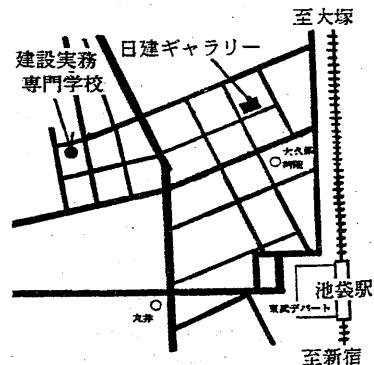
- ・吉田桂二・・・住まいの収納100の知恵(講談社)
- ・吉田桂二、宮越喜彦、日影良孝、鈴木久子・・・健康な住まいのつくり方(彰国社)
- ・吉田桂二、宮越喜彦、高橋昌巳・・・窓まわりのディテール(日経B.P.ムック)
- ・日影良孝・・・セルフビルの改装(室内5)

■事務局より

- ・通達 今回の宛て名に赤でアンダーラインを引いてある方は98年度会費未納です(5/25現在)。できるだけ早い会費納入をお願い致します。
- ・年会員の方で機関誌vol.3を受け取っていない方は定例会時にお渡しいたしますので事務局まで連絡をお願い致します。
- ・7月末に、吉田桂二氏設計(仮称)古河文学館の見学会を開館前に予定しています。参加希望者は事務局まで連絡してください。
- ・会報原稿募集しています。私の近作、旅の報告、町並スケッチなど何でもOK!
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・毎号原稿締切：奇数月20日

編集後記

- ・サッカーファン期待のワールドカップがついに始まります、寝不足の日が続きますね。でも最近のマスコミ報道の過剰な日本評価を疑問視している人も少なくないようです。ガンバレ日本!(①)
 - ・紀伊国屋書店がやっている「インターネット書店」ってご存じですか? 書名(曖昧でもいい)や著者を入力して本を探すのですが、お目当てが見つかったらそのまま購入できるのが便利なところです。調子に乗って買い過ぎて請求書がコワイ…(K)
- 会報編集局: 〒102-0071 東京都千代田区富士見2-13-7
連合設計社市谷建築事務所 新井聰



定例会会場案内図

98年事務局: 〒273-0031 千葉県船橋市西船5-7-2-201 TEL/FAX0473-32-4413
生活文化同人事務局 松本昌義

キリトリ

- ・98年度第3回定例会『面白架構』に参加ご希望の方は事務局まで必ずFAXにて申し込んでください。

※06/20くらいまでにお願い致します。

98年度第3回定例会に参加希望します。

氏名:

TEL:

職場 / 自宅

生活文化

生活文化同人会報 1998(平成10)年08月号 No.32

表紙・目次	1
(も) 大平建築宿プログラム	2
(く) 第3回韓国文化研修ツアーケース内	3
(く) 幸福の建築家になる条件②/高橋照男	4
(く) 同人紹介/景観模型工房 盛口尚子	6
(じ) 同人紹介/佐々木貴彬	10
(じ) 古河文学館見学報告	12
(じ) 連載「夢屋ものがたり」⑩	14
(じ) 第21回全国町並みゼミ東京大会の概要	16
(じ) 世話人会報告・同人活動・事務局より	18

第5回 大平建築宿

テーマ「今、環境は」

日程98年8月14日(金)~8月16日(日)



主催 生活文化同人 共催 歴史環境設計会議

後援(予定) 飯田市役所 建築思潮研究所 建築知識 日本ナショナルトラスト

第5回

大平建築宿

清らかな空気の中に、再生された板葺屋根の民家の立ち並ぶ大平宿で、今年もお盆に大平建築宿を開催します。

せせらぎの音を聞き、いろりの火を囲みながら、新たな出会いと語り合いの場を共有しませんか。

皆様の参加をお待ちしています。

主催 生活文化同人 共催 歴史環境設計会議

後援(予定) 飯田市役所 建築思潮研究所 建築知識 日本ナショナルトラスト

テーマ「今、環境は」

日程 98年8月14日(金)~8月16日(日)

プログラム

14日(金)	14:00~ 現地集合 開宿式 オリエンテーション 15:30~ 基調講演「今、環境は」 宇井 純 沖縄大学教授 17:30~ 炊事・夕食 19:00~ コンサート「アイヌ音楽のタベ」 浴衣持参でくつろぎながら聞くのもいいかも 懇親会
15日(土)	7:00~ 起床・炊事・朝食・清掃 9:00~ 草刈り・樹木伐採・建物の修理などの作業 (作業責任者一益子昇) 12:00~ 炊事・昼食 14:00~ 分科会 17:30~ 炊事・夕食 19:00~ 懇親会 「スライド等による自主発表」 「子供たちの出し物」 用意してくださいね
16日(日)	7:00~ 起床・炊事・朝食 9:00~ 総括会議 11:00~ 閉宿式・清掃 12:00 解散

◆分科会の案内

第1分科会	「環境と開発」 環境はつくらねばならないのか?	レポーター 吉田 桂二 サポーター 長谷川 順持
第2分科会	「母性と建築」 環境問題の焦点は何か?	レポーター 豊崎 洋子 サポーター 内藤 敬介
第3分科会	「地域文化の自然観」 アイヌ民族に学ぶ	レポーター 黒川 恵 サポーター 江原 幸壱
第4分科会	「写真教室」(予定)	インストラクター(未定) サポーター 日影 良孝
第5分科会	「大平の川遊び」 今夜のおかずは?	インストラクター 羽場崎 清人 サポーター 寺本 雅夫

●宿泊する民家
からまつや・中村屋・
ますや・下紙屋・深見
荘・おおくら屋・今お
おくら屋の7棟に分
宿します。

●寝具
寝具はないので、寝袋を持参してください。有料ですが、レンタルもあります。

●炊事
各棟で自炊します。
材料は実行委員会で用意します。

●懇親会
飲み物代として一人
1回 1000円徴収しま
す。差し入れ大歓迎
です。

第3回韓国建築文化研修ツアー

昨年、一昨年と韓国旅行を行いましたが、本年も参加者の強い要望があり、第3段を企画中です。

日程：平成10年11月20日（金）～23日（月）

費用：100,000円前後

定員：20名

申込み・問い合わせ：岡部知子 Fax 0429-77-2491

（参加人数が決定しないと航空券の手配が出来ませんので8月中に申込みをお願い致します。）

コース：濟洲島を含む韓国南東部

（詳しい内容を知りたい方はFaxにてコースをお知らせいたしますのでご連絡下さい。）

団長：吉田桂二先生

世話人：石川、岡部



第3回韓国建築文化研修ツアーに参加希望します

平成10年 月 日

氏 名：

連絡先住所：

TEL：

FAX：

幸福の建築家になる条件 連載Ⅱ

日本建築積算協会 コストスクールディレクター 高橋照男

2章 なぜこのような事態になったのか。

2-1. 複雑になった社会と建築プロセツ

表-2.1 は、建築生産における参加主体の歴史的変遷である。それは細分化の歴史で、意思決定要因が複雑になったことを示している。建築家一人の独裁かつ独演で決定されていく時代ははるか昔に終わっている。第一に建築主が一人格ではなくなってきたことが特徴である。具体的には土地はあるが資金がなくユーザーでもない、資金はあるが土地がなくユーザーでもない、ユーザーではあるが資金も土地もないというように、オーナーが分かれてきていているのである。このような場合、設計条件を構築することが最初の作業である。従来は設計条件ありきで設計が始まったが今はそうではない。設計条件の構築が設計の出発なのである。これが設計以前のコストを中心とするマネジメントの作業が必要になってきた外因である。

表-2.2 は建築生産における参加主体の役割分担の現実を示すものである。近年は建築を実現する扱い手が分業化してきた。医療が専門分野に細分化してきているのと同じである。人間はこれから何まで一人ではできない。建築も専門ごとの分業である。この表は4分野を示しているが各分野においてもさらに細かく専門が分かれている。そして各分野ごとにマネジャーが存在する。ところでこの表で企画・計画と設計の間、設計と施工の間、施工と維持管理の間の情報の連絡のパイプが細いことがわかるであろう。今日はこれが問題なのである。ここにおいてこの4分野のマネジャーを集めて統合する人物が必要になってきた。これがコストに強いプロジェクトマネジャーの存在を要求する内因である。ではこの4分野を結びつけ、これを統合する原理は何かというと、それはコストである。人と人を結び付けているのはこの経済社会においてコストだからである。

表-2.1 建築生産における参加主体の歴史的変遷

利用者	地権者	事業主体	基本構想	基本設計	実施設計	生産設計	監理	施工	総体	仕上	設備	維持管理
パトロン マスター・ビルダー												
発注者	建築家・設計事務所				ゼネコン		発注者					
ユーザー	発注者	建築家・設計事務所				ゼネコン		管理業者				
ユーザー	オーナー	デベロッパー	アドバイザー	建築家・設計事務所		監理者		ゼネコン	顧客業者	仕上業者	設備業者	管理業者
ユーザー	オーナー	デベロッパー	アドバイザー	建築家・設計事務所	監理者	ゼネコン	顧客業者	仕上業者	設備業者	管理業者	仕上業者	設備業者
ユーザー	オーナー	デベロッパー	アドバイザー	建築家・設計事務所	生産設計	監理者	ゼネコン	顧客業者	仕上業者	設備業者	管理業者	管理業者
ユーザー	オーナー	デベロッパー	アドバイザー	基本設計	実施設計	生産設計	監理者	ゼネコン	顧客業者	仕上業者	設備業者	管理業者

昔
今

表-2.2 建築生産における参加主体の役割分担

フェーズ	役割		企画・計画		設計		施工		維持管理			
	PM	隸主	FM	DM	設計	技術	CM	総合	専門	製造	FM	管理
プロジェクトマネジメント	●	○										
意思決定	○	●										
与条件設定	○	●	●	○	○	○						
設計条件転換				○	●	○						
デザインマネジメント					●							
コンセプトデザイン				○	●	○						
詳細設計				○	●	●	○	○	○	○	○	
生産設計				○	○	○	○	○	●	●		
コンストラクションマネジメント							●	●	○	○		
施工							○	○	●	●		
ファシリティマネジメント										●	○	
維持管理										○	●	

注) ●=主役, ○=参加, PM=プロジェクトマネジメント, DM=デザインマネジメント, CM=コンストラクションマネジメント, FM=ファシリティマネジメント

日建設計 都市・建築研究所 橋本商行

2-2. 米国においてマネジメントの技術が発生した理由

図-2.1 は米国においてコストを主軸とするマネジメントの技術が発生した理由を示すものである。横軸は年度。縦軸の左側の目盛りは米国の国内総生産額（GDP）、右側の目盛りは建設完工額（New Construction）で単位はいずれも 10 億ドルである。1974 年時点までは建設完工額は国内総生産額の 10%（右目盛り ÷ 左目盛り × 100）以上だったが、その時点を境にその割合は落ち込んでいった。そして 1993 年は 8% である。ちなみにヨーロッパ各国は 8% 以下である。米国においては 1974 年に始まる 3 年間の間に PM と CM が発生した。その理由は建設業界の生き残り作戦のため、オーナー側の代理としてなくて安い建築を実現するというマネジメントソフト業務が台頭し始めたことによる。つまり、それまで以上により深くオーナーの心と懐に入り込み満足のいくプロジェクトを遂行するための方策を練られるようになったのである。これが米国においてコストを中心とするマネジメントの技術が発生した原因である。

日本における建設完工額の国内総生産額に対する割合は表-2.3 に示すように 16.5%（1996 年）である。日本においてもこれからはその割合が下降していることは確実である。そのために建てれば商売になるという時代は終焉を告げ、発注者にとって真に有益な人物が選択される時代が到来する。ここに、オーナーの利益を保護する PM や CM あるいは FM というソフト業界が日本においても要請される時代が到来したのである。

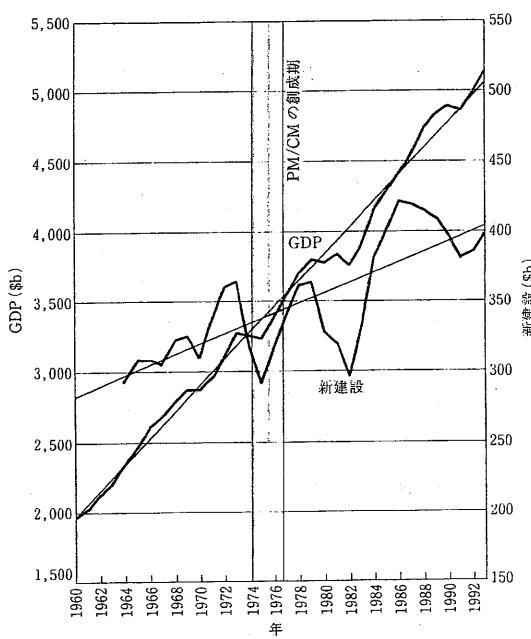


図-2.1 米国においてマネジメントの技術が出現した理由
シャール・ボヴィス・インク、ジョン・ディキンソン

表-2.3 日本における国内総生産および建設投資の推移

項目 年 度	国内総生産 (名目) (A)	建設投資 (名目) (B)	(B)/(A) (%)	(参考) 建設投資 (実質)
1972	96,486.3	21,462.5	22.2	53,856.9
1973	116,715.0	28,667.3	24.6	56,604.2
1974	138,451.1	29,394.4	21.2	48,902.4
1975	152,361.6	31,624.1	20.8	52,191.9
1976	171,293.4	34,196.5	20.0	52,203.1
1977	190,094.5	38,798.6	20.4	56,733.5
1978	208,602.2	42,686.0	20.5	59,289.1
1979	225,237.2	47,921.9	21.3	60,131.6
1980	245,546.6	49,475.3	20.1	56,923.9
1981	260,801.3	50,219.8	19.3	57,445.9
1982	273,322.4	50,068.9	18.3	57,076.3
1983	285,593.4	47,598.8	16.7	54,300.3
1984	305,144.1	48,547.2	15.9	54,256.8
1985	324,289.6	49,964.5	15.4	56,092.6
1986	339,363.3	53,563.1	15.8	60,495.5
1987	355,521.8	61,525.7	17.3	68,281.0
1988	379,656.8	66,655.5	17.6	72,656.7
1989	406,476.8	73,114.6	18.0	75,621.4
1990	438,867.2	81,439.5	18.6	81,439.5
1991	463,941.8	82,403.6	17.8	80,369.7
1992	472,748.1	83,970.8	17.8	80,817.0
1993	476,407.3	81,692.8	17.1	78,187.3
1994	475,500.0	77,950.0	16.4	74,360.0
1995	482,900.0	80,350.0	16.6	76,490.0
1996	496,900.0	81,840.0	16.5	77,790.0

注 1) 国内総生産の1994年度以前は「国民経済計算」、1995年度および1996年度は政府経済見とおし（1996年1月）による。

2) 建設投資の1994年度は実績見込み、1995年度は見込み、1996年度は見とおしである。

3) 建設投資の実質値は1990年度価格である。

お元気ですか？ 大阪からです。 (有) 景観模型工房 盛口尚子

いつも会報で同人の皆様の御活躍を楽しく読ませていただきおりましたところ、関西地区からも近況をとの事、早速、当工房においてはとておきのお話を一つ、御報告致します。

2年前から国立民族学博物館等の依頼により、国際協力事業団・博物館技術コース研修員の研修を受け入れています。

一昨年はインドネシア・モルディブの方といっしょに自国の原風景でもある、「海」と「ヤシの木」と「人間」をテーマに製作講習を行いました。

昨年は、シリアーパルミラ遺跡

グアテマラティカル遺跡

セネガルバオバブの木とパリ・ダカールラリー

カメルーンバオバブの木とサッカーを楽しむ人々

というテーマで、それぞれ小品を作りました。

研修は、一週間おきに合計4回程度。研修員は、自国の博物館関係者や政府の文化的な仕事に携わる方々です。

彼らの国内事情から、大企業や機械化されたところではなく、小さな手仕事の工房で研修したいという希望がありました。そういう意味で私共の工房へ研修に来られたわけです。

2LDKの小さなわが家が、彼らの研修の日は講義室と製作室に早変わり。この狭い家の中で、研修は行されました。

1年目はこちらも初めてで、研修員達の自国の状況もよくわからないまま、行き当たりばったりの指導となりましたが、2年目は、準備の段階から彼らの希望ができるだけ考慮し、達成できるようにすすめることができました。

彼らは研修を終えて、

- ・現代の景観を模型表現することの喜びと楽しさを感じた。
- ・歴史の流れを模型によって再表現する。昔を現代によみがえらせる。
- ・簡単な材料を使って模型を作ることを覚えた。
- ・模型の見方が鋭くなってきた。
- ・博物館の来館者にとって模型という立体表現は説得力のある方法であると感じた。
- ・この技術をヒントに“模型のおみやげ”をたくさん作って、博物館の収入源にしたい。

など、たくさんの意見を述べてくれました。

彼らはとても真面目、そしてとても真剣で熱心。

そういう彼らに私たちは少しでもたくさんのこと伝えたく、研修は有意義な時間となった。

彼らにいろいろなことを話しながら、私たちも初心にかえって、みつめ、考えている自分を感じました。

いっしょに模型を作りながら、模型の果たす役割を彼らなりにとらえ、理解し、私たちの技術と情熱を国に帰って伝えていってくれば、こんなにうれしいことはありません。

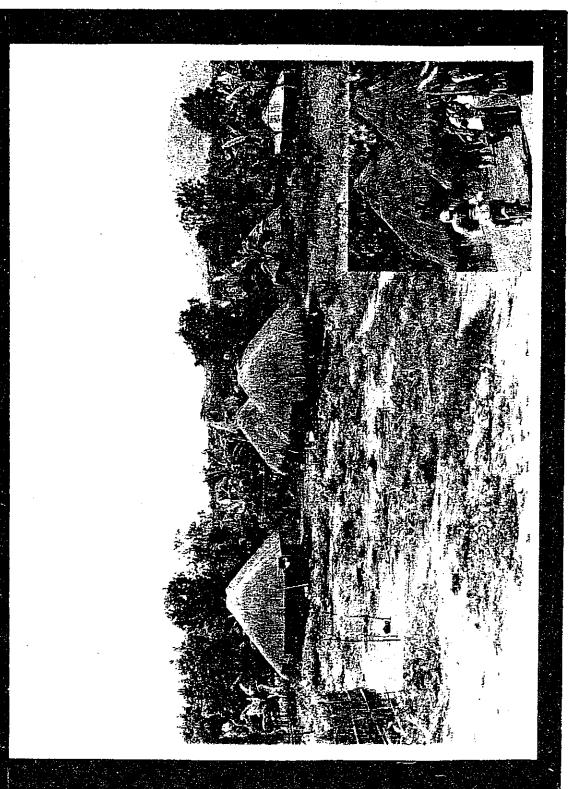
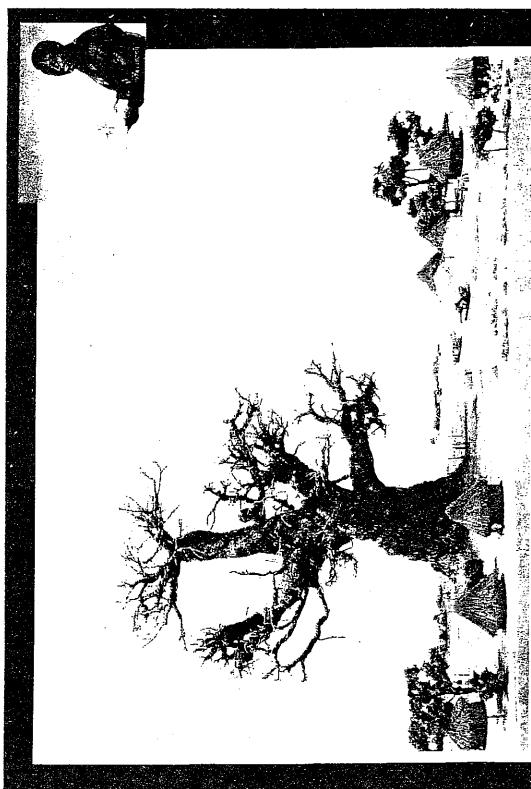
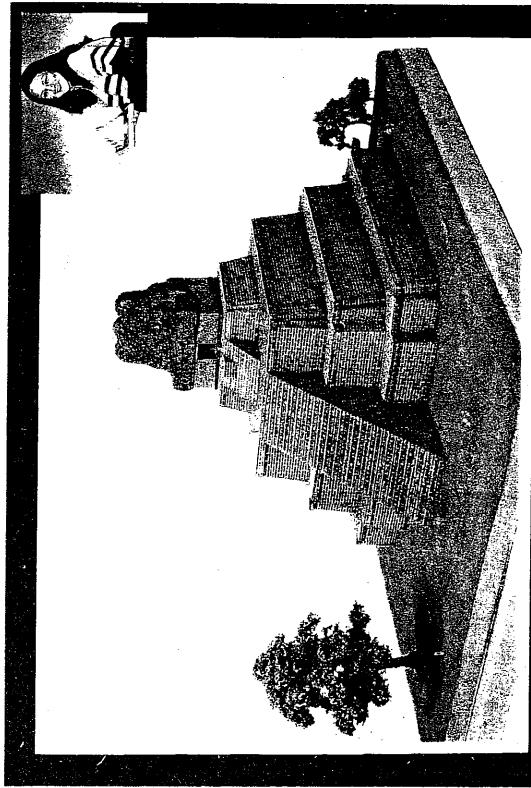
この研修は彼らの研修でもある反面、私たち自身の研修でもあるのです。

さて、今年はどこの国から……

また、御報告致します。



ティカル神殿——グアテマラ(ケツティア)

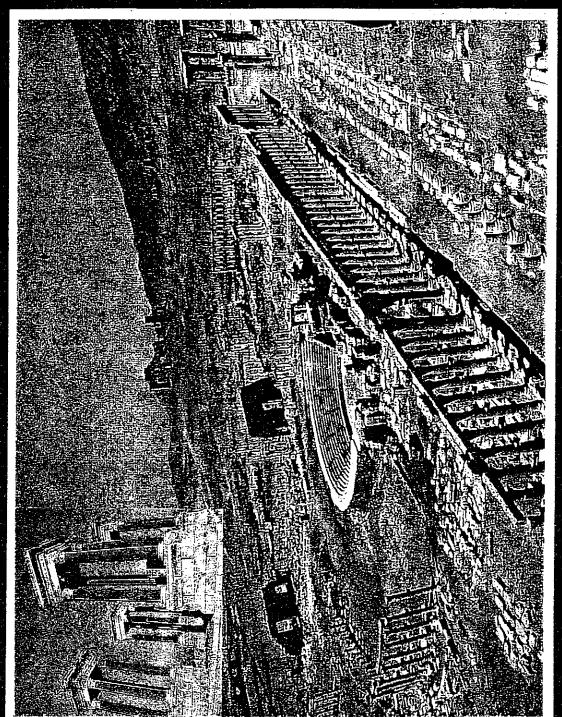
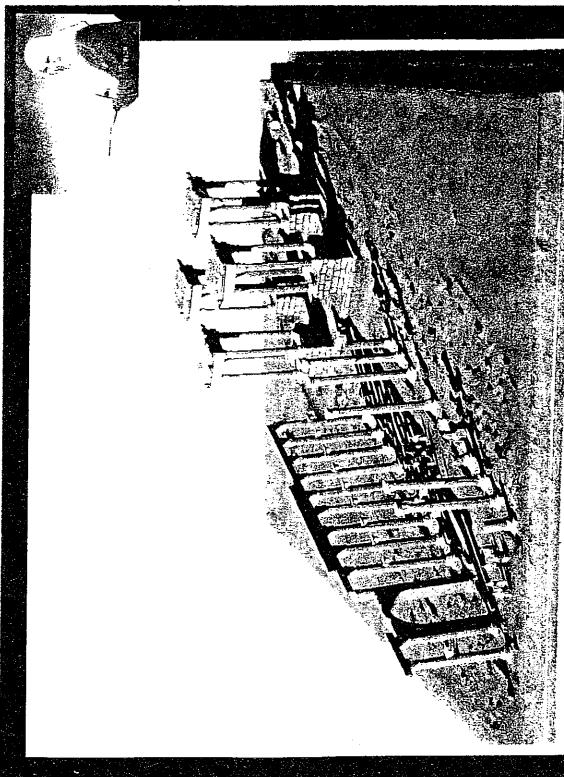


バオバブとバリ・サカムラリー——セネガル(チュエ)

バオバブと牛飼いの村 —— カメルーン (アフ)
のサッカー大会



パルミラ遺跡 —— シリア (ラバ)



古河に 生まれて

古河(こが)と口にするのに、アクセントは‘こ’と‘が’のどちらに付けるだろうか？数年前までは、私は何のためらいもなく‘こ’にアクセントを付けていたと思うが、言葉は変わりゆくもので、最近の若者の世代にならっているのか、いつのまにか私も‘が’にアクセントを付けて呼ぶようになってしまっています。

日常生活ではそれで一向にかまわず、然したる問題ではないけれど、『古河に生まれて』などのタイトル文字になった場合は、やっぱり‘こ’にアクセントを付けたほうが言葉にリズムが生まれて、その後の文章も明るい印象になるのでは？と思っています。

私は古河生まれの古河育ち。

学生時代に東京で居候した短い期間を除いても、30年と少し古河で生活しています。

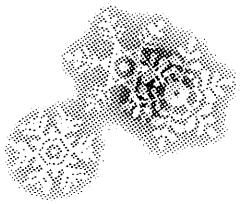
古河は茨城県の最西端。 知らない人からみると、都心からはとても遠い田舎に感じられるかもしれないが、住んでいる人にとってはそんな感覚は微塵もなくて、頻繁に走るJR線で都心へも一時間程だから、膨張する首都圏のいわゆるベットタウンの様相を強めています。

しかし歴史的には古い町で、江戸時代城下町であった名残の狭い路地や、かつて盛んであった製糸業の繁栄の証である石蔵や煉瓦蔵などがまだあちこちに残っており、古を感じさせる精神性も漂っている町です。

そしてなにより、歴史博物館を代表とする吉田桂二氏の手掛けた建物があちこちにあるというのがとても気持ちがいいのです。

氏の名前を初めて耳にしたのは6年前の古河歴史博物館で開かれた氏の個展のポスターでした。

G・デザインの仕事をずっとしていた私にとって、雪にぼやける田麦侯の高八方造りが画かれたそのポスターはとても素敵に見え、当時、建築の事などまるで知らない私でも、この人は何かちがう、心を和ませる精神性がある。と痛切に思ったものでした。



その後、私の家の新築話が持ち上がり、色々と建物の勉強をし始めた時、宇都宮で開かれたPACの講習会で衝撃をうけました。その時の講師は長谷川順持さんで、見せられたスライドを見て、こんな家があるのか！と脳天をカナヅチで打たれた思いでした。

その夜、長谷川さんに電話をして、あのスライドの家は何処に行けば見られるのか聞いたところ、古河のまくらが住宅だという。

まくらが住宅といえば、私がパンフレット（2回目の売出し時）をデザインした所だ。何という偶然。といつても私がパンフレットをデザインしていた時は、ヘンな家だなあと思いながら間取りをロットリングでトレースしていたのだから面白いものです。

これで衝撃がすべて吉田桂二氏に一本の線でつながり、氏に恐る恐る電話をして相談したところ、『古河で見学会があるので来なさい』と言われ、その夜富久屋で設けられた席で場違いな私に、松本さんを紹介されて、私の家を松本さんに設計してもらう事になったのです。

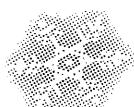
また、その夜の二次会で、氏に「建築の仕事というのは素晴らしいですね！」とポロッと言ったところ、『今からでも遅くはないんだからやりなさい』と言われ、心にキズが出来るほどその言葉が響いた私は、その後1年以上も考えぬきましたが、松本さんの後押しもあり、建築家を目指す事を決意し、ただ今、中央工学校夜間建築科の2年生であります。

この数年間で、私の人生は大きく変わりました。

古河に生まれ、古河で育った事で、氏と出会い、同人の皆さんと出会う事が出来たのをとても誇らしく、またうれしく思っています。

夜間の学校は来年の春、卒業になります。

その後の進路はまだ決まっていませんが（誰か拾って下さい）、いつの日か建築家として一人立ち出来た時は、私の人生を大きく変えてしまった古河の街を、いや町を、恩返しの気持ちで、よりよい町になるように私の力が少しでも役に立てたらと思っています。



古河に生まれて…。

「(仮称)古河文学館」見学会の報告

岸 未希亜 1998.7.25

例年になく梅雨が長く続いているが、幸いにもお天気に恵まれた中で見学会は行われました。見学会には設計者である吉田桂二氏および連合設計社の所員、生活文化同人のメンバー、その他の方も参加されて総勢約30名が集まりました。

地元からは、木工事の担当として現場をまとめられた大工棟梁の吉田健司氏、行政側の現場担当であった古河市役所の今

泉氏、総務部の刈部氏も参加され、見学者に対して説明をしていただきました。

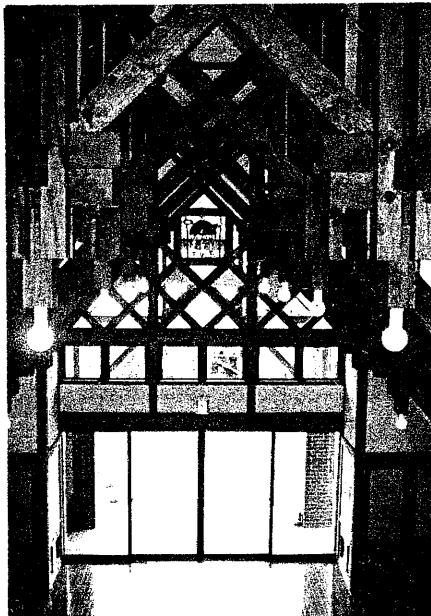
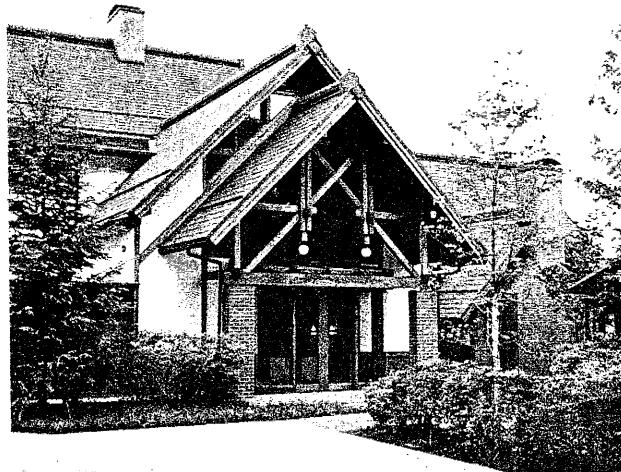
古河市は茨城県西端に位置しており、皆様ご承知のように、吉田桂二氏設計の古河歴史博物館（1990年竣工）を中心とした周辺の修景で、町づくりの優れた手本として知られている中都市です。文学館の敷地は、その古河歴史博物館の東に隣接し、堀端の東屋とコミュニティセンター出城とに挟まれた恵まれた環境にあり、新しい地域文化創造の拠点として位置づけられています。

当地には古河および渡良瀬ゆかりの文学者、文学作品が多いという文学風土があるにも拘らず、貴重な文学資料の散逸といった問題がありました。そうした中で、永井路子さんの蔵書を収蔵物の中心として文学館が計画されました。

建物の外観は「歴博」とは趣を異にしており、どことなく異国情緒を漂わせています。屋根は曲勾配でスレート葺風（セメント成形板）、暖炉を覆うレンガ造りの2本の煙突が立ち、レストランの屋外テラスが大きく張り出しているなど、そ

した雰囲気を醸し出す要因が見てとれます。建築面積は 531.06 m^2 （160.6坪）延床面積は 678.47 m^2 （205.2坪）、建物の大部分は木造で1階の展示室と収蔵庫はRC造になっていますが、正面外観はそのことを感じさせません。

建物の中に足を踏み入れると、エントランスホールと階段を覆うように天井から4本組の吊束が下がり、方杖である斜材が蜘蛛の巣のように張り巡らされていることに目を奪われます。入って右側の文学サロン（梁間4間・桁行6間）と、階段を上がった2階のレストラン（梁間4間・桁行8間）ではこの「和風トラス」が完全な形で空間を覆い尽く

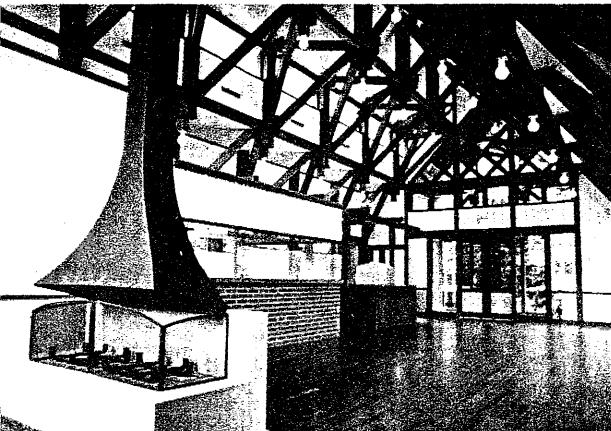


しているので、その構成の美しさに改めて感心し、大工さんはどうやってこの構造を組み上げたのかと驚嘆の思いを強くすることでしょう。この「和風トラス」という言葉は吉田桂二氏の造語で、金物に依存しない架構による大空間の獲得を実現しています。これは木でやろうが鉄でやろうが変わり得えのしない、金物の力に頼った木造トラスが氾濫するという昨今の時流に対するアンチテーゼの意味も含んだ提案であると思われます。

吉田棟梁からは、その「和風トラス」を組み上げる苦労話を聞かせていただきました。「先ず、図面を読む作業からして大変」だったそうで、一週間考えてもその構造が理解できなかったという話でした。そして職人さんの中には図面を見て「俺には出来ない」と言って実際に手を引いてしまった方が7, 8人出たそうです。ハイライトは「建前」で、仮組みが出来ないために苦労も多く、建前に2週間、クレーン車が8日間出動してどうにか上棟となったそうです。他にも、机上の打合せや図面通りにはなかなか上手くいかず、現場で合わせて納めることが数多くあったということでしたが、後にも先にもこれ以上の（難しい）現場を経験することはない、と少し誇らしげな様子でした。また話好きの棟梁は、「今は猫も杓子も〈1級〉を持っているけど、木造の建物を設計できる人が本当の1級なんだ」などなど楽しい話も聞かせてくださいました。

さて報告でありながら文体が過去形になっていた（建物の話）のは、一つに私自身が設計に参加させてもらっていた事があります。架構の模型（1／30）を作り図面も描いたので、ある程度予想しながらしかし思いがけない発見もあり、この木造トラスを楽しく見ることが出来ました。そしてもう一つは、今回の見学会に参加できなかつた方々にも機会を見つけて訪ねていただきたいと思い、その導入のようなイメージで書かせていただきました。正式オープンは10月15日（予定）になりますが、穏やかな週末にでも「読書の秋」を楽しんでください。

(きし みきあ 連合設計社市谷建築事務所)



はね。藍の匂いがあって、山に入つても毒虫をよせつけないんですね」

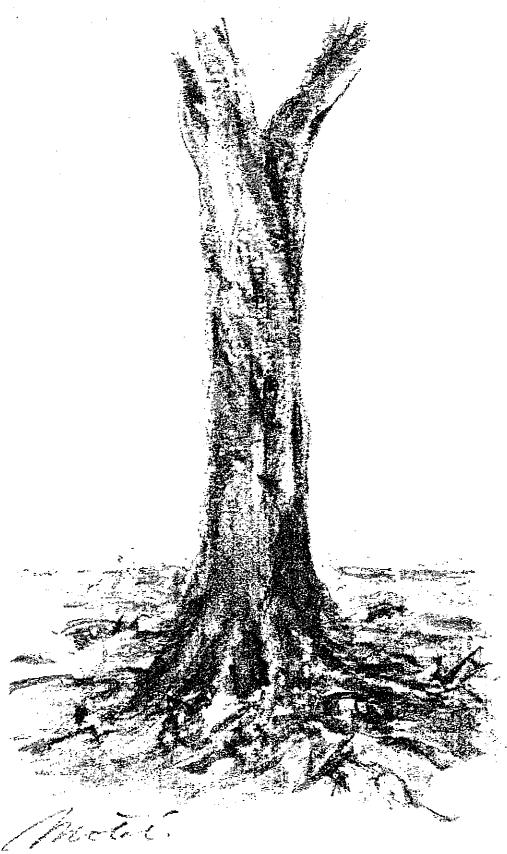
「ふーん。」

ぼくには、ただの布にしか見えなかつたなあ
と思いながら、月餅一個ではまだ足りなくて、
今度は、セロファンの袋に入つたリーフパイ
に手を伸ばした。

「おばあちゃんが、お嫁に来る時、おばあち
ゃんのおかあさんが、糸を染めて機(はた)で何日
もかかるて織り上げた布を、持たせて下さ
ったのだそうよ。あの青い座布団もその布
で作つたんだって」

そうだったのか。ぼくはリーフパイのバター
の香りに少しむせながら、あわててお茶を飲
んだ。

ほんとうに、おばあにも母さんがいたんだ。
ぼくは、初めてそれが信じられるような気が
した。みんな見て触つて確かだつたおばあ
も青い座布団も、今は煙になつてなくなつて
しまつたけれど……。



サクッと一口かむ」と、口中でほろほ
ろととけるリーフパイは甘いけれど、たより
なかつた。

それから二ヶ月ばかりたつた五月のある日。

ちょうど、田植えが終わつたばかりで、田に
の田んぼもたっぷりと水が張られている。行
儀よく、縦横まつすぐに植えられた稻の苗を



見ながら、こんなに細くて弱々しい苗が、百
を観察した。一人は、ぼくの父さんより少し
若いくらい。ひょろりと背が高く、まじめそ
る頃に、穂先に実をつけたるなんて不思議だな
うな眼鏡をかけていた。もう一人は、ずっと
年上だけれど小柄で、ひょろりとした目をし
ていた。

夢のがたり

(10)

「おばあは、こんなことも書いてたよ。
父さんはね。木のいのちを守る人だつて。

木は家を作るだけじゃない。酸素を作り、
肥えた土をつくり、水を守り、山を守る。
木がなかつたら、人は生きていけない。
だから、父さんの仕事は、木と人のいのち
を守る、男の中の男の仕事だつても」

ぼくにしては、よくしゃべった。しゃぐる
とでなにかを、まぎらわそうとしていたよう
に思う。ぼくがしゃべり終わる頃には、母さ
んもタオルを置いて、赤い日のまとうなずき
ながら、口元に微笑を浮かべていた。

「あなたが、そんな」とを言うようになるな
んで、おばあちゃんのおかげね」

ぼくは、心の中で、えへんえへんと言いたい
くらい、よい気分だった。そして、おかしな
じとに気が付いた。ぼくは、おばあや友達と
われたのよ」

話す時は、土地のこむせき、母さんや父さん
と話す時には、町のこむせき、使い分けでい
る。考えてみると、父さんも母さんももうだ。
話す相手によって、知らないうちにこむせが
変わつていく。不思議な」とが、また一つ増
えた。

ポットから急須にお湯を注ぎながら、

「おばあちゃんの家、村に上がりやつたの」

「つてるでしょ?」

と、母さんが聞く。

ぼくは、うなずいた。そして、手にある月餅
の残りをほんの少しかじった。

「『この村に暮らせし』もあつた御礼に、み
んなの役にたりようを使って欲しい。』って、
ついぶん前に村長さんにお願ひしつて
ね。それから、『先祖様のお位牌ね。いか
にって勧めたけれど、おばあちゃんが、ど
うしてもお寺へ預けてくれって……。

おばあちゃん、お位牌もお墓もいらんとい
うか、よい氣が付いた。ぼくは、おばあや友達と
われたのよ」

母さんは、おばあとそんなことも話してたんだ。けれど、おばあらしいなあ。ぼくは、残
りの月餅を全部口に入れた。母さんは、番茶
をぼくの湯のみに足してくれる。

「おばあちゃんの座つてらした座布団のこむせ。
覚えてる?」

何かおばあちゃん話をしていた?」

ぼくは、あわてて頭を左右にふった。おばあ
の座布団。あの青い。忘れもしない。あれを

母さんは、おばあのお棺に入れていたつけ。

かあさんは、湯のみに少し口をつけたと話を
続けた。

「あの座布団の布は、藍染めといつてね。昔
は、むじりでも染められていたのだけど、
今は少なくなってしまったものなの。」

「青は藍より出で藍より青」と書う」と
ぱがあるでしょ。ジャパンブルーといわれ
るくらい、昔は日本中が藍色だらけだった
のよ。藍色といつても藍瓶にくぐらせた回
数で微妙に色が違うの。藍染めの布の着物

■第21回全国町並みゼミ東京大会の全体概要

主催 全国町並み保存連盟
第21回全国町並みゼミ東京大会実行委員

会期 9月18日（金）～20日（日）

日程 1日目 9月18日（金）12:45～16:30 会場 有楽町マリオン

①講演「寅さんの愛した町並み」 山田洋次（映画監督）

②東京の地域づくりレポート 報告者 陣内秀信（法政大学教授）他

③町並みトーク 司会 前野まさる（東京芸術大学教授）

2日目 9月19日（土）

①「まちづくりワークショップ」

[歴史的環境／緑地と町並み]、[町並みの今後]、[暮らしと町並み]、[町並み新発見]
のグループ別、合計12のワークショップ

*生活文化同人は[暮らしと町並み]グループのワークショップを担当する。

②「一般講座」13:00～16:10（会場：東京芸術大学音楽部階段教室）

3日目 9月20日（日） 会場 都庁舎大会議場

全体会議「総括シンポジウム」

町並みゼミ参加費 4000円（1日目の懇親会参加者は別途4000円必要）

申し込み・問い合わせ 全国町並みゼミ事務局
〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-14
宝栄西新橋ビル201

Tel 03-3595-0731 Fax 03-3595-0741

（注）申し込みが遅くなると希望のワークショップに参加できない可能性がありますので早めに申し込んでください。

生活文化同人分科会のテーマ『民家・町並みの保存と再生』

主催： 吉田桂二+生活文化同人+浅草おかみさん会

日時： 9月19日（土）

場所： 浅草・浅草寺境内の大乗院及び小乗院

1次会 11時～12時 自己紹介と昼食

12時～16時 ワークショップ形式による討議と総括

参加費 1000円・昼食代 1500円

2次会 16時～18時

浅草の自由散策

オリジナルマップ作成中

3次会 18時～なりゆき

場所：浅草十和田

1、2階を借り切り、浅草の「振り袖さん」を4人招待します。

参加費 6000円

分科会事務局 松本昌義 事務所 〒273-0031 千葉県船橋市西船4-26-3-6

Tel 0474-33-5074 Fax 0474-33-5074

自宅 〒273-0031 千葉県船橋市西船5-7-2-201

Tel 0473-32-4413 Fax 0473-32-4413

（注）分科会の申し込みも全国町並みゼミ事務局ですので、お間違えのないようにお願い致します。

東都金龍山淺草寺圖



魚屋北溪「東都金龍山淺草寺図」天保年間(1830-44)頃

高島忠作
泉屋
銅版画

■世話人会報告

(07/22 於：飯田橋／もてなし 出席者10名)

1. 今後の定例会予定

7月に予定していた第3回定例会が、急遽延期になりました。大変御迷惑をおかけしました。今後、以下の予定で定例会を行いますので、よろしくお願ひ致します。

10/01(土) 第3回定例会 『面白架構』 高橋伸一氏。

10/31(土) 第4回定例会 『漆』 千葉県佐倉市にて芸大の大西氏。

詳しい内容については、次回会報にて案内致します。

2. 第5回大平建築宿について

7/16 飯田橋にて行われた大平建築宿準備会報告。

(分科会及び実行委員の担当の内容確認等)

大平建築宿参加者にはレジメを8/8に発送致します。

*建築宿前日(8/13)、飯田にて宇井純氏と吉田桂二氏の対談が行われます。
聞きたい方は益子昇さんまでご連絡を。

3. 機関誌vol. 3について

機関誌スポンサーの件が未定のため、大平建築宿には数冊サンプルを用意する。

4. 98年全国町並みゼミ東京大会(第21回)参加の件

生活文化同人担当分科会 テーマ：『民家・町並みの保存と再生』

日 時： 9月19日

場 所： 浅草寺境内の大乗院及び小乗院

進行役・・・吉田桂二・日影良孝

記録係・・・書記一鈴木久子、金田正夫、吉塚幸雄

写真一伊藤秀夫 録音一豊崎洋子

浅草散策のためのマップの作成・・・戎居連太

※詳しい内容については今号にて案内しております。

*次回世話人会は8/27(木) 18:30 飯田橋にて行います。出席される方は事務局まで必ず連絡してください。

■同人活動

・日影良孝・・・建主、設計者、施工者を結ぶ“新たな職能”(住宅建築6)
・内藤敬介、高橋昌巳、松本昌義、豊崎洋子、岡部知子、高橋俊和
・飯能発“木の住まい”的ネットワーク(住宅建築6)

・小林一元、高橋昌巳、宮越喜彦

・マンガで学ぶ木の家・土の家(井上書院)

・松井郁夫・・・フィールドノート 日本列島伝統工法の旅(建築知識8)

■事務局より

・会報原稿募集しています。私の近作、旅の報告、町並スケッチなど何でもOK!

・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

・毎号原稿締切：奇数月20日

編集後記

・一年が過ぎるのがとても早いです。また今年も大平建築宿の季節がやってきました。昨年は民家芝居で盛り上がりましたね。今年も何ができるか、何が起こるか期待しています。それでは大平でお会いしましょう。(O)

・ばそまる'98というエキジビションで「SOHOの夢と現実－女性設計者の仕事と暮らし」と題したトークセッションを友人3人でやりました。私達のしゃべりはさておき、SOHO人口の多さに驚きました。(K)

会報編集局：〒102-0071 千代田区富士見2-13-7

連合設計社市谷建築事務所 新井聰

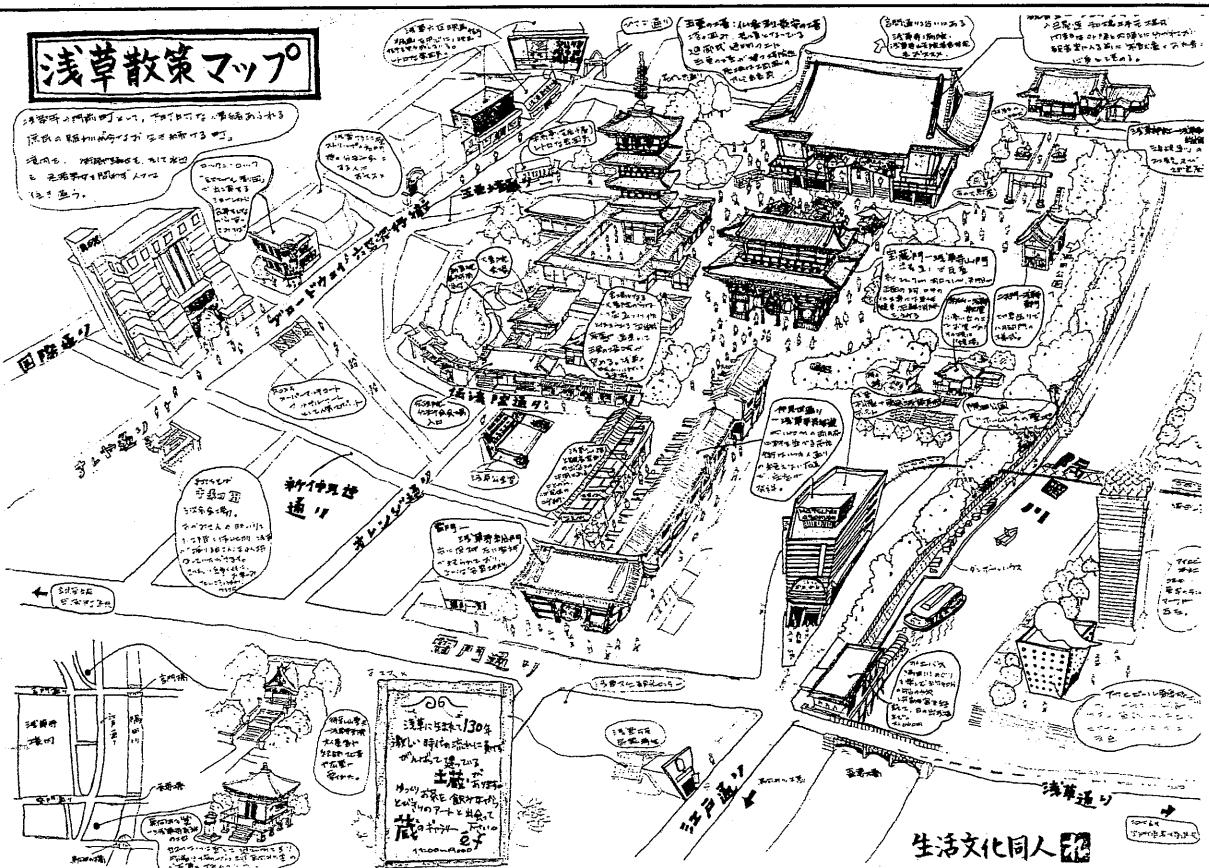


▲霧の大平宿 左：からまつや 右：満寿屋

生活文化

生活文化同人会報 1998(平成10)年09月号 No.33

表紙・目次	1
定例会案内	2
第五回大平建築宿を終えて	4
私の近作／てらもと工房・寺本雅男	11
幸福の建築家になる条件③/高橋照男	14
掲示板	17
連載「夢屋ものがたり」⑪	18
世話人会報告・事務局より	20



第21回全国町並みゼミ東京大会
分科会のテーマ 「民家・町並みの保存と再生」

主催 吉田桂二+生活文化同人+浅草おかみさん会

開催日程 1998.9.19

開催地 浅草寺境内の伝法院の大乗院と小乗院

スケジュール 受付 : 10時

一次会 : 11~12時 自己紹介と昼食

12~16時 ワークショップ

二次会 : 16~18時 浅草の自由散策

三次会 : 18時~ 会場 「浅草十和田」 参加費6000円

「ふりそでさん」の踊りも楽しめます

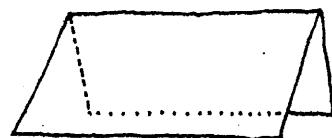
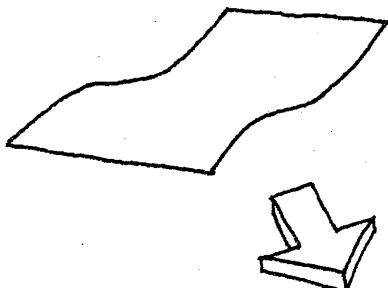
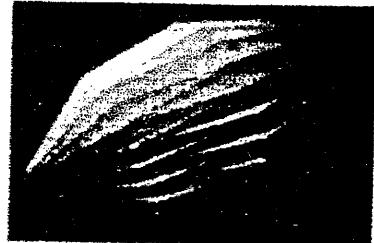
第3回定例会 98/10/01 18:00

於：池袋藝術劇場 中会議室

面白架構

数字からではなく形から

講師 有限会社 T&S 総合建築設計
監理設計士 高橋 伸一氏

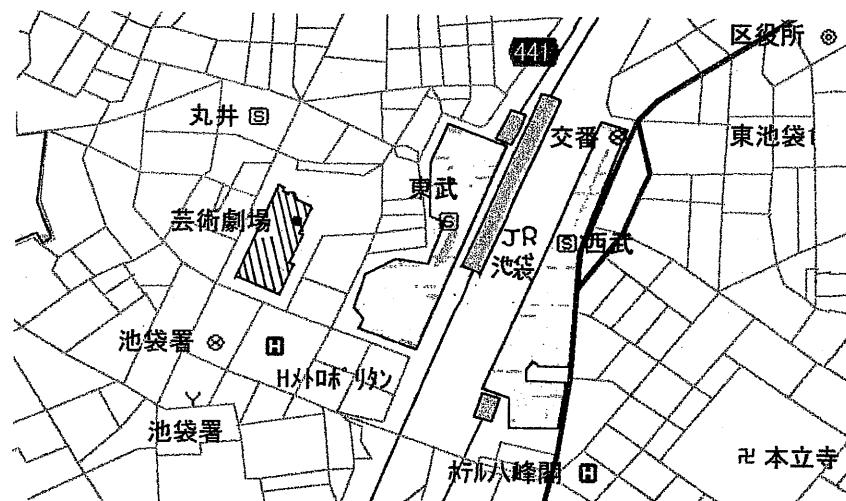


構造というと、計算、難しそう、というのが普通の印象。しかし、仕事とはいえ物事楽しく身に付けていきたいものです。薄い一枚の紙も、二つに折ることによって強度が変わってきます。そんな視点から構造の世界のお話しを展開していただけたと思います。乞う、ご期待。

世話人 松本昌義

岡部知子

(申込みは9月28日までにFAXにて事務局へ)



第4回

定例会 98/10/31 (土) 14:00~16:00

於： 千葉県印旛村師戸80

東京芸術大学 大西教授宅

「漆 明日を創る」

・漆器は毎日のくらしに用いるもので、特別扱いをしない。

Lacquered items are to be for everyday use, and you shouldn't take it as special matter.

・漆器を用いたくらしは心が静まり、気持ちにゆとりが生まれてくる。

それは漆の深い色調と肌合い、そして音に由来する。

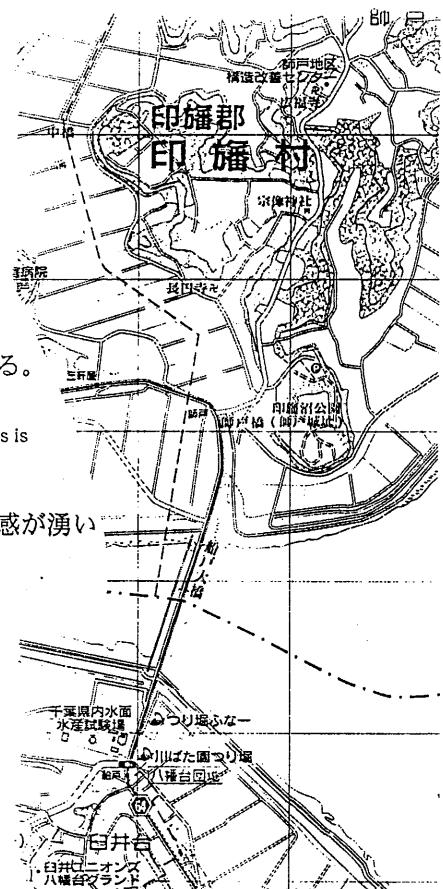
The lifestyle with lacquer ware makes us calm down, and we become more relaxed. This is because of Urushi's deep colours, textures, and tone.

・漆器を用いたくらしは、アジアの大地にしっかりと生きている実感が湧いてくる。

The lifestyle with lacquer ware makes us feel more stable to live on Asian earth.

佐倉の町並を観るのも一考かと・・・

ビジネスホテル一泊などして・・・



当日連絡のみ

豊崎携帯 080-878-0905

(申込みは10月20日までにFAXにて事務局へ)

—第5回大平建築宿を終えて—

今年も、参加された皆さんのが感想や思い、又運営上の問題点へのご指摘などをお寄せ頂きました。事務局として次回からの大平建築宿運営の参考とさせて頂きます。ご協力ありがとうございました。

一年のうち、たったの三日、私は大平へやってくる。残る三百六十日あまり、この建物はただ、じつこの自然の中にたたずんでいる。一体、どんな思いで人を待つのだろうか。今だけではない。昔、人々が住んでいた時も「宿」として人を待っていた。

若い人達の熱い語りも楽しいが、その日の、私は建物の声を聴きたくなつた。

小さな、いよりの火を見て、ただじつとしていた。まだ、もう少し私には力が足りなくて、ついに声をきくことはできなかつたが。それでも、それは、大平で生まれ死んでいった人達の思いと同じであるに違いない。その思いを感じに、また来年ここに足をはこぶのだろうか。その時こそは、私に語りかけてくれるだろうか。

高村 幸絵

—第五回大平建築宿に参加して—

今回、初めて大平宿に参加させていただきました。

友人に誘われての参加でしたが、どんな難しいことをするのだろうかと、正直なところとても不安でした。

ところが、終わってみれば大変貴重な体験ばかりで夏休みの思い出になりました。「いより」を使って食事を作ったこと、薪で焚いたお風呂に入ったこと、どちらも火の調節が難しくて、煙が目に染みました。

私が宿泊した『ますや』は、その名の通りマス料理屋さんだったと聞きました。奥にあった土間の部屋でマスを獲る為の道具の手入れや修理をしていました。

していたのでしょうか。

三日間、日本の歴史に触れる事ができてよかったです。アイヌの方々の歌や踊りも、素晴らしかったです。そして情熱家の方々との出会いにも感謝しています。

参加させていただき、ありがとうございました。

『ますや』泊 関根 美奈子



大平に来ると、いつも感じる。

生き生きと、喜びに溢れて、毎日を送る、人間の鼓動。

遠い遠い宇宙から届く、目が回るほど、満点の輝き。

草木から立ち昇る、むんむんとした上昇気流。

それらの、無限大の、熱さと、力強さは、

私の心を満たし、

私の心の片隅を曇らせていた暗雲を

あとかたもなく、吹き消してしまった。

さあ、明日もまたがんばるぞ、と

そして1年後、また来るときには

また一步、人間として成長していることを

心に誓うのだ。

連合設計社市谷建築事務所 佐々 伸子



私は実家の工務店で働いています。毎日の生活といえば、ほとんど事務所に缶詰状態で、なかなか人と接する機会がなく、“何かしてみたい”と思っていた時に大平宿のことを知り、参加しました。

初めての事で色々思い巡らせながら大平宿へ行ってみると、そこでの生活はとにかく“飯炊き”で、よく母が田舎へ行くとき「“飯炊き”に行くようなものよ」と言っていたのを思い出しました。

でもその“飯炊き”的時間はとても有意義で、この3日間わが家となった中村屋さんとも、この3日間寝食を共にさせて頂いた皆さんとも一番一緒にいられる時間で、ただ建物の見学するよりも実際に利用することで、建物に対しても大平宿という場所に対しても興味をもつことが出来たようです。

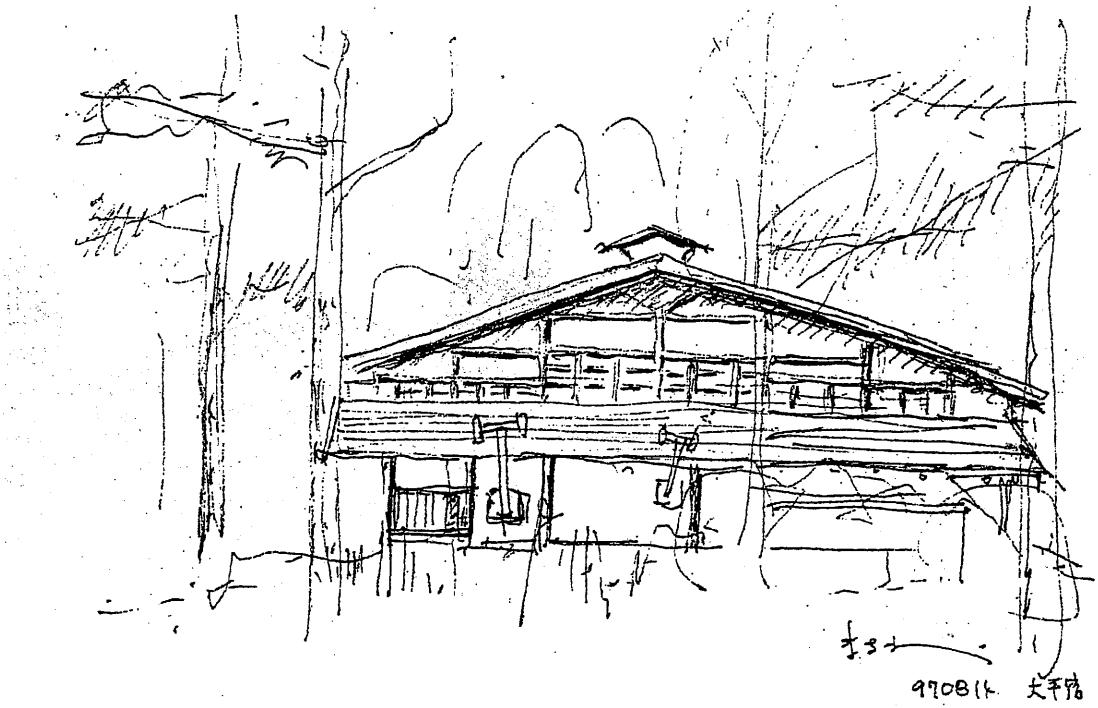
トイレに行ったり、お風呂に入ったりするのが少し恐くてドキドキしたり、食事作りの時には火おこしにとてつもない時間と労力を費やし不便に感じる事もありましたが、それ以上に皆さんでご飯を食べたり、夜満天の星空を眺めたりすることの喜びの方が大きかったように感じます。

大平宿では、木の種類や性質を外を散歩しながら聞かせてくれたり、私にとっては未知の世界の仕事の話しを聞かせてくれたりと、“物知り博士”がたくさんいて久しぶりに話を聞くことに夢中になっていました。今思っても、もっとたくさんの方とお話出来れば良かったとちょっと残念に思っています。

長坂 理恵



シャガンの江原君による紙屋いりの補修作業



97.08.15 大平店

ほんの一時の生活を体験から、ここでのくじしを知るなんて、とてもできることでないけれど、ほんの少しをかいすみることでできた。それを一言で表すのも無茶な話だ。れど、しいて書くなれば自然と普通に向きあいなさい日に戻るのではないかと思えた。季節折々を快適にくらすのも、食料を調達するのも、ごみをどうするのもみんな自然との繋わりでみえてくるからである。こんなあたりまのよくなことを徹底してやったのがアイスのオマでもある。たのも大平で知った。そこにつかづかと土足で入り込んで進み出してしまったのね。幼少の気華達だったといふのを書き下せられた。



「大平宿は生きている」

岩上健司

初めて参加した「大平建築宿」。私にとって、とても有意義な3日間でした。

「今、環境は」というテーマで始まった今回の宿は、「水」、「沖縄」の話を聞いた基調講演といい、「アイヌ」「狩猟採集文化」の旋律を聴くコンサート「アイヌ音楽のタベ」といい、環境というテーマを考える上でとても意味のある企画であったと思います。

第一日目、宇井純教授の基調講演で、今尚、沖縄の土地が政治的な背景からまったく意味のない乱開発（税金の無駄遣い）によって蝕まれているという話には強い憤りを感じましたが、その夜に行われた下紙屋の囲炉裏端でのコンサート「アイヌ音楽のタベ」でのOKIさん達の音楽はとても素晴らしい、おそらく日本中で最も永く、「自然と共に生きる」という文化を大事にしてきた民族「アイヌ」の「自然観」が、音楽を通して伝わってきたような気がして、何か救われた気分になりました。（得に第一部はよかったです）

二日目の分科会には第1分科会「環境と開発」に参加しました。分科会では「開発」という言葉は、この大平の宿ができた時代にも使われていた。しかし、現代において「開発」という言葉は負のイメージが付きまとう。それはなぜなのか。という問い合わせで始まりました。その要因として、近代の開発は「スピードが早すぎ」、「西洋生まれの文明の直輸入であります」、「貨幣による価値が善し悪しを決めている」点で、開発という行為が必ずしも良い環境を生まない結果となっているのではないか。という話がありました。

「環境と開発」とても考えさせられるテーマです。同じ開発でありながら、現代の住宅団地と大平宿ではなぜこうも違った結果になるのでしょうか。「貨幣による価値」という点では、江戸の田沼政治の時代はすでに貨幣経済は十分に発達しており、開発が利益を生む一方で、環境に影響を与えるものであるということについて、人々の意識は現代とそう変わらなかつたのではないかと個人的には思っています。（ただし、現代ではその規模、スピードが自然に壊滅的な打撃を与えるほど大きいという点が大きく違うと思いますが。）

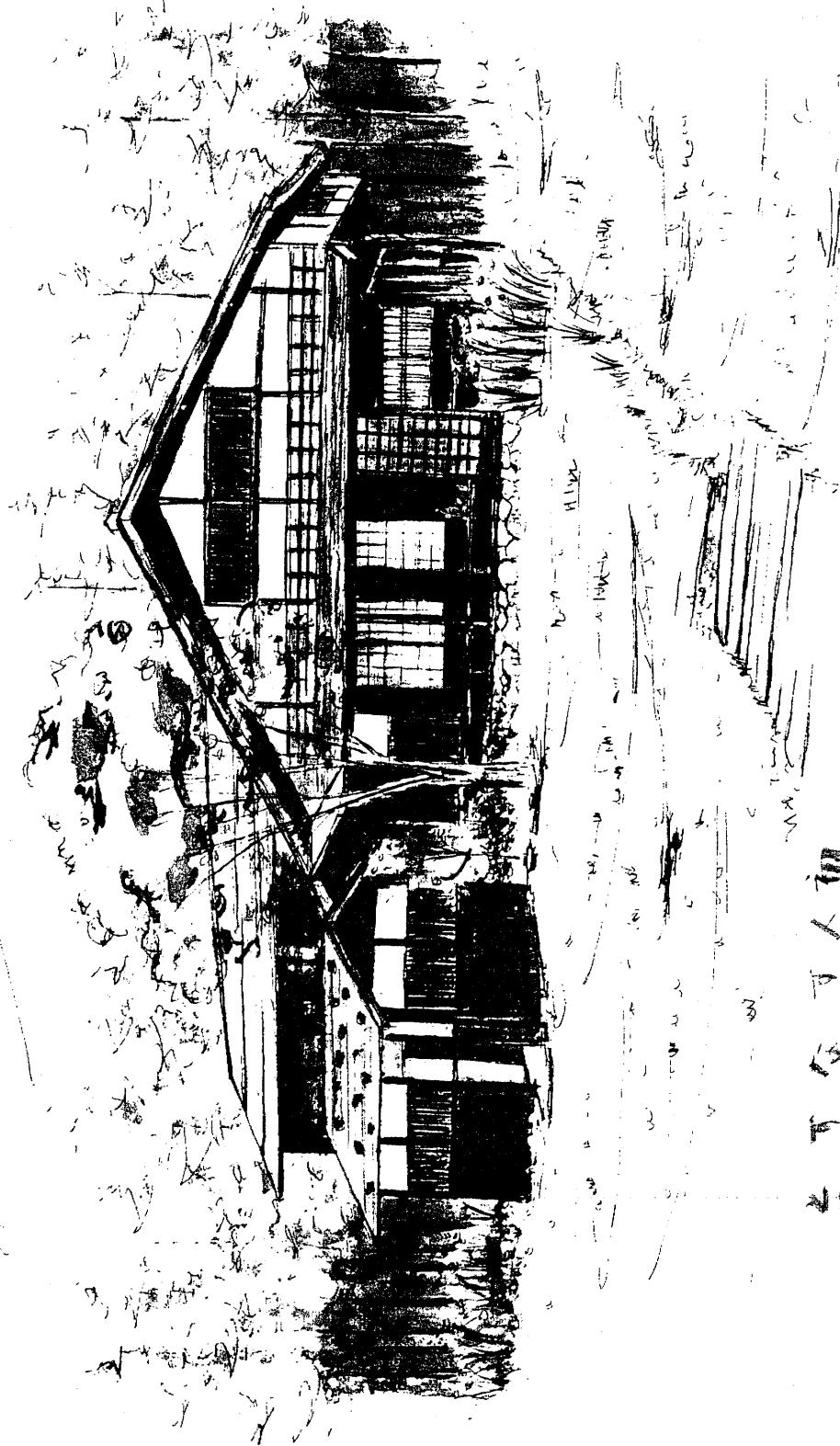
今の開発と大平ができたころの開発の根本的なところで一番違うのは、「物に対する意識」「自然に対する意識」の違いではないでしょうか。「山川草木悉皆成仏」という最澄の言葉にあるように、日本人は数千年の間、山も川も草も木も、仏となり、また生まれ変わる。生きとし生けるものは全て平等である。という自然観をもって生きてきたはずです。特に森や木を大切にしてきて生活してきたことは容易に想像ができます。しかしながら、ここ百数十年の間にそのことを忘れてしまったかのようです。その結果、現代は山や川の存在すら感じずに生活できる環境ができ、ますます自然を実感することが少くなりました。私自身、そんな生活にどっぷり漬かっています。自然を知識としてではなく、如何に実感として感じて生活をしているか、その違いが現代と最も違う部分であり、開発の仕方にも現われているのだと思います。

今回の大平宿ではほんの少しですが、生活の中に川や山を身近に感じることができました。昔の生活が必ずしも良いとは思いませんが、ものづくりに携わるものとして、常に森や木、水、火、生きとし生けるものに対する敬意を忘れてはいけないと反省させられました。（しかし、意識だけで良い建築はできない。設計に携わる人間としては、いかにしてそれを仕事に生かせるのか。自問自答しながら2日目が過ぎました。）

そんなことを思いながら、たくさん的人が集い生活している大平宿を眺めていると、建物の表情も違って見えてきます。つい2ヶ月ほど前に妻と二人でこの宿に止まったときは、自分たちしか泊まっていなかつたせいもあり、とてもさびしい感じがしました。ところが今回のように人が集うと建物も生き生きとしています。そう、森や木と同じように「大平宿は生きている」のです。

この3日間、大平建築宿でたくさんの魅力的な人たちと知り合うことができ、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。生活文化同人のメンバー、事務局の方々には大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

来年も、楽しみにしています。



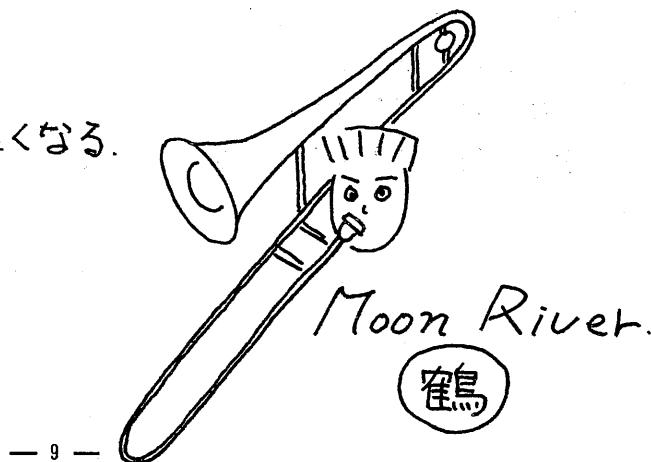
98 08 19 1/look:

大平橋
新屋

和合會所
人連可
上之二大
此見書手

『大平建築宿に入宿(て)』感想 吉田晋久

- 一. 焚火戸裏とかまどの共同生活
- 二. エネルギッシュな人達の集まり
- 三. 刺激がいっぱい
- 四. 元気が出る宿
- 五. みんな建築・人間・自然が好きな人達
- 六. 集まった人達 それぞれが師であり弟である
- 七. みんな酒が好き
- 八. 「一見さん」大観迎
（いちげんさん）
- 九. 来る者拒まず 去る者追やす
- 十. 自然と共存する宿
- 十一. 心がリフレッシュする
- 十二. 新聞も雑誌もTVもインターネットもないから
情報がいっぱい
- 十三. 芸術劇場であり お笑い道場
- 十四. 共通（好）をもった人達の出会いの宿
（考行）
- 十五. また来年も行きたくなる。



アイヌ、ヤランケレ

その夜、たしかに紙屋には人間いがいの気配があった。勢いよく燃えたつ囲炉裏の端には火の、ゆるゆると立ちのぼる煙の淡く消えゆく先には、長い年月をその太いからだで支えてきた木の精靈が、そして紙屋ゆかりのヒトビトの魂が、そこに集う私たちの宴を静かに見守っていた。

アイヌの人によるアイヌの歌は、初めて耳にする固有の楽器の音色とともに異国の歌でありながら、それでいてなんとも懐かしく心に響いた。アイヌ特有の衣をまとった女性たちの楽しげなウボポも、男性たちの剣の舞い、弓矢の舞いも、昔は日常の生活の一部だったのだろう。皆が立ち上がり輪になって踊り始めたころ一人のアイヌの男性が水を得た魚のように生き生きと弓を持ち、剣を持ち踊り始めた。その時、ここに集まる人間たちが自然に一体になれたのかもしれない。借り物ではない、ただ見るだけのものではない、ここだけのカムイ・ノミが行われたのかもしれない。

翌日、第3分科会に参加した。江原さんの用意してくれたビデオに登場したのは仲本みつこさんという60代の女性だった。小学校の時アイヌの子とばかにされ、差別という事を知つてから、自分はアイヌだという事を隠しながら生きてきた。50代になって故郷に戻つてからは誇りを取り戻し、アイヌ語の教室で教えたり、昔語りを伝えたり、ととても大切な仕事を続けている。子供の頃、祖母に連れていかれた森に孫達を連れていく。キハダの樹皮はおなかが痛い時治してくれる力があるからね、と言つて木の皮をはいでみせる。ごめんねー、痛い思いをさせてしまったねー、といって仲本さんはフキのすじをひいてフキの葉をキハダのその傷口にかぶせ、丁寧に優しく巻き付けた。こうやって、自然に対する尊敬の思いと知恵を子供たちは学んでいくのだなと羨ましい気持ちで一杯になった。

ヒトは地球上に存在する数千種類の中のたつた一種。全てが自分のためにあると、勘違いし続ける限り、今問題になっている事どもは解決されないだろうと思う。

私自身、子供たちに伝えられる知恵を、様々な自然、ヒトから学ぶ謙虚さを持って生きたいと思っている。どうもありがとう。

埼玉　巻　京子

《私の近作》

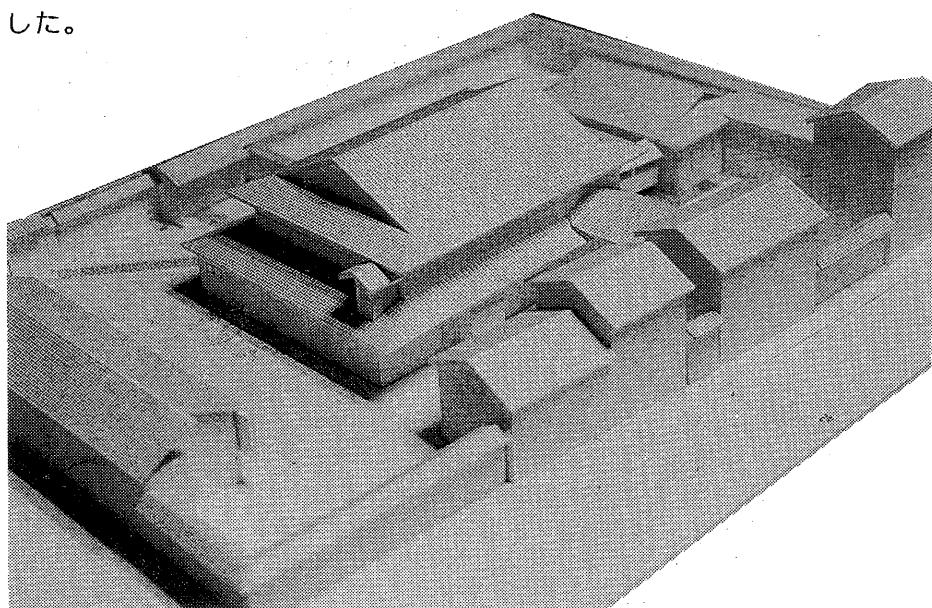
てらもと工房・寺本雅男

“模型”と聞いて『生活文化』をお読みの方々は建築模型を思い起こして戴ける事と思うのですが一般の方々では、まずプラモデルを想像されます。よく言われるのですが『好きな事をしてお金儲けができるよろしいなア！』、答えて曰く『好きな建物を好きなだけ時間をかけて好きな時に作させてくれてお金が戴けるのであればネッ』

プラモデルと一緒にしないでくれ～つ、模型用図面、材料、部品、既製品は何もないのだぞーつ、と。 おっといけない模型屋さんの愚痴が出でてしまいました。

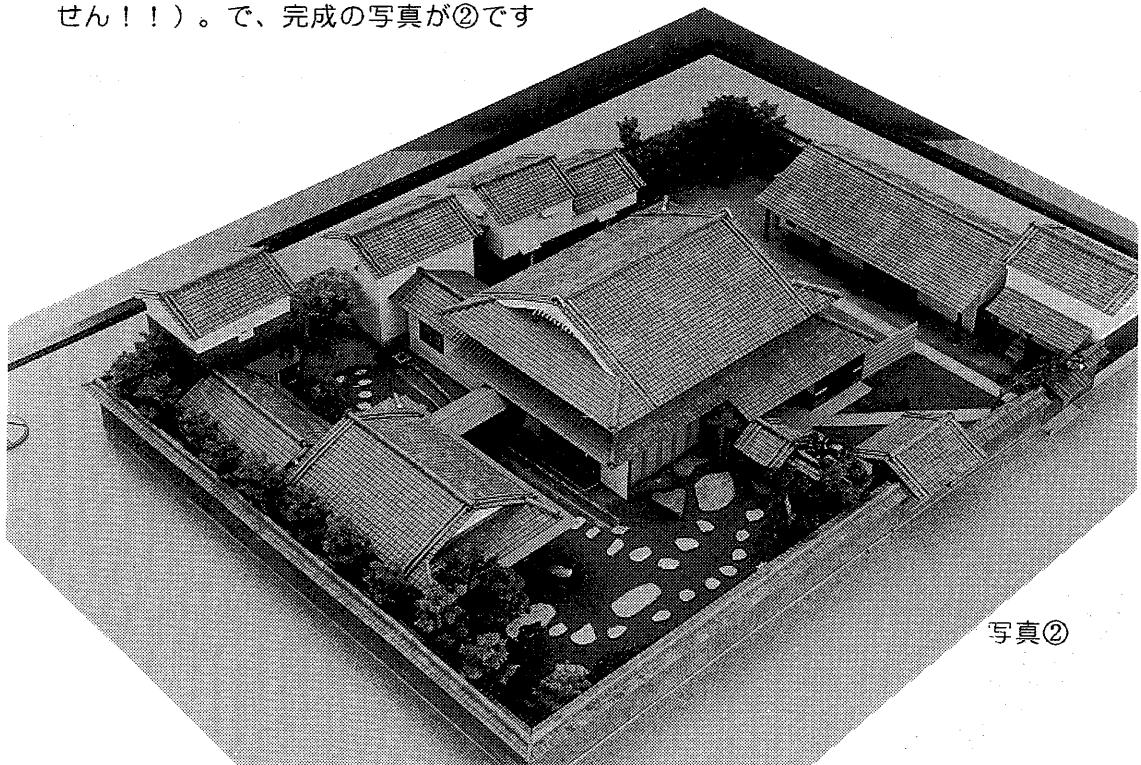
さて、本題、最近の作品の中から少し印象深かったものを書いてみました。

この模型は神戸・淡路大震災時に西宮市で全壊してしまった木造瓦葺きの建物の全景外観模型です。 依頼があり第一回の打ち合わせ、全壊した御屋敷で生まれ育ち、大変思い出があり元のとおりに復元したかったが膨大な費用がかかるので断念、せめて模型ででも残しておきたかったとの事でした。現場は瓦礫の整理も終わった後で、全くの更地、資料と言えば数十年前におじいさんが描かれたという簡単な配置図（よく無事で残っていたものです）と瓦礫の中から助かった数枚の記念写真の後ろに写っている屋敷の一部のみ、これは大変だぞ！、配置図を見ると母屋、離れ、蔵、物置小屋と典型的な地主さんの御屋敷である。とりあえず資料をお預かりして持ち帰りエスキス模型用の図面を描いて第二回目の打ち合わせ、模型の縮尺を75分の1に決定、エスキス模型制作、白仕上げでボリュウムのみのものをお見せして窓、壁の仕上げ、屋根、塀、庭の植木、飛び石等々を思いつくまま書き入れて頂き（写真①）、平面図、立面図を仕上げました。図面を見慣れていない方にはこの方法は大変有効かと思えました。



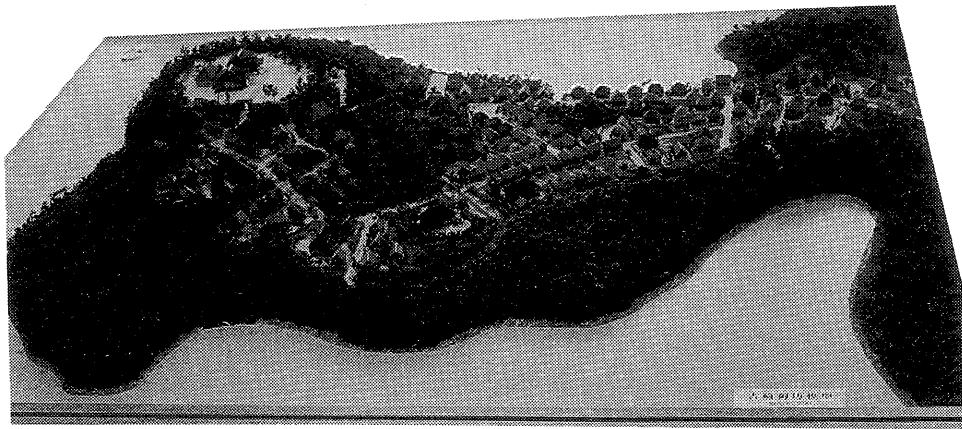
写真①

さて、いよいよ模型制作開始、今回の様に資料の少ない模型制作の場合、模型用の図面が出来上がれば大体5～6割がた進んだ気がします。専門業者に依頼するもの（窓枠、格子、鬼瓦等のエッチング類及び模型台、アクリルケース等）を注文、図面通り壁、塀、門等を書き、切断、組立て。屋根瓦も寸法通りに帯状に切断し重ねあげていきます。今回の材料は和紙を中心に使用しました。着色は組立て前の部品の時であったり、組立ててからマスキングをしてであったり、その時の模型の状況によって千差万別です。ある程度組上がったら今度は地盤に取りかかります。土の部分、杉苔の部分、少し草の生えている部分、植栽、築山、飛び石、灯籠、高木、低木、井戸、祠、等々小物がいっぱい……。最初にも書きましたが、これらの材料、部品に既製品はありません、すべて作ります、一番個性が出てくる所です、だから楽しい仕事の一つです。地盤が大体出来上がると今度はぐっと気合を入れて、この模型制作の中で一番の難関、建物と建物及び地盤との取り合わせです、今回は特に母屋、離れ、風呂場、便所、5つある蔵、作業小屋、塀がすべて繋がっているのです、1つが少しづれれば反対側は大きくズれます、ここが腕の見せ所なんてことは完成してから言えることで、実際作業をしているときは必死であります、うまく納まった時は本当に『ホッ！』なのです。後は仕上げのみ、作業の手も軽く、時間に余裕があれば遊び心で小物をつけたり（この模型では井戸の横にある小さな祠の中にお地蔵さんを入れました、実際にお地蔵さんが祭ってあったそうなので……模型ではまったく見えません！！）。で、完成の写真が②です



写真②

今年の春に中山道・柏原宿復元模型（S=1:500）及び吉崎御坊復元模型（S=1:300）の制作にも参加しました。特に吉崎御坊復元の資料では吉田桂二先生の復元想像画を参考にしました。吉田先生の復元画の最初の作品とのことで偶然とはいえ、世の中広いようで狭い！を身をもって感じました。



吉崎御坊復元（ $\approx 1800 \times 2000$ mm）

※制作建築物・・・御坊・3棟／鼓楼、鐘楼、火の見櫓・各1棟／僧坊、附属棟・40棟／民家、小屋・140棟、門、塀他



中山道・柏原宿復元（ $\approx 900 \times 450$ mm）

※制作建築物・・・本陣・1棟（附属棟3棟）／脇本陣・1棟（附属棟・2棟）／寺社・14ヶ所35棟／旅籠、民家・約430棟／高札場、一里塚、見附、井戸他

幸福の建築家になる条件 連載III

日本建築積算協会 コストスクールディレクター 高橋照男

3章 設計者は同時にマネジャーでなければならない。

3-1. 依頼主から信任され、プロジェクトの遂行を委託されること

依頼主が建築プロジェクトを実行するときはまだ見ぬ出来上がってないものに対して多額の資金を投じるので冒険である。これが出来上がっているものを売り買いする商売とは違う点である。そこには相手に対して絶対の信頼がなければならない。全幅の信頼を投げかけなければならない。そこに命の交流が始まるのである。まだ見ぬものに対する信頼、この人に任せればきっとうまく立ち上げてくれるという望み、これがプロジェクトを信頼する時の心である。この信頼の心がなければプロジェクトは始まらないといってよい。またそういう信頼に足る人物が見つかるまではプロジェクトは始めないほうがよい。それは危険であり安心が湧かずまた楽しくない。プロジェクトを請け負う人を信じ込む心が湧くこと、これがスタートである。プロジェクトを任せることとそれを受ける人が現れること、これが世の始まりであり、事業の始まりである。

旧約聖書に天地創造の由来がある。そこには神が人間にこの世界のものを管理するように任せるとある。世界の始まりはここにその原点を読むことができる。

旧約聖書 創世紀・天地の創造 1章 26～28節（新共同訳）

0126 神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

0127 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。

0128 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這う生き物をすべて支配せよ。」

2章 15節

0215 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませよ、人がそこを耕し、守るようにされた。

世界の始まりは神が人間に地上の事物を管理させるという委託の心がスタートである。神はその栄光を表すために人間を「神の家令、スチュワート(steward)」として創造された。スチュワート(steward)とは「執事、家令」のことで「雇われて他人の家・土地などを管理している人」のことである。steward の女性形がスチュワーデス(stewardess)であることからもわかるように、家令とは主人のためにさまざまな世話をすることである。支配・管理するという意味よりは世話をすること、運営することといったほうがぴったりする。主人である神のためにさまざまな世話をすること、主人の財産を家令としての立場から上手に運営すること、人間はこのことのために創造されたというのである。

仕事とか労働は他から託されたということにその始まりの本質があることをここからも学ぶことができる。神は自分の栄光を表すという目的を人間に託した。これが人間が創造された目的である。神と人間の心の交流がここかに始まった。世界の始まりである。

神の栄光を表すために地上の事物を任せる栄光、託される喜び、これがプロジェクトマネジメントの基本原則の第一である。具体的には依頼主の目的と実現のため、依頼主の栄光を表すため、そのことのために依頼されて任せること、これがプロジェクトマネジメントの始まりである。

3-2. 信頼に応えて依頼主の財産を保護し増やすこと

人は信頼され全面的に仕事を任せると、託してくれた人に好感が湧く。もし愛情が湧かなければそれは仕事を託す人が全面的に仕事を託していない証拠であり、そこにはプロジェクトが成功する基盤がない。それはしばしば「やりにくい」という言葉で表現される。そのような関係で仕事が始まったとすればそれはただの金銭

が目的の付き合いになり、「やつつけ仕事」になるだけであるから楽しくない。依頼人に愛情が湧くこと、これが原則の第二である。依頼人に愛情が湧くと人間は思わぬ力が出る。専門外の知らないこともすぐ勉強して自分のものにしてしまう。自分の手に負えないことは専門家を呼んできて依頼人に最善の道を探る。このような熱意があれば多少仕事が不細工でも気持ちが伝わり感謝されるのだ。少々の失敗も熱心のゆえに許してくれるというものである。われわれは人から全面的に信頼されると實に「しんどい」という気持ちになるが同時に期待に応えるためには何とかしなければならないという気持ちも湧く。それが人間を成長させるのである。猛烈に勉強が始まるのである。カール・ヒルティはその「幸福論」で他人に依頼されてする仕事がやりやすいと言っているが、その意味は他人に信頼されて任されているという気持ちが仕事のエネルギー源なのだと解する。依頼人を愛すれば自分以上の力を發揮できる例を見てみよう。

新約聖書マタイ福音書25章14～30節 タラントの譬

(塚本虎二訳・岩本書店版)

2514 (ほんとうに目を覚ましておれ。人の子が来る時、) 天の国は、旅行に出かける人が僕たちを呼んで財産を預けるようなものであるから。

2515 それぞれの力に応じて、一人には五タラント [千五百万円]、一人には二タラント [六百万円]、一人には一タラント [三百万円] を渡して旅行に出かけた。

2516 五タラントあずかった者は、さっそく行ってそれを働かせ、ほかに五タラントもうけた。

2517 同じように、二タラントの者もほかに二タラントもうけた。

2518 しかし一タラントあずかった者は、行って地を掘り、主人の金を隠しておいた。

2519 かなり日がたってから主人がかえって来て、僕たちと貸し借りを清算した。

2520 まず五タラントあずかった者が進み出て、ほかの五タラントを差し出して言った、『御主人、五タラント預かりましたが、御覧ください、ほかに五タラントをもうけました。』

2521 主人が言った、『感心感心、忠実な善い僕よ、少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』

2522 二タラントの者も進み出て言った、『御主人、二タラント預かりましたが、御覧ください、ほかに二タラントもうけました。』

2523 主人が言った、『感心感心、忠実な僕よ、少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』

2524 最後に一タラントあずかっていた者も進み出でていった、『御主人、あなたは（種を）まかない所で刈り取り、（金を）まき散らかさない所で集める、きつい方と知っていたので、

2525 （商売するのが）恐ろしく、行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。そら、お返します。』

2526 主人が答えた、『怠け者の、悪い僕よ、わたしがまかない所で刈り取り、まき散らさない所で集めることを知っていたのか。』

2527 それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうすればかえって来たとき、（元金に）利子をつけてもどしてもらえたのに。

2528 では、その一タラントをその男から取り上げて十タラントもっている者に渡しなさい。

2529 だれでも持っている人は（さらに）与えられてあり余るが、持たぬ人は、持っているものまでも取り上げられるのである。

2530 さて、この役に立たない僕を外の真暗闇に放り出せ。そこでわめき、歯ぎしりをするだろう。』

ここに言われているギリシャ語のタラント ($\tau\alpha\lambda\alpha\nu\tau\circ\circ$) 重さの単位で通貨の単位でもあった。ここから英語のタレント (talent) という言葉が発生し、今では才能とか能力の意味で使われている。人間はなにがしかのタレント (才能) が与えられている。その才能は主人が良いと伸びる。また主人に愛情が湧くときに倍増する。われわれの技術や才能もこれが十分に引き出されせる主人に会って初めて世に現れるのであるが、そこは依頼人に愛され、またそれに応えて依頼人を愛するときに実現する。そのことにより自分の能力が倍増していくのである。

以前に、筆者は英國R I C S (Royal Institution of Chartered Surveyors=公認積算士協会) の会長の来日講演の際に質問したことがある。それは「R I C Sの本質は何か」という内容であった。これに対し会長は「オーナーの財産を保護することにある」と答えた。これを聞いて筆者はその精神性の高さに深く感動したものである。

オーナーの財産を保護するというのは財産をしまっておくというのではなく、上記イエスのたとえ話にあるようにこれをうまく利用して増やさなければならぬのである、それが賢い家令である。このたとえ話は預けられた財産をもとにして増やしたとあり、その方法の一つとして銀行に預けておくということもあるといわれている。これは金銭のことであるが、一人ひとりのタレント (才能) はこれを十分に増やして成長させなければならないという意味にも読み取れる。それが主人への愛情の証であるというのである。逆に言えば主人に対する愛情がなければタレントの財産をそのままにしておかないで積極的に使うようになるものだというわけである。

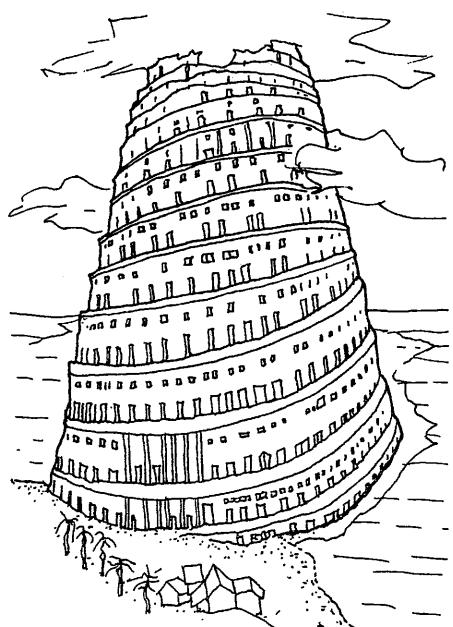
プロジェクトの創造も主人の財産を増やすことである。土地や金銭だけのところからそこに建物を建てて新たな価値を生み出すのである。建築設計というのは主人の財産を有効利用して付加価値を生み出すことである。金銭を建築という形に変換して投資金額以上の価値を生み出すことがある。石や木をうまく組み合わせてそれ以上の価値を創造することがある。建築設計は財産保護の最大作業の一つである。

3-3. 依頼主からのお礼としての報酬を得ること

マネジメントの原則の第三は依頼人自身から報酬を頂くことである。それはお礼としての報酬である。その本質はお礼の心、お礼の言葉である。依頼主からの「ありがとうございました」の言葉は何年もかかったプロジェクトの苦労を一瞬のうちに消えさせるものである。お礼は依頼人自身から頂くものであるからプロジェクトメンバーから受けではない。これを履き違えているから今日は建築界にさまざまな問題が生じているのである。

お礼の心の表れで最大に嬉しいのは次もまた同じ人から仕事を頂けることである。それは初めの仕事が評価されたからである。古来仕事の報酬は仕事であるといわれている。仕事の報酬はより大きい仕事を任せることである。

以上の3原則は誰もが経験を通して納得することである。プロジェクトマネジメントの原則も全くこれと同じである。主人の信頼を受けて主人の財産を管理しこれを保護し増やすこと、すなわち忠実な善い家令であること、これがプロジェクトマネジャーの姿である。この姿は人間創造の目的にかなうことでもあり、仕事の本質でもある。仕事という言葉は仕を仕えること、また事もまた仕えるという意味である。つまり仕事の本質は仕えるという意味であり人間はそのために生かされているのである。



K O C H I D A K E

「名勝大乗院庭園文化会館」は、財団法人日本ナショナルトラストの4番目のヘリテイジセンターとして建設され、奈良市の公共施設として利用いただいております。

この「名勝大乗院庭園文化会館」をはじめとするヘリテイジセンターの設計をされた建築家 吉田桂二氏が国内各地で橋を中心とした描かれた絵画を紹介します。

橋を中心とした素晴らしい風景をご覧ください。

吉田 桂二 建築家 絵画展

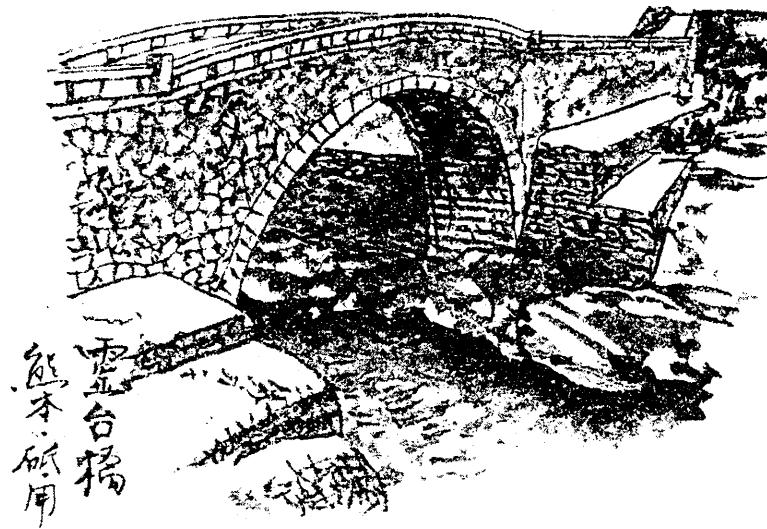
21世紀へ架ける橋のある風景

平成10年8月25日(火)～9月25日(金)
午前9時～午後5時(休館月曜日及び、9月16日、24日)

■場所

名勝大乗院庭園文化館2F展示室
〒630-8301 奈良市高畑町1-1083番地の1

無料入場



※ 東京(アユミギャヤリー)でも個展を行います。
(11/06 オープニングパーティー)

展示内容

- | | |
|------------------|-------------------------|
| 1. 山口・岩国…錦帶橋 | 8. 徳島・西祖谷…かづら橋 |
| 2. 三重・伊勢…宇治橋 | 9. 愛媛・内子…屋根橋 |
| 3. 長崎・諫早…眼鏡橋 | 10. 福井・三国…雄島橋 |
| 4. 東京・お茶の水…聖橋 | 11. 京都嵐山…渡月橋 |
| 5. 熊本・矢部…通潤橋 | 12. 東京・皇居…二重橋 |
| 6. 石川・山中温泉…こおろぎ橋 | 13. 奈良・高畑…反橋のある名勝旧大乗院庭園 |
| 7. 長野・上高地…河童橋 | |

吉田 桂二(yoshida keiji)

1930年生、工学博士、一級建築士、熊本大学客員教授、全国町並み保存連盟副会長、日本ナショナルトラスト保存活用委員会委員、大平宿を語る会長、保存再生協議会理事ほか



き尺を持つたじしてごる。むりやう、おばあ家の寸法を測るらしい。ぼくは、そう納得すると学校へ向かった。脇過ぎ、学校の帰りにとおりかかった時も、声をかけあいながら楽しそうに、みんなでおばあの家を、なでまわしているように見えた。ぼくは、大きく息をつくと、おばあの家を後にした。

次の日は日曜日だった。おばあの家は、前日と同じように、にぎやかだった。ぼくは、この日一歩も外へ出ず、おばあの家のほうから聞こえてくる声に気をとられながら、家の中をうろついていた。

なんとなく氣の重い二日間だった。

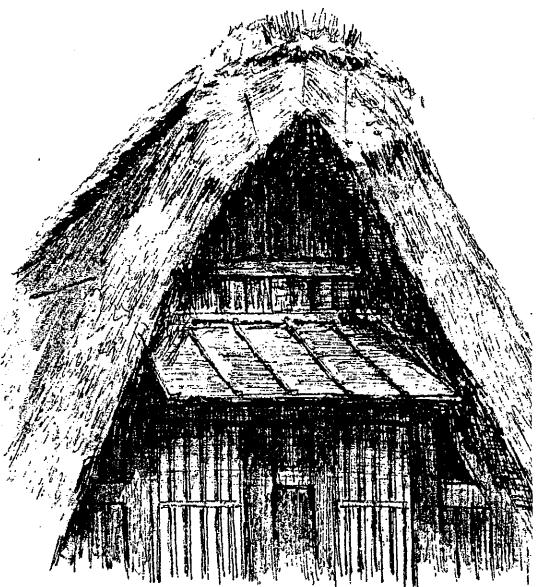
けれど、その後また、いつものひっそりとした風景に戻った。何もなかつたように静かに、おばあの家は初夏の陽射しを茅葺きの屋根いっぱいに浴びて建っていた。ぼくは、一人

人きりでその風景を眺めながら、深呼吸をした。たっぷりと陽の光を浴びた若葉の匂いがした。

六月の半ば梅雨に入り、雨に打たれながらも、田んぼの稲はしゃんと立っていた。秋のしぐれ雨と違って、これからずんずん気温が上っていく予感のようなものが、空氣にみなぎっていた。山の樹々も、田んぼの稲も、やわらかい地面も暖かい雨にうるおい、伸びをして、雨とたわむれているように見えた。

「雨漏りしていないかな。」

ぼくは、おばあの家の前を黒い傘をさして通るたびに、屋根を見上げて思った。茅葺き屋根は、落ちてくる雨の「じ」とくを吸い込ん



Motoi S

ているようだ。屋根の葺き替えは、一代に一度、村中総出の大仕事だと、おばあに聞いたことがある。昔は、この村のいたる所に生えていたという茅もすすきも、今は見掛けなくなつた。冬、屋根雪を背負う「じ」と、ここになつか屋根の茅は、薄くなりしょんぼりとなってきたようだ。前に屋根を葺き替えたのは、このことやら分からぬ。茅葺き屋根のてっぺんの、ぼくがベンベン草と呼んでいる草は、雨に揺れながら青々としていた。

ものかたり

(11)

大庭 杜杜

二人は、新緑の若葉の山を背にして建つてゐるおばあの古い家を、満開の桜を仰ぐようないで見ていた。

「Jの家はいい。この家、もらおり」

ぎょりが、ひょりに向かつて言った。あまり大きな声ではなかった。それでも、声にはすんだ響きが感じられたので、ぼくは、立ち止まって聞き耳をたてた。

「できるだけ早く、解体をすませたいなあ。雪が降れば、身動きとれないからねえ。

さうそく生活文化同人の仲間に呼び掛けて、実測のボランティアを集めよう。実測が済み次第、私は、設計にかかるよ」

ぎょりがそう言うと、ひょりが「お願いします。お父さん」

と言つて軽く頭を下げた。

こんな話が聞こえてきたとたん、ぼくは、逃げるように駆け出しど、おばあの家の前か

ら離れた。家に帰つても、ぼくの胸のわわむれば、なかなか静まらなかつた。

六月、衣替えも終わり、陽射しの下にいると、うつすらと汗ばむ。半袖の袖口にときおり感じる風が心地いい。かえるの大合唱の応援歌を聴きながら、田んぼの苗はぐんと背丈を伸ばし、縦横きちんと整列したまま、少しずつそれぞれの青々とした葉を広げていた。

柱と柱の間を計測して、柱の大ささを足していきます。

あとから、巻尺でトータルを測りますが、必ず、二十三ミリから三十三ミリの誤差が出る

と思います。

南北軸を日影君の班、東西軸を鈴木さんの班で。屋根の松本君、床下の大平君は、けつているようななたずまいなのに、おばあの家の庭は、TシャツとGパンといつた格好の遠足にでも来たような二十人くらいの、男女でござわっていた。子供もいた。うんと小さいのから、幼稚園くらいのまで五、六人かけまわっている。いつたい、何事だらう。ぼくは、立ち止まつた。

「吉崎班は、託児と食事の方をお願いします。私は、建具の方を担当します。食事の時間がきましたら皆さん、キャンピングカーの方でお手伝いをお願いします。」

ぎょりの言つことを、みんなにこじしながら聴いていた。それぞれ肩からひもだ、画板を下げる、手にスチールのものさしや巻

方を見ると、土間の入り口の戸が開けられていて、そこにはぎょりが立っている。

「今から、打ち合わせどおりに実測にはります。各班ごとに、割り当てる部分を始めて下さい。柱と柱の間を計測して、柱の大

■世話人会報告

(08. 27 於 : 飯田橋 / もてなし 出席者 13 名)

1. 定例会予定

- ・第3回、及び第4回定例会企画内容は今号にて案内。

2. 町並みゼミ分科会について

- ・生活文化主催の分科会参加者人数確認の為、往復ハガキで案内状を発送した方に再度発送します。
- ・発送準備及び最終打ち合せを 9月 5日 (土) 14 時より連合設計社にて行います。
- ・9/03, 10, 17 (毎週木曜) 町並みゼミ全体打ち合せが連盟本部 (新橋) にて行われます。スタッフで出席できる方は出席してください。

3. 機関誌 vol. 3 について

- ・大平建築宿に準備号を用意するはずでしたが、印刷所及び予算の関係で間に合いませんでした。その後、予算の目処が付きましたので、できるだけ早く発行します。

4. 次回世話人会

- ・11/12 (木) 18:30 飯田橋にて行います。出席される方は必ず事務局までご連絡ください。

5. 生活文化同人総会／忘年会 12/19 (土)

- ・幹事 : 伊藤秀夫さん・鈴木久子さん 場所及び時間については次回の会報でお知らせいたします。

■事務局より

・民家芝居『風のレジェンド』 -宮沢賢治スケッチ-

作: 熊谷 黙 演出: 北岡 清治 出演: 江良 潤・佐藤 二郎

10/30 (金) ~11/01 (日) 世田谷区・次太夫堀公園民家園 後援/世田谷区教育委員会

「劇場を飛び出し、芝居がお客様のところへ」をキャッチフレーズに昨年より活動を開始した「出前芝居」の本格的始動。2000年度には「風のレジェンド」ヨーロッパ公演も予定いたしており、どこでもどんなところへでも伺って上演して参ります。ご期待下さい。

劇団 風の街 ☎151-0072 東京都渋谷区幡ヶ谷 2-2-7-202 TEL/FAX 03-3377-9711

- ・今月号は町並みゼミ、定例会の都合により会報発行が多少早くなりました。次回は11月の予定です。
- ・会報原稿募集しています。私の近作、旅の報告、町並みスケッチなど何でもOKです。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・毎号原稿締切: 奇数月 20 日

◆ 編集後期

- ・山形県の山寺へ行つきました。体重 8.5 kg の娘を背負って、山肌を縫う千段の石段を、修行僧よろしく登りました。あまりの辛さに、頂上までは建物をじっくり見ることもできません。後で写真を見てみると、せっかく親子で写っているというのに、私の顔は苦痛に歪んでいました。(A)
- ・出産して 9カ月がたとうとしているのに、体重が元に戻りません。焼け石に水と言わながらも、プールに通い出しました。遅々として進まないウエイトダウンよりも、1000mを無心で泳いだ後の爽快感の方が収穫でした。負け惜しみでなく。(K)



大平エテ公

会報編集局: ☎102-0071 東京都千代田区富士見 2-13-7

連合設計社市谷建築事務所 新井 聰

98 年度事務局: ☎273-0031 千葉県船橋市西船 5-7-2-201 Tel/Fax 0473-32-4413
生活文化同人事務局 松本昌義

生活文化

生活文化同人会報

1998(平成10)年11月号 No.34

表紙・目次	01
(も) 町並みゼミ 分科会の報告／日影良孝	02
第3回定例会報告／佐藤基	06
加藤さんのお話／斎藤奈穂子	10
(く) 第4回定例会報告／佐々木貴彬	12
幸福の建築家になる条件 最終回／高橋照男	15
第五回大平建築宿を終えて つづき	16
(じ) 夢屋ものがたり⑫	20
掲示板	22
事務局より・世話人会報告	23

生活文化同人総会・忘年会

日時：12月19日（土）6:00～

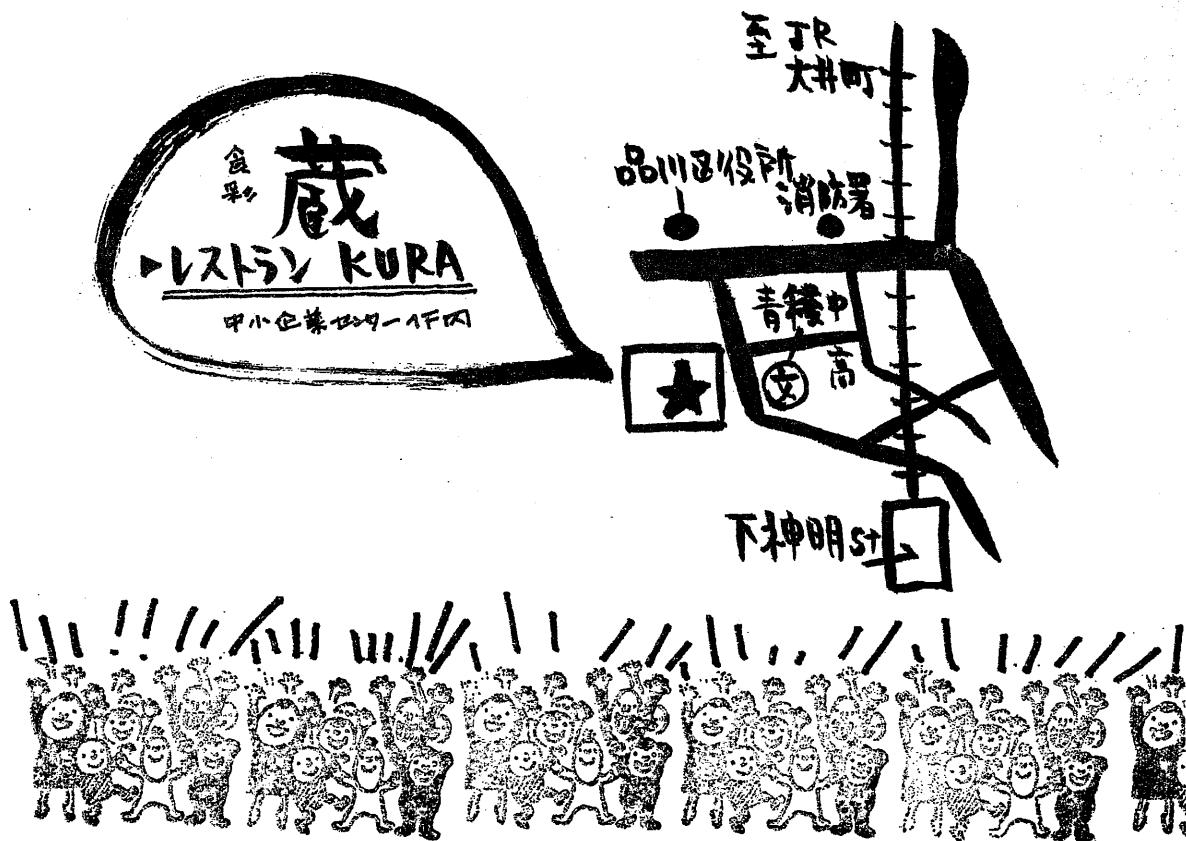
場所：レストランKURA

品川区西品川1-28-3品川区立中小企業センター1F

03-3788-6737

会費：5,000円（フリードリンク）

※連絡は事務局・松本に12/5まで



平成10年9月19日

第21回全国町並みゼミ東京大会 日本の町並み東京の町並み
ワークショップG 民家・町並みの保存と再生

主催 吉田桂二+生活文化同人+浅草おかみさん会
開催地 浅草 浅草寺境内 伝法院

民家・町並みの保存と再生

民家の集積を歴史的町並みとするなら、単体としての民家と、その集積としての町並みは、保存と再生に関して共通の問題を持っている。保存を、文化財的な意味で、最も完全な姿としてとらえるとすれば、復元として凍結的に保存することになる。単体としての民家にはこの例も多いが、この方法では、もはや住むことはできなくなる。町並み保存は、現実に住み続けている町を対象とするため、凍結的保存することができないで、凍結的保存を静的保存と呼ぶのに対して、動的保存の概念が必要とされる。動的保存は、建物の外観は歴史的形態として保存するが、内部は現代生活に適合するよう、改変してもよいとする方法、と考えられているが、日本の伝統的木造建築においては、この方法は殆ど不可能なのである。単体の民家を、最近建てられている住宅よりも、格段に優れた居住性を持つ家として、再生させている実例が多くなってきた。これは、外観を保存、内部は現代的というような皮相的なことではなく、商品化してしまった現代の家づくりに対するアンチテーゼとして、日本の風土に立脚した、本来の家を創造していると見て良い。したがってこの再生は、新築をも対象に含むことのできる、保存の概念を越えた、普遍的な論理へと拡大する。町並み保存が住んでいる町を対象とするならば、単体としての民家再生が到達している、こうした普遍的論理を必要とするであろう。これはまさに、新しい町づくりの論理となるはずだ。この分科会は、民家の再生に取り組んでいる人達と、町並み保存や町づくりに関わっている人達との、共通の広場を提供するものである。そこでの論議が、既に実務の段階に達している町づくりの内容を、確実に高めることができ、新しいネットワークがそこから誕生することができれば、と願っている。

浅草は、戦災によって昔の姿を失っているけれども、浅草寺の門前町としての、小規模な店が立ち並ぶ、下町的な情緒を感じる庶民の店である。この分科会は、浅草寺に残る数少ない歴史的建物を会場とする。庭園に面したこの書院は、廻り縁を巡らし、欄間には彫物、天井は折上格天井で、江戸的な豪快さのある建物。通常は使用できないが、浅草おかみさん会の特別の肝いりで使うことができた。したがって、会は畳に坐っておこなう。分科会の前後には、浅草寺を散策する時間もとっているので、東京ではもうここしかない庶民の町の賑わいにふれてみてほしい。夜の懇親会は、そばの美味しい「十和田」を買い切っておこなう。「ふりそでさん」は京都だったらさしづめ「まいこさん」のこと、若い美人揃いだ。これも浅草おかみさん会の肝いりでのこと分科会に大輪の花をそえてくれると思っている。

吉田桂二先生の分科会大会レジメ用原稿より

当日のスケジュールの流れは、以下の様な三部構成とした。参加人数は117名以上となり、他の分科会の参加人数と比較しても圧倒的な人数であった。

- ・一次会　　自己紹介と昼食　ワークショップ
- ・二次会　　浅草の自由散策
- ・三次会　　「十和田」にて懇親会。

ワークショップGの五つのテーマを民家・町並みの保存と再生における「目的」「継承」「生活」「技術」「創造」としました。この五つのテーマを各グループごとに、意見交流しその成果を発表します。五つのテーマは連動するもので

あり、切り離すことはできないのですが、もつれた糸をときほぐすように、それぞれの意味を再考し、民家・町並みの保存と再生という、人々の繋がりまで含めた美しい一枚の布を織るためのきっかけにできればいいと考えます。

当日の分科会レジメより

当日のワークショップは参加人数が予想よりも多かったため、約120名を六つのグループに分けました。グループにはリーダーを選任しそのリーダーに各グループの進行をお願いしました（突然の選任で申し訳ありませんでした）。リーダーは、1・植久哲男さん（住宅建築編集長・東京）2・柴田純男さん（設計工房クレヨン・福井県小浜市）3・戸張公之助さん（戸張建築設計室・東京）4・永見進夫さん（永見建築設計室・愛媛県松山市）5・八甫谷邦明さん（建築思潮研究所 造景編集室・東京）6・降幡廣信さん（降幡建築設計事務所・長野県松本市）の六名。総合司会（外国語ではワークショップの司会をファシリテーターと呼ぶらしいが、どうもこの言葉に馴染めない）は吉田桂二先生と日影良孝。議論できる時間は12時から16時まで。このたった4時間で「目的」「継承」「生活」「技術」「創造」の五つのテーマを話し合うことには無理があったかもしれません、まとめることは最初から目的としていませんでしたので良しといたしました。町並みゼミ分科会の詳細報告は次回の生活文化同人の機関誌で特集を組みます。この会報での僕の報告は、その機関誌を造るための準備作業として位置づけ、参加者からでた言葉（ポストイットカードに書かれた言葉）をこのページに張り付けていくものとしました。順不同、しかも文字数の都合上全てを紹介できませんが、これらの言葉から会場の雰囲気を感じてください。

目的

○自分の住む地域、そこで生活に対する誇りを持つことそれが文化の始まり、そのひとつ手段としての町並み保存・再生がある。○まさに民家や町並みの保存と再生にはハードとソフトの二面性という事から考えられる。ハードには日本のその地方の古き良き歴史、伝統建築の保存や再生、利用のしかた、暮らし方があり、ソフトにはハードを支える技術の継承が必要である。○そこに住む人、家族、地域の人の生き方、考え方の具象化、アイデンティティーの具象化としての民家・町並みの保存と再生がある。○良い人間、優しい人間になるため、つまり「モノ」は大切にしなさい」とか「思いやりのある人になりなさい」とか。○歴史、文化を伝える。住む人、訪れる人に不快感を与えない。○伝統的な技法は、先人から受け継いできた財産だと思う。今は後継者難が深刻だが、保存修復によって細々とでも技法が伝承されていけばと思う。○人としての「感性」の開発を目的とする。○全国どこでも同じ町並みのはずがない！各地の特徴を残し

てほしい。○くつろぎが有るけど守るのが大変です。○お役所の若い係員が勝手に町名を同一化した事は非常に残念、また旧名に戻しつつある処もボチボチ出てきた様ですが。○歴史の記憶として、建築単体および町並みを残していく必要がある。○生活していく上で心の豊かさ、ゆとり、はげみ等のために保存再生していく必要がある。○その集落が、あるいは町並みが存在していた歴史的役割によると思いますが、その役割を現代に蘇らせ、できれば学術的ばかりでなく生活の場として生かせる（観光との両立）のが大切だと思う。○目的そのもの、何に惹かれるのか。○そこに住んでいる人とそこを訪れる人の感覚の違いがあると思われます。○私は日本人らしく生きていきたい。それが唯一の目的です。

継承

○時代がにじみでる生活を継承。○歴史、文化の継承。○技術者が誇りをもてる仕事をつくる。○無理な継承はしない。○民話、民家芝居などが行われるような舞台として保存していく。○核家族による生活形態の変化によって草むしり一つもできない状態。たとえ近代化されても（台所など）民家における生活を継承していくのは難しい。○技法、材料などの継承についてデザインの問題があるのでは。ふるくさい。○暗い、寒いを明るく、暖かくに。住み易い方法を探る。空間の転用と発展を考える。○人々の暮らしは本来継承しながら発展するもの。町や建物はそうやって豊かになっていくもの。この30年から40年の産業の急激な変化の押しつけが生活の継承性を危うくしてきた。継承発展の豊かさを取り戻そう。○旅をしてきて魅力を感じれるところの、ほとんどが、過去のものを継承したものである。建築における創造は周辺の環境により制限されるものである。○身体で継承していった

生活

○日本の本来の生活を取り戻す事を考えた時、どの時代に立ち戻ればよいのか？それに対して明治以後のものは和的ではないのか？○旅をしていつも考え込んでしまうのは、みんなもう少し歩いて暮らせないものかということです。通りには車が歩いているのに、町に人影がないのは寂しいです。○町屋には町屋の生活様式がある。例えば囲炉裏、天井が高いなど、しかしごく一般の現代生活にはあわないものがある。○古い建物は傷み、老朽化が進行しているものが多く、生活面では大変な部分もある。補助事業では修理しても予算の枠がありなかなか手がつけられないものも多い。冬場の寒さをしのぐためにアルミサッシュを入れたがる住民も多いが、外観上に関わる使用は制限せざるを得ない。（アルミサッシュってそんなに良い建具なんでしょうか？木製建具では本当に対応できないのか個人的に知りたいのですが、あまり関係ないのですか？）景観として見た場合、土道がどんどん消えているところがある。せっかくいい家並みが残っても自動車の為に土道はすべて撤去されてしまいました。住民の生活の改善方法なのでしょうが、複雑な気持ちです。○民家での生活はまさに若者の生活に適応する、美しい生活である。

技術

○内子では特に指定の業者はいない。内子は職人のまちと言われている。○大工さんでも良い仕事をしたいと云う人は多いがその腕をふるう場所がない。○外材が主流、材の種類をわかる大工さんがいない。○古い民家や町並みを残す事が技術を残す事につながる。○日本の技術の価値を低くしてはならない。○ツーバイフォー神話はおかしい。伝統工法を踏襲すればOKということではない。○金物は木よりも早く腐る。○公庫基準は伝統構法を知らない人がつくった基準である。○伝統的に造られた家は丈夫であるという裏付けが必要である。○伝統構法には限られた優れた、突出した大工さんのみに受け継がれる特殊解ではなく、何でもない、町場の大工さんにこそ受け継いでもらいたい。○生活の技術の継承が最も大切だと思う。

創造

○施主側に建築の勉強をしていただく必要がある。よい大工さんがいて、良い施主がいて、建築に理解を示していただき、○木に竹を接ぐのではなく、伝統の中に見合った新しいものを。○再生=創造か？○時代の流れの中で○新しいものではなく古いものを守ることも大事。○戦後洋風なものが一般化してしまった。ハウスメーカーの思いつき。新しいモノが伝統ではないのが今の問題点。伝統を引き継いでないのは、本当の町づくりではないのではないか。我々日本は伝統的な集落に立ち戻ってスタートしても良いのではないか。○古い家を直す時、その人の想像力やセンスが現れる。造り手の想像力がとても重要である。

町並みゼミが終わって

日影良孝

町並みゼミの目的は様々ですが、その目的が理想的な？町並みをつくることに主眼を置いているとしたら、その理想的な町並みは何？と問いかけられても僕はまだ、うまい言葉やかたちを答えることはできません。町並みは動くものだから、そのカタチだけを考えても、不足しているようで、実際に存在するのは人であるわけですから、町並みは「人」がいれば成り立つものだと単純に考えることもできるわけです。と同時に美しい町並みを欲する気持ちは誰もが持つ絶対普遍的なもので、その普遍性には個人の主観も相当量含まれてきます。そのように考えると町並みゼミは「ひとなみゼミ」と言い換えたほうが良いのかもしれません。人はまさに時間の蓄積の上に、歴史の上に存在しているですから。私たちの分科会の目的は、まさに「ひとなみゼミ」を開くことにありました。現実の時間の流れに抵抗することが町並みの創造ではなく、時間の流れと共にいかに時間（まちなみ）を創造できるかがこれからの課題ではないかと考えたのです。時間の創造は個人的なものかもしれません。故に、その個々の言葉にお互いに耳を傾けるのに意義があるのでないかと思ったのです。

面白架構

～数字からではなく形から～

レポート：連合設計社 佐藤基
 講師：有限会社 T&S 総合建築設計
 監理設計士・高橋伸一氏

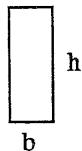
“構造”と聞くと「難しい公式」とか「～的に解析して」などといった訳の解らない言葉に惑わされ、お手上げ状態の人が多い同人メンバー？を前に本来構造がもつ可能性や魅力を自身で体感するかたちで、常日頃‘造形’しているであろう我々に取っ掛かりにくい計算などはなしで、色々とお話しいただいた。

●単純な計算・形態からでも複雑な造形がつくられる

あくまでも何から何まで複雑窮まりない計算から形がつくられている訳ではなく、どのような形態でもやはり単純な基本形態の組み合わせによって構成されているわけで、その基本がつかめていないといけません。

ところでみなさんここでいう基本的構造を御存じですか？

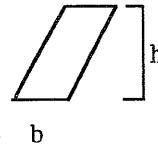
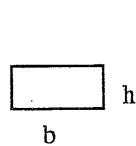
断面2次モーメント $[I = b h^3 / 12]$ これを知らずしてはこの先に進めません。ちょっとここで解説を！



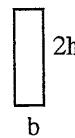
左のような断面を持つ材には

断面2次モーメント $[I = b h^3 / 12]$ が働きます。

下図のような断面形態をもつものについても全く同様
上式が成立します。



ということは右図で例えると材は
横使いよりも縦使いした方がより
有利だということは一目瞭然です。



$$I = b(2h)^3 / 12 \\ = 8 \cdot b h^3 / 12$$

↑4倍

$$\begin{array}{c} \boxed{} \\ 2b \end{array} h \quad I = 2 \cdot b h^3 / 12$$

前記の断面2次モーメント [$I = b h^3 / 12$] は
変形量 [$\delta = w l^4 / 384 EI$] に関連してくるわけです。

ではよく話題の重ね梁に
例えれば

※・断面1次モーメント $S = A \times 1$
・揺断力 $\tau = Q S / b I$

$$\begin{array}{l} \boxed{} \\ \boxed{} \\ \boxed{} \\ \boxed{} \end{array} \quad I = b h^3 / 12 \\ \quad \quad \quad \times 4 \\ \quad \quad \quad = 4 I$$

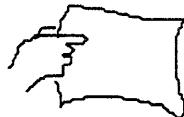
$$\begin{array}{l} \boxed{} \\ \boxed{} \\ \boxed{} \\ \boxed{} \end{array} \quad I = b(4h)^3 / 12 \\ \quad \quad \quad = 64 I$$

●以上のことば剛性に関わる基本公式として理解してもらって、いざ身の廻りに
あるもので実演してみると！

・紙 平 → ペナッ！



縦 → 持ってる！



←ただし、バックリングを
おこしている

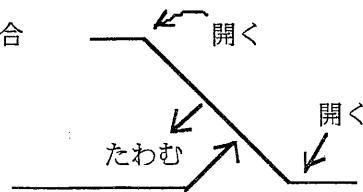
このバックリングを防ぐ形で成立しているのが、H鋼やI鋼などである。

●配筋の考え方 ワンポイント

○スラブの場合



○階段の場合



○現場で注意して見ると…

引っ張り力が掛かるであろう箇所にきちんと配筋されていない場合が以外に
多いので注意されたい！

●紙を使って実体験！

弱い素材 (ex. 紙) で実際に形作ってみれば壊れ方、弱い部分が見えてくる

ex. 1円玉 = 1gで荷重をかけてみると…

- ・階段
- ・二つ折 × 3 山
- ・キャンティ
- ・両端支持

②図・⑤図 参照

③図・④図 参照

- ・アーチ型、ドーム型

⑥図 参照

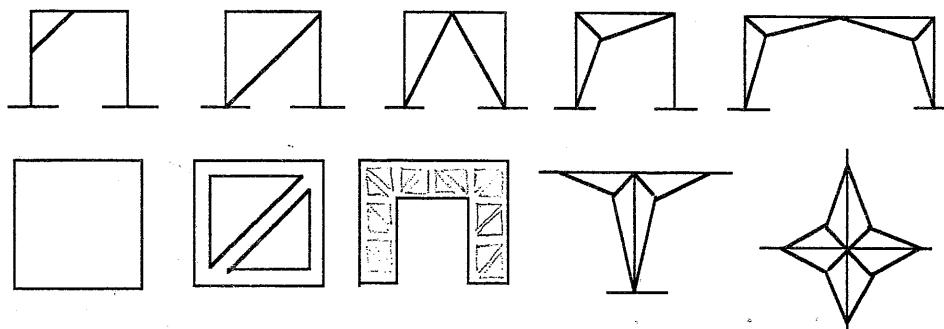
ex. ・ネルピー ユネスコ本部

↑これは特に面白い！

・ミノル・ヤマサキ 聖ヤコブ教会

●壁も柱も梁もみな同じ

構造とは必要な箇所に必要な強度・剛性を持たせねばよいのであって、壁・柱・梁と部材名称によって何かが変わる訳ではない。従って、最終的にどのような形態になるのか、どんな構造システムを考えるのか、といった点が重要なのです。



●質問他

通し柱 ・構造的には不要 → 断面欠損が大きいため
・施工的には必要 → 定規代りとなり作り易い

火打梁 ・面剛性があればよい

※ いずれも、時と場合で考慮すべきであって、通し柱や火打梁が必ずしも必要不可欠という訳ではない！

ラーメン構造のものは自然界には存在しない

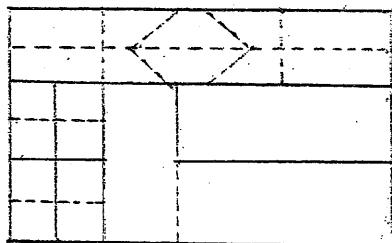
仕口だけでかためたものの解析は難しい

東京に現存する五重塔
池上、上野寛永寺

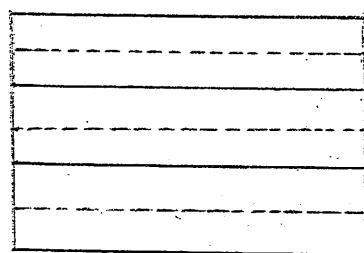
初期剛性がなく、力が掛かって
はじめて効く

構造とは、その形態を成り立たせるためにはどうすればよいのか、条件や欠点を見付けていくことで、その成立条件を作つてゆくことがメインであつて「みつともないから斜材はいれたくない」とか、「不本意だが、しかたなく壁を作つた」などという言葉はナンセンスです。『どう見せたいのか、どういった空間にしたいのか』という思いが先行・理解して、形作られるのが“建築設計”なのです。

Ⓐ図



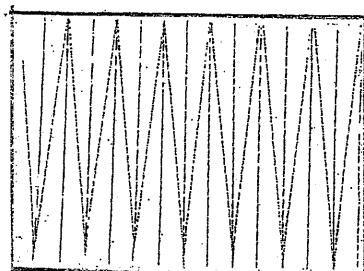
Ⓑ図



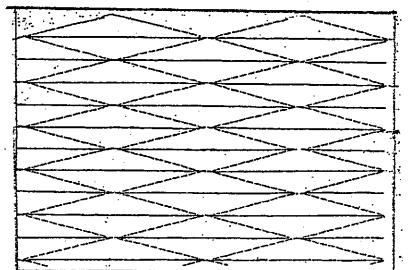
Ⓒ図



Ⓓ図



Ⓔ図



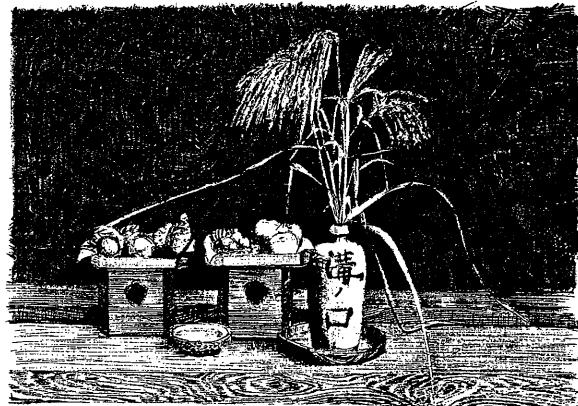
— 谷折
- - - 山折

加藤さんのお話し

報告＊ 齋藤 奈穂子

連合設計社市谷建築事務所

昨年の大平宿で大好評のうちに終わつた「風のレジェンド」が東京・世田谷の民家園で10/30～11/1の3日間行われた。その最終日、せっかくみんなが民家園に集まるのであればと、岡部さんの音頭で千秋楽の前の時間を使って民家園の左官工事をされた加藤さんに工事の時のエピソードや左官についてのお話を伺った。



章

加藤さんは秋田県出身で、都内では先日町並みゼミのあった浅草の喫茶店「蔵」や靖国神社等、様々な左官工事を手がけている。この民家園は、8年前手がけた工事となる。

まず、旧加藤邸から見学、この日民家園では十三夜の行事が行なわれており、庭先では子供たちが月見団子を丸めていた。この家は、典型的な農家スタイルで四間取りプラン。

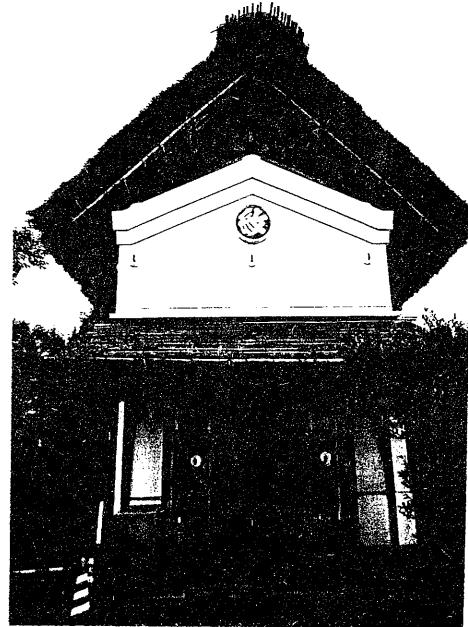
毎日かまどに火を入れているので加藤さんもびっくりするぐらい壁、天井が飴色に変わっていた。

続いて旧城田家、この家は半民半商の家であったらしく、現在は園内の案内所兼売店の役目も果たしている。いろいろに座って参加者全員で団欒のひととき思いがけず子供たちが作ってくれた月見団子をいただきながら土間のたたきについて詳しくお話を伺う。現在は強固材等のセメントを混ぜて作る場合もあるそうだが、本当にたたいて仕上ると良くできて1人1日1坪しかできないそうである。厚みは10cmぐらいの土が6～7cmになるまで丹念にたたくのみ。気の遠くなる作業である。

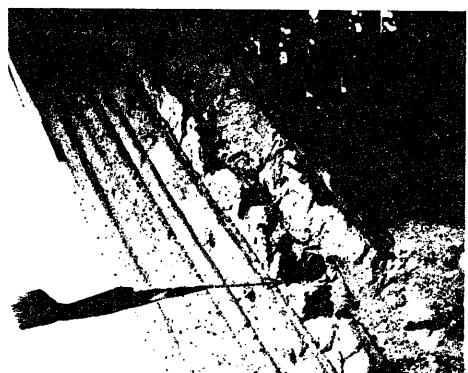


旧城田家

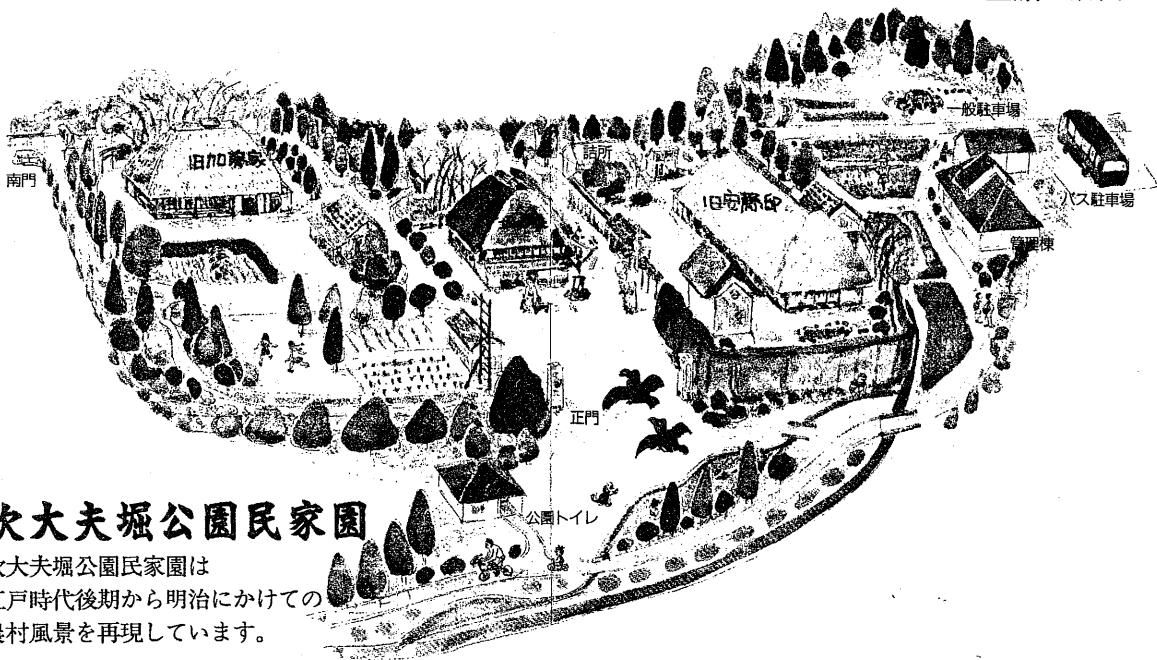
最後に風のレジェンドの舞台にも使われる
旧安藤邸。この敷地内には、土蔵が2棟ある。
壁の厚さは1尺8寸にもなるそうで、これだけ塗れば火に強いはずで、今造ると
1000万/坪もかかるそうだ。外壁の漆喰は、
持ちの良い土佐漆喰が使われている。わざわざ土佐まで見にいってきたそうである。母屋の
内部は名主の家らしく床の間が2部屋にあり、
1つは赤い壁（これは紅唐土）1つはグレー
の壁（これは墨を混ぜた）になっている。
また、紅唐土の床の間がある部屋は壁にも土
佐漆喰に黄土を混ぜて、黄色い壁になっていた。



1時半に集合してから、3時間半もの間、
加藤さんのとても興味深いお話を伺えた。
お忙しい中、ありがとうございました。



土蔵の断面



98年第4回定例会 平成10年10月31日
千葉県印旛村師戸 [漆工房・願船]
講師・大西 長利 東京芸術大学教授

報告・佐々木 貴彬

漆工品を英語でJAPANというほど、日本を代表している工芸品といいうるが、歴史的には必ずしも日本だけのものではない。古く中国大陸では紀元前十世紀ころの西周初期の遺跡から食器が出土しており、古代日本、いや近世まで中国・朝鮮・東南アジアからの影響によって日本の漆工芸は進展した。

しかし、なぜ漆工品をして日本の代表たらしめたのであろうかという問い合わせの答えは、日本の漆工品が独自の個性をもち、かつ優秀であるということが、その回答である。

元文化庁文化財調査委員 郷家 正臣
(毎日新聞社刊 重要文化財より)

10月も終わりだというのに汗ばむ陽気の中、印旛沼を目指し、赤い愛車を走らせた。勉強会に行くという緊張感は微塵もなく、漆に全くかぶれない体質の為、漆への恐怖感もなく、弟子入りでもしないかぎり教えてもらえないような事が聞けるかもしれないと、気分はウキウキだった。生活文化同人に感謝である。

私の漆に対する思いは3つ。貴重と静寂、そして美である。
貴重はいわずもがな漆の木から少しづつ沁み出る樹液を舐めとるように集めるからであり、(一本の木からの採取量はわずかに150ないし200グラム程度であるとされている)
静寂は塗りの工程である。そこには埃ひとつたててはならない痛いほど厳しい静寂の世界があるからだ。そして美しい…。

子供の頃、近所の釣具店のじいさんが自慢げに見せた、漆塗りの和竿の艶かしいほどの深い輝きが、今もって私の原風景に住み着いている。

今回の講師である大西教授のお宅(工房)は印旛沼にほど近いところにあり、周りを雑木に囲まれた、棟の高い古い農家づくりの建物であった。

やはり平野部らしく大黒柱や縁側の床板などには檜が使われ、主の趣味のよさを物語るように、床柱は杉の磨き丸太(太鼓落とし)に、落としは黒柿である。

間取りは鍵座敷形式の取巻き広間型であり、竿縁の天井は高く、長押は太く、空間は広く、大きく立派な建物であった。

また、土間には大西教授がデザインしたという兜をイメージした暖炉が鎮座しており、日が落ち風が少し冷たくなった頃には、とても素敵で暖かい空気を僕らに提供してくれた。

大西教授の作品
乾漆技法で作られている。



室町時代の根来塗り
湿潤な独特なフェロモンを放つ

鈍い朱塗りや拭き漆の座卓が並べられた鍵座敷に迎えられた私たちは、自らの漆工品の傍に、誇らしげにもゆるやかに立ち熱く語る大西氏の漆への思いに時間のたつのも忘れるように聞き入っていた。

季節は晩秋にさしかかり、紅葉も盛りを過ぎた頃であるが、漆は木の中の樹脂が気温の変化に敏感で、一番先に紅葉するそうだ。まるで樹脂そのものが、物事に敏感で気の難しい芸術家のようなである。

漆は古くは縄文時代から使われていて、最初は狩猟の道具を作るさいの強力な接着剤として使われたらしい。また土器や木器にも使われ、木は経年で溶けてしまうが漆の成分は残るので、発掘を慎重にすれば木器も復元できるらしいのだ。

一旦乾燥してしまえば、海水や熱湯はもちろん、硫酸、硝酸等の酸類にも侵蝕されず、アルカリにも強い。そして塗れないものは無いとさえ言い切ってしまえるほど、どんなものにも塗れてしまう超スゴイ材料なのだ。

しかし天然樹脂なので、火には弱いことが欠点である。

また、もうひとつの欠点として「うるしかぶれ」があるだろう。

「かぶれ」という言葉は「気触る」（けぶる）というのが語源だそうで、漆液の主成分であるウルシオールによる接触性皮膚炎である。

ちょっと難しくいうと「ウルシオールがアレルゲンとなってタンパク質に作用する」という事になる。

人種によってもかぶれの度合いが違い、白人は弱く、黒人は強いらしく、つまりメラニン色素が多い人はかぶれにくいという推論があるのだ。

でも全くかぶれない色白の僕はどうなるの？

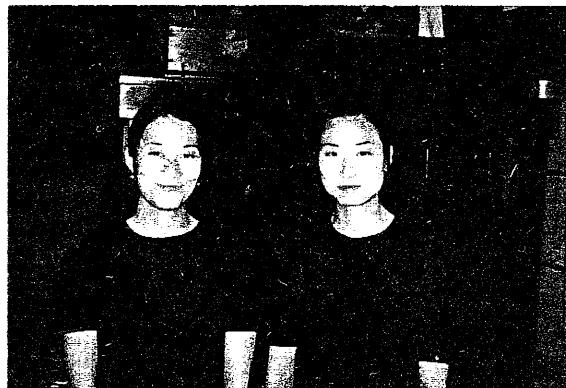
何度も漆を扱っていると抵抗性がつくというが、まったく抵抗性がつかないケースも多くあるという。このかぶれを予防するには接触を遮断すればいいわけだが、よい方法を見つけた。「ベルツ水」というのを手などに塗布しておくのが最良の方法だというのを見つけてわかった事である。

なお「ベルツ水」は薬局に頼めば調合してくれるそうである。

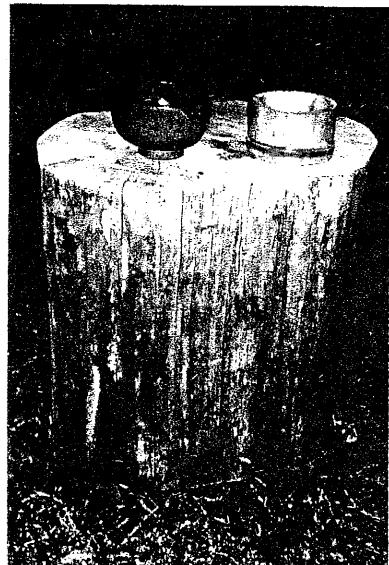
豊崎さん試してみてくださいネ！

□ベルツ水レシピ —— 苛性カリ 1mg・グリセリン 10mL・エチルアルコール 30mL・水 60mL

漆器で食べたケンチン汁は美味かった！



大地の恵？の佐々姉妹



漆工品には、木材等の木地に塗装する「塗り」と、麻布を数度張り合わせた「乾漆」（現在のF R Pの様）、そして「蒔絵技法」（現在のメッキ加工の様）があるが、私たちに身近なのは塗りだろう。

参加したみんなの声にこたえて、大西先生が漆塗りの実演をしていただいた。

木製のスプーンに黒漆（生漆に鉄を混ぜたもの）を塗る技だ。刷毛には塗師屋刷毛と呼ばれるものを使う。これは人間の髪の毛を束ねて、柄は檜の板を両面に張り、毛髪を上下に貫通させて、使用に応じて毛先を切り出して使えるようになっている。

この毛髪は日本の若い女性に限るそうで、外国人のものはくせ毛で腰がなくダメだそうだ。先生は佐々娘の髪の毛が大変気に入ったようすで、ほめちぎっていた。

また、室町時代の根来塗り（上塗の朱漆を研磨して中塗の黒漆を見せた塗り）まで見せていただいて、深いため息をつく思いであった。

大地

漆は日本だけのものではないと先に書いたが、たとえば、最高とされる日本の漆の木を中国に持っていって植えても性質の違うものになってしまうらしい。

これは風土と密接に関係しているという事だ。大西先生は話の中で「大地」という言葉をよく使っておられたが、狭い山ばかりの島国に住む私たち日本人はあまり大地という言葉はあまり使わないだろう。

大陸的ではあるが、世界最高のものを生み出した私たち日本の大地に、そして大地の恵に感謝したい瞬間であった…。

大西先生、色々と教えていただき、またつまらない質問にも解りやすく答えていただけてありがとうございました。

P.S.

過去2回ほど漆を自分で扱った事があるが、今まで「もったいない」という気持ちと性質がよく解らずチョイトむずかしいという事で、気軽に使う事が出来ないでいた。

でも今回、大西先生の教えから、自分の釣竿を漆で修理・改造してみると、ナーンダ！こんなに便利なものだったのか！とあらためて思い直した次第であった。

大西先生も、建築にも気軽に使ってほしいと言っておられた。しかし塗る時は普通の刷毛じゃやっぱりダメで、塗師屋刷毛が欲しいけど、30男の髪の毛じゃダメかなあ…。

幸福の建築家になる条件 連載IV 最終回

日本建築積算協会 コストスクールディレクター 高橋照男

4章 幸福の建築家の詩

4-1. ラスキンの言う建築の眞の価値

ジョン・ラスキン（英国の美術・建築評論家 1819～1900）が19世紀後半から20世紀初頭にかけて世界中の建築家たちに与えた影響は、実に計り知れないものがあった。英国のアーツ・アンド・クラフト、アメリカ近代建築のパイオニア、サリバンや、その偉大な弟子、ライトなどが、青年時代にラスキンの著書を愛読して、彼らの創造力の重要な源泉の一つとした。

筆者はその中でも「建築の七燈」の中の次の言葉が好きであった。

（建築の眞の価値は）それに携わった労働者がその建設に従事しつつある間幸福であったか、（によって計られる。）

（第5章生命の燈 18節）

つまり建築はそれ自身が目的でなく、それを通じて人に仕え、そのことによって自己の幸福を得ることにあるというのである。

建築は、それにたずされる者が幸福であるときによい建築になるというラスキンの言葉は至言である。

4-2. 幸福の建築家の詩

ラスキンはあるとき、スイス、ベルンの高地グリンデルヴァルト近くの美しい一村莊にかかっていた詩に目がとまった。ラスキンはその詩に、「平穏な安息所を建ててこれを所有することを許したまえる神の恩恵」への感謝が溢れているのを見た。その詩を次に掲げるが、そこには建設労働者の祈りと幸福が込められていて天地が調和している。その労働は喜びのうちにあり、それが天にこだましている。筆者的好きな詩である。

心からなる信頼をもて
ヨハンネス・モーテルとマリア・ルビが
この家をば建てさせたのである。
願わくは御神よ我らを守らせ給え
あらゆる不幸と危害より、
そうしてこの家をば祝福の中に建たしめ給え
苦難のこの世の旅、
信仰深き人皆の住む天国への旅において。
かの国にて神は彼等に報い給うであろう
平和の冠をもて
永遠の永遠までも。

（ジョン・ラスキン『建築の七灯』6章6節）

—第5回大平建築宿を終えて つづき—

前号につづき、参加された皆さんのが感想や思い、又運営上の問題点へのご指摘などを寄せ頂きました。事務局として次回からの大平建築宿運営の参考とさせて頂きます。ご協力ありがとうございました。

—1年ぶりの大平宿—

2回目の大平宿である。

多くの人がそうであろうが、1年ぶりに大平宿を訪れた。

日々使っていない建物の1年の歳月を感じさせるものがあった。

あそこの柱が、ここの建具が、ということはないのだが集落全体から1年前より古くなっていると明らかに感じる。

周りの風景では、黄色い花(名前が分からぬ)の数が、昨年の3倍位増えている。

あの花は、もしや毒を持っているのでは?

他の植物を覆い尽くさんばかりの勢いで増えている。

来年の大平宿までには、正体を調べてみよう。

齊藤奈穂子・連合設計社市谷建築事務所

98 大平建築宿によせて

私は、今年からつづら屋工房でステンドグラスの勉強を始めて加藤先生から大平建築宿に誘っていただきました。学生時代の友達も誘って一緒に参加しましたが、何も知らない二人にとって、とてもよい刺激になりました。

環境のお話は少し難しく、先生の声が小さかった為、語尾が聞き取れれば理解できるところもあったように思います。私にもっと知識があればと思わされました。

又、今までにない生活ができ、初対面の多くの人達といろいろな話をする事が楽しくときどきしました。アイヌの演奏会はまるで別の世界に居るような気分になれてきもちよかったです。

私は第五分科会に参加しました。「大平の川遊び」というもので、2~30人の方が一緒でした。水が冷たく雨が降りそうな天気でしたが、みんなそれぞれ川遊びを楽しんでいたようです。私も川で遊びました。今回は、全員で楽しむということが出来なかったので、次回はみんなで楽しめるものがいいと思います。例えば、裏の小学校があったので運動場を使ったりすると楽しい事ができるかなと思います。多くの人が集まるチャンスはめったにないので全員で楽しめればと思います。

とても良い経験をありがとうございました。

ステンドグラス葛籠屋工房・藤原佐江子



「第五回大平建築宿」

森田瑞穂（成城大学文芸学部美術学科3年）

大学で美術史や美学を学んでいる私が「建築」と聞いて思い浮かべるものといえば、「聖堂、教会、寺院」であった。よく分からぬまま「面白そうかも」と参加した大平建築宿であったが、見て、話を聞いただけではなく、その中に入り、暮らしてみたというのはとても貴重な体験だつた。

大平にあるのはまさに民家という人々の生活の形象化なのに、そこで3日間は私にとって極めて非日常的なものだった。時の経過は明らかに何かを変えてしまったのであり、決して、そこに暮らしていた人々と同じものを共有することなんて出来ないのかもしれない。時という縦の軸だけでなく、普段自然からいきに遠ざかった生活をしているかも再認識した。

流れている水がどんなふうに冷たいか、風の音、土や草の感触、そして虫、虫、虫。こうしたものは私にとって「忘れていたもの」ではなくて、「異体験」に近い。人間にとって自然な生活の姿とはどんなものなのだろうか。

日常の場であった民家一つ一つが長い時を経て、容易には語ることの出来ないの重みを持っているのだろう。かつてこのように民家を意識したことはなかったかもしれない。大平は新参者の私に何も語りかけてくれなかつたけれど、いつか何かを感受できるように耳を傾けていければなあと思う。

朝日新聞 98.09.02

市民の手で守った「大平宿」

羽場崎 清人
(飯田山岳会長)

長野県飯田市

昭和四十一年（一九六五年）ひそかに過疎な
どのため全国各地で山間部の集落が消えて
いった。このころの集落が今、中央アルプ
ス南部の山の中、長野県飯田市大平に「い
るの里・大平宿」として残っている。江
戸、明治、大正時代などに建てられた十数
軒の民家は、ほとんど無人だが、宿泊希望
者はいって、『家主』として利用でき
る。

林業や、木賃谷へ出る街道の宿場として
にぎわつたこともある大平宿は、七〇年に
集団移住となり住人がいなくなった。三年
後、村外の不動産業者が、廃屋を使った民
宿経営で、近くの市上水道取り入れ口付近
での別荘分譲を始めた。

飯田市民は最初、きれいな水の確
保を目的とした反対運動を起こし
た。当時、山を越えた木賃谷でも、現
在は建物を管理している「大平宿のこす
の町並み保存会」が始まっていた。大平集落も
金体を残す町並み保存運動へと参り、さら
に豪農保存、ナショナルトラスト運動へと
発展する。

運動を支えてきたのは市民の組織で、現
在は建物を管理している「大平宿のこす
の町並み保存会」が始まっていた。大平集落も
金体を残す町並み保存運動へと参り、さら
に豪農保存、ナショナルトラスト運動へと
発展する。

会」。飯田市も「あるべき特別対策事業」
として、建物の補修や周辺整備に乗り出
し、今まで年間二千人を超える人たちが利
用する場所になった。市民の手で築いた
「町おこし」ともいえよう。

近年は豪山家でも、あまり「火」を使わ
ない。食事も明かりも山小屋が用意するか
らだ。大平宿は屋根があり、いろいろがある
だけ。宿泊者は、火おこしの豪農の支度
まで自前が原則だ。數十年前の山里にあつ
た、いろのを開む家族の人々だらん。そんな
歴史体験の環境が、全国の大平宿愛好家に
も支えられ、頑固に守られている。

地域通信

第5回大平建築宿の報告

第5回大平建築宿事務局 小林 一元

去る8月14から3日間、恒例となった大平建築宿が開かれました。今年も延べ139名の人が参加され、盛大かつ無事に終了いたしました。

講演やイベントあるいは分科会、または、一時的にせよ大平宿での生活を通してそれぞれの方が何かを得て日常の生活に戻りました。

今回は、初めて参加される方が例年より多く、それぞれにとって有意義な、多くの新しい出会いや語らいがあったと思います。

もう、次にむけて新しい事務局が準備をすすめています。いただいたご意見を元に、さらに充実した建築宿を開く予定ですので、ご参加ください。

ではまた、来年大平でお会いしましょう。

アンケート集計結果

※回収率が大変低かった為、貴重なご意見となりました。

企画について

基調講演

- ・聞き取りにくかったのが残念。
- ・多彩なお話で大変勉強になった。
- ・難しい問題なのでスライド等を使い、子供にも分かるようにしてほしかった。
- ・沖縄の現状には腹が立ちました。
- ・下水を利用した魚の養殖や植物の栽培に興味を持ちました。日本でも早く風土にあった利用をしたいものです。

アイヌコンサート

- ・輪踊りは盛り上がって楽しかった。
- ・面白かった。
- ・独特のリズムと感性を楽しみました。
- ・違う世界に居るような感じを味わえて楽しかった。
- ・アイヌ音楽は初めて聴きました「トンコリ」の幻想的な音色はすばらしい！打楽器との共演もノリが良く好きです。

建物、周囲の保全作業

- ・障子張りは楽しい作業でした
- ・利用しながら調子の悪いところをその都度保全するのはとてもよい。

民家での生活について

- ・メンバーがすばらしかった。またこのメンバーで…。(下紙屋泊)
- ・宿の中はきれいで、来年もまたぜひきたいです。(からまつや泊)
- ・子供も楽しんでいました。
- ・囲炉裏はいいですね。
- ・建物の状態がよく、とても快適。(からまつや泊)

分科会

第1分科会 「環境と開発」 吉田桂二+長谷川順持

- ・考えがまとまらないうちに終わってしまったのでもう少し時間がほしかった。

第2分科会 「母性と建築」 豊崎洋子+内藤敬介

- ・とても面白かった。自分でまだ答の出ない問題なのでもっと考えたいと思った。

- ・参加者全員から「家」に対する思いを聞きました。

第3分科会 「写真」 近清 武+須崎祐次+佐藤しんいち+日影良孝

※残念ながらお寄せいただけませんでした。

第4分科会 「地域文化の自然観」 長谷川修+江原幸壱

- ・「アイヌ文化は日本文化とは違う。」という言葉にはつとしました。文化の豊かさに感動し、歴史の事実には非常に悲しくなりました。知ることができてよかったです。

第5分科会 「大平の川遊び」 羽場崎清人+寺本雅男

- ・もう少しみんなで楽しみたかった。
- ・雨が降って少し水が冷たくてさみしい感じではありましたが、こういう機会がありないのでとてもいい経験でした。竹の扱いがうまくいかなかったです。
- ・もっとあそびたかった。

懇親会

- ・いろいろな人と話ができる、良かった。
- ・子連れの人も子供を寝かせてから参加できると良いと思う。
- ・いつもながら楽しい集まりでした。
- ・皆さんの元気なことに驚きました。(20代前半の方…。)
- ・楽しすぎて、飲みすぎて。

食事について

- ・皆で知恵を出し合ってのオプション料理は良かったです。
- ・すべてうまくいったと思う。食材が残ったのでもうすこし少なくして良いと思う。
- ・肉類も少しほしいです。
- ・かなり上手く（旨く？）といった。

その他

- ・まきが少なく、大変でした。
- ・初めてのことばかりで面白かった。
- ・体を動かす行事がないので卓球大会はどうでしょう。
- ・釣りをする人は必ず入漁券を買ってください。12cm以下の魚は放流しましょう。
- ・羽場崎さんから差し入れの竹は大変ありがとうございました。
- ・春か秋に開いてほしいです。
- ・こんどはおとうとをつれてきます。
- ・たくさんの方と交流できました。来年もぜひ…。

こなしが、柱と柱の間を行ったり来たりしながら、小さな名札のようなものを柱に打ち付けている。

突然、ぼくの耳におばあの声がよみがえった。

『おばあが住まなくなつてみる。あゝと、う聞にこの家のいのちはなくなるだらり』

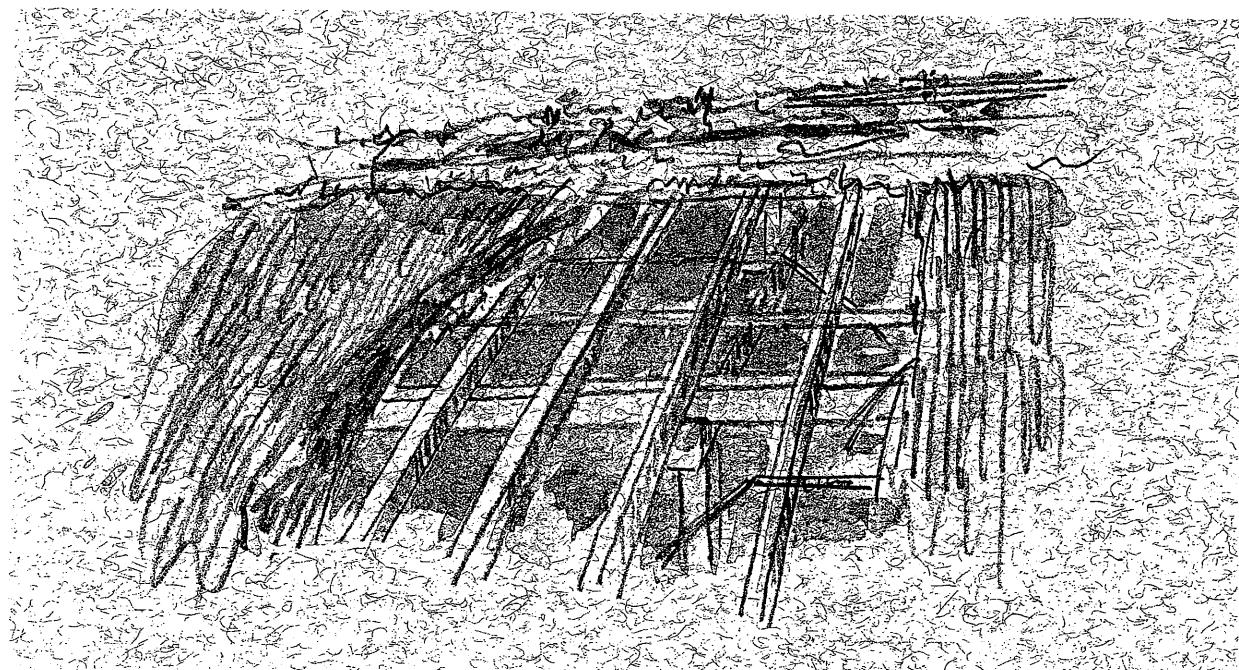
「おじさん、これはおばあの家だ。」わしてはいやだ』

とぼくは、家中へ駆け込むなり、ぎょろりに向かって怒鳴った。

そしておばあが棺に入れられた時も、野辺送りした時も、一粒の涙すら「こます」との無かったこのぼくが、あたりかまわぬ大声を上げて泣き出した。自分でもびっくりするほど、涙があとからあとからあふれてきた。

きょろりは、柱にかけた手を止めて、しそりくぼくを眺めていたが、二三度まばたきをすると、ぼくの方を向いて静かに語り出した。

「坊や。おじさんはこの家を壊してゐんじや」



「おじさん、『移築』するんだ。そのつまり、この家を別の土地に運んで、もう一度建て直すの。坊やのおばあは、ここを村のみんなの役にたつように使って欲しいと言われたらしいね。だけど、役場の方でここを壊して、コンクリートの公民館を建てると言つんだよ。それで、おじさんは、この家を必ずいつでもひいこむとしたのさ。見て」「ひいこむ」「こま」「こまわぬ」など書いてあるだらり。これは符丁と書いて柱の名札なんだ。どこの柱だったのか、大工さんがもう一度建てる時に、あかんと分かるようにしておくれや」

そんなことが、できるのだろうか。ぼくは、よく分からなかつた。鼻をすりながら

「だつて今、壊してあるじゃないか」

勢いのない声で、やつと言つた。

「よし坊や。ひとり約束しよう。坊やのおばあの家、『移築』が完成したら必ず見せてやる。だから泣くな。この柱を見てみろよ。この柱はまだ生きてる。もう百年は生きるだらう。おじさんは、この柱を生かしたいのさ」

かのものがたり



大庭

柱

(12)

なんで、屋根に草がはえているのか不思議がつたぼくに、ずっと前おばあは教えてくれた。

屋根のつべんの棟をふく時、茅の中に草の種をしのばせておくのだと。そして屋根の上に草が生えると、網のように根をはって棟をまもってくれるのだと。

草が元氣だから、おばあの家の雨漏りは丈夫かもしれない。ぼくは、そう思うことにした。

七月半ば、梅雨が明けると陽射しはいよいよ強くなってきた。稻は、すっかり一人前に成長して、茎が太くなり、青々とした葉を隣どうし重ね合っているほどだ。五月の弱々しい苗のおもかげはない。タネモミ一粒のどこに、「こんな力が隠されているのだろう。」「までタネモミを育てたのは何なのだろう。水

と日光と土と空気、それに成長を助け見守つた人の手とまなざし。ほんとうに、それだけなのか・・・? 不思議には必ず、秘密の魔法がかくされているような気がする。

ぼくんちには、田んぼがない。だけど、山の上から下と下の谷の方まで、段々に並ぶよその田んぼを見渡すのは、夏のぼくの楽しみだ。朝早く、谷から吹いてくる風に、朝露にぬれた稻の穂がさやさやと揺れて、下の方から葉波がわたくてくると、ぼくは田んぼの真ん中に立って風を迎える。ひんやりとした青臭い風は、一瞬ぼくを包み、たちまち去つていく。夕方には山の方から、風が渡つてくる。夕方の風は、日中の熱のなごりを運ぶ。

八月の強い陽射しは、青い稻をたちまち黄金色に変えてゆく。風の匂いが変わる。田んぼの水が止められて、八月のお盆が過ぎると、このあたりには秋の気配が忍び寄つて来る。黄金色の穂が乾いた稻の茎に重たそうに下がつた頃には、そろそろ刈り入れだ。台風が来

ないうちに刈り取らなければならない。風で倒れると米の味が落ちるらしい。」の里の夏から秋への交替は、すばやかつた。

九月に入り、新学期が始まつたばかりの朝。ぼくが学校へ行こうとすると、おばあの家の前にレッカーチー車が、高々と腕を振り上げて止まっていた。すっかり忘れていた胸のざわざわが、いつぶんにぶり返した。そのまま登校したもの、学校にいる間じゅう、友達の声

も先生の話も耳に入らず、胸のざわざわに気をとられっぱなしだった。学校がひけると、一目散におばあの家に向かって駆けた。

ぼくは、その時見た光景を一生忘れないだろう。おばあの家は、茅葺き屋根をすっぱり切り取られて、黒々とした垂木や柱が骨のようにあらわになっていた。家のまわりを、ヘルメットをかぶり作業服を着た男たちが、大声を出しながら取り囲んでいる。家中の中にもヘルメットをかぶった男がいる。前に見掛けたところだ。ぎょりりは、軽々とした身の

文京・まち再発見

—近代建築からのアプローチ—

- 日 時 1998年 10月 24日(土) ~ 12月 6日(日) AM11時~PM5時
- 休 館 日 毎週月曜日(但し11/23は開館)と11/24・11/25
■ 11/3(文化の日)は無料公開日
- 会 場 「文京ふるさと歴史館」地下鉄 本郷三丁目・春日町駅下車 徒歩5分
☆☆☆ 東京都文京区本郷4-9-29 TEL・03-3318-7221
- 入 場 料 一般300円・団体(20名以上)210円・中学生以下と65歳以下は無料

文京区には震災・戦災を免れた近代建築がたくさん残っています。一昨年トラストに寄贈された「安田邸」や重要文化財の「岩崎邸」などの近代建築の現状や分布、惜しくも消えた建物や移築された建物たちを紹介する展覧会です。

記念講演会

第2回 11/29(日)

「文京の近代建築大集合! —悉皆調査から—」
講師／伊郷吉信氏(建築家 伝統技法研究会)

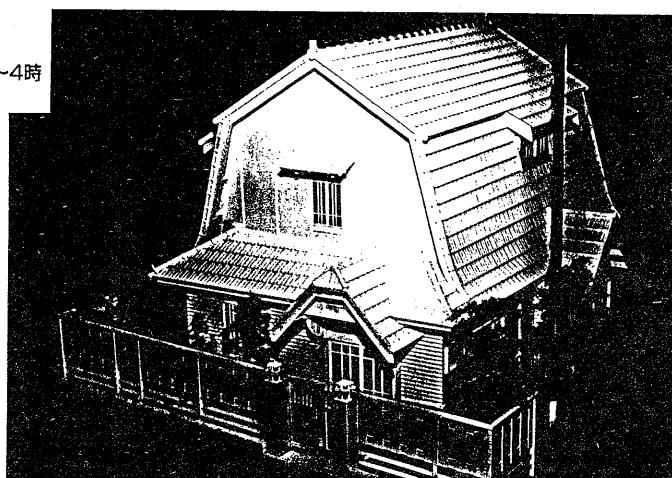
会場／文京区女性センター(本郷4-8-3) 時間／午後2時~4時
定員／100人(当日会場受付) 参加費／無料

大正12年に建てられた東京市営真砂町住宅の復元模型を作りました。始めてのフランス瓦に苦労しました。当時はこれが何軒も建ち並んでいたのです。



ところで模型の仕事って、好きなものを好きな時に好きなように作れば最高らしいですね、寺本さん。

まち探訪！ 十川百合子



文京のまちの様子や建物を、歩いて、目で見て実感してみませんか。

ナビゲーターは、建築家や建築史の専門家、地域に住む人などさまざま。

それぞれの視点でご案内します。

コース／開催日／ナビゲーター・内容

A 音羽周辺	11/18(水)	伊郷吉信氏 講談社の施設(昭和9年築の本館、野間道場など)を中心に見学します。
B 根津・弥生周辺	11/19(木)	大平茂男氏(建築家 伝統技法研究会) 山崎範子氏(谷根千工房) 下町の雰囲気を色濃く残す路地や長屋、商店の多く残るまちを歩きます。
C 千駄木周辺	11/20(金)	松塚昇氏(文京歴史的建物の活用を考える会代表) 都指定名勝・安田邸や、大正時代の茶室をもつ屋敷など、旧駒込林町をめぐります。
D 目白台・関口周辺	11/25(水)	伊郷吉信氏 日本女子大学成瀬記念講堂、和歌塾、薫雨園など、建物内部も見学できます。
E 西片周辺	11/26(木)	大山みどり氏(西片在住 文京歴史的建物の活用を考える会) 学者町といわれ、現在でも古い建物の残る閑静な住宅街・西片を歩きます。
F 本郷周辺	11/28(土)	大嶋信道氏(建築家) 震災・戦災の被害も少なく、明治期の建物も残る本郷通りや、東京大学の建物を探訪します。
G 湯島周辺	12/3(木)	大嶋信道氏 J・コンドル設計の国指定重要文化財・旧岩崎家住宅を訪れます。
H 苴荷谷・大塚周辺	12/4(金)	伊郷吉信氏 学校建築(塙町小学校やお茶の水女子大学)などをめぐります。
I 千石周辺	12/5(土)	志村直愛氏 出街造りの商家、洋館や教会など、和洋の混在したまち・千石を歩きます。

時間／午後2時~4時 定員／各コース20人(応募多數の場合はコースごとに抽選) 参加費／無料

応募方法／往復葉書に希望コース、住所、氏名、年齢、電話番号を明記し、ふるさと歴史館まで。

往復葉書1枚につき1人1コース。締切は11月7日(土)必着。ただし定員に満たない場合は、前日まで追加募集します。

■ 1999 年度会費について

1. 年会員 (会費 8000 円／年)
定例会聴講 (5回／年)、機関誌 (1回／年予定)、会報 (6回／年発行)
すべての同人の活動情報を会報以外にも提供する。

2. 会報購読会員 (会費 3000 円／年)
会報 (6回／年発行)
定例会聴講はそのつど聴講費を支払っていただきます。

3. 定例会聴講 (聴講費 2000 円／回)
年会員以外はそのつど聴講費を支払っていただきます。

☆年会員・会報購読会員の会費は1月から12月まで1年分とし、中途入会も上記の会費でお願いします。

☆定例会等で特別に資料などがある場合は別途実費となります。

☆新規入会、会員更新及び各種変更をなさる方は以下の表に必要事項を記入の上、新事務局までFAXするか郵送してください。★事務局が変わります★

☆会費納入は郵便局にて以下の口座にお振込み願います(手数料は各自負担)。

総合口座 10010-54101181

生活文化同人 代表吉田桂二

☆不明な点は新事務局までお問い合わせください。

〒169-0072 東京都新宿区大久保3-10-1-606

生活文化同人事務局 江原幸壱 TEL/FAX 03-3204-9373

◎生活文化同人はボランティアにて運営されている会です。滞りない回の運営のために、会費の納入は1月末日までにお願いします。期日までにご入金のない方には会報の発行を停止しますのでご了承ください。

生活文化同人事務局 江原 幸壱 行

■1999年度生活文化同人新規入会申し込み、及び会員更新・変更届け
会員数等の把握、名簿整理のため98年度会員の方もお送りください。

□新規会員 1. 年会員 2. 会報購読会員 (どちらかに○をつけてください)

□会員更新 1. 繼続 2. 年会員に変更 3. 会報購読会員に変更 4. 退会

フリガナ : _____

勤務先 : _____

勤務先住所 : 〒 _____

TEL - - - FAX - - -

自宅住所 : 〒 _____

TEL - - - FAX - - -

会報送り先: 勤務先 ・ 自宅 (どちらかに○をつけてください)

■世話人会報告

(11.12 於：飯田橋／もてなし 出席者 13 名)

1. 総会・忘年会予定
 - ・時間・場所については今号の表紙にて案内。
2. 来年度世話人担当について
 - ・事務局：江原幸壱（木の建築設計）、機関誌：編集長 益子昇（アカンサス建築工房）・副編集長 日影良孝（日影良孝 建築アトリエ）、会報：新井聰（連合設計社市谷建築事務所）、会計：岸未希亜（連合設計社市谷建築事務所） 以上
3. 機関誌 vol.3 について
 - ・今年中に発行します。
4. 第6回大平建築宿について
 - ・**第6回大平建築宿 8/13(金)～15(日)に開催します**
実行委員長：岡部知子、豊崎洋子 基調講演：森まゆみ氏 テーマ：仮称『町づくりの詩』

■同人活動

- ・吉田桂二、鈴木久子、吉塚幸雄、松井郁夫、日影良孝（ディテール秋季号 138 木造架構特集）
- ・長谷川順持（新しい住まい 10,11月号 執筆「床暖房のすべて」「冷暖房設備の選び方」
作品「いわきの家」、受賞 I NAXデザインコンテスト 98 最優賞作品テーマ賞「バリアフリーのやさしい暮らし／石巻の家」）
- ・日影良孝（田園住宅 「住み継ぐ」ための民家の再生）
- ・吉田桂二（絵ごころの旅 東京堂出版）
- ・住まい工房（住宅建築 「幸福を生む住まいを目指す北陸の地域型工務店」）

■事務局より

- ・来年度より同人事務局が変わりますので、お間違のないようよろしくお願ひいたします。
- ・会報原稿募集しています。私の近作、旅の報告、町並みスケッチなど何でもOKです。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・毎号原稿締切：奇数月 20 日

◆ 編集後期

- ・会報の担当をするようになってはや約束の2年間がたちました。なるべく多くの方に登場してもらい、また絵や写真をたくさん使って魅力ある誌面を心がけてきました。けれどまだ、ああもしたいこうもしたいという思いが残り、もう一年続投させていただくことにしました。来年も皆さんの積極的な誌面参加を期待します。(A)
- ・自宅FAX機の送信機能が故障して一月が経ちます。修理代が、新しいものが買えるほどかかると言われ、修理する気も買う気も失せてしまいました。今はすべてパソコンから送信しており、これが思いのほか便利。まさにペーパーレスです。当分はこれでいいそうです。(K)

会報編集局：〒102-0071 東京都千代田区富士見2-13-7

連合設計社市谷建築事務所 新井



98年度事務局：〒273-0031 千葉県船橋市西船5-7-2-201 Tel/Fax 0473-32-4413
生活文化同人事務局 松本昌義